

群馬県民俗調査報告書第四集  
群馬県教育委員会編

六合村の民俗

群馬県民俗調査報告書第四集

六合村の民俗

## 序

ここに群馬県民俗調査報告書第四集「吾妻郡六合村の民俗」を発刊しまして、広く県民の皆様、学界の方々等に御利用いただけますことを衷心よりよろこばしく存じます。

文化財の保護については、かつて「保存」という言葉が使われておられましたが、現在では単に保存につとめるばかりではなく、それを活用することによって国民の文化的向上に資することが重要な目的になっております。文化財保護法が公布されてから十余年、文化財保護についての関心がとみに昂まつて来ましたが、ときに「保存」にのみ片より、あるいは「活用」のみを強調する傾向が見られるのであります。特に、最近高度の経済成長により農山村の変貌は著しく、これに伴ないわが国民生活の推移を知る上に欠くべからざる民俗資料は、保存も活用も団らぬ急速に失われつつある実状ですが、今日、これを調査して記録保存をし、さらにこれが地域社会の創造と発展に活用されるように努めることは、文化財保護行政上重大な責務と考えられます。

県教育委員会では、昭和三十三年度より毎年県内研究家の協力を得て民俗調査を実施しており、その結果は、既に、利根郡片品村の民俗多野郡上野村の民俗、邑楽郡板倉町の民俗を刊行し、今回は昭和三十六年度に実施した結果をまとめたものであります。これによつて、群馬県の四隅の調査結果は一応完了したわけで、広く各界に活用されることを希望いたします。

六合村の民俗の一端については、かつて「北越雪譜」の著者鈴木牧之が「秋山記行」において紹介しておりますが、本県内において特色ある民俗伝承をもつ地帯であります。すなわち、当村は本県の西北端に位置し、落人伝説等を持つ山村で、群馬の秘郷とも称せられた土地であり、厳しい風土的条件に左右されながら生き続けてきた山の民の苦斗の歴史を物語る村であります。

今ここにこの調査書を刊行するにあたり、六合村当局をはじめ、村民あげての御協力、調査委員の献身的な努力のあつたことを附記し、各位に深甚の感謝を表す次第であります。

昭和三十八年三月

群馬県教育委員会

教育長 田

村

遂

六合村の民俗

## 凡例

- 一、資料の出点を明記すべきであるが、部落毎に數名から一齊聴取をしたため、話者については省略し、部落名を末尾に記してその地域を明らかにするに止めた。
- 二、この調査は、部落毎に調査したもの、項目別に分類してまとめたものである。
- 三、写真は、執筆担当者撮影以外のものは提供者を明記し、その出所を明らかにした。
- 四、文中、ゴシック体を用いたものは、特に民俗学上重要と思われるものに見出しの便をはかったためである。
- 五、索引は便宜上總説と前編分についてのみ作成した。
- 六、編集・校正は、県教育委員会社会教育課員および前橋市立女子高校教諭井田安雄があたった。

六合村の民俗

目次

俗

總口序  
說繪文

六合村の展望…………相葉伸一

二、経済圏の伝承……………

2、輸送と交易

3、農の周辺  
4、まげもの師と木地師

三、社会生活の民俗

2、食物と行事

4、住居

五 想念と覚かど  
四、儀礼の人生

1、お産の神々  
2、トビノハ妹など

3、送葬の習俗

六合村の部落概観 湯本貞司

大字赤岩

はじめに

交通・交易・生業  
外から來た行商人

畑の産物と仕出番

番

アトダズネ・嫁いだめ・名広め・お茶呼び・里帰り

七

山の産物と仕出番  
村へ入つて来た宗教家・芸人の類

番

奉公人と出稼ぎ  
奉公人・出稼ぎ・仲買人・入村の手続・借馬

番

村内の職業の変化  
引沼・生須・田代原・小倉・湯久保・広池・品木・日影

番

村の死・年一度の葬式・入字・耳ふたげ・両墓制  
引沼・生須・田代原・小倉・湯久保・広池・品木・日影

番

特殊作物

番

休日

番

自然磨と農事占

番

焼草刈り

番

田畠の單位

番

女の仕事と夜なべ

番

女の仕事 夜なべ・老女聞書き

番

種類と工程・杓子・鉢類・用具の購入・曲げ物仕事と資本関係・曲物類

番

おとろえ・山小屋の仕事とくらし  
獣物・猿・テンマル・バンドリ・タラシシ・猪・鹿・兔・狸・トヤマチ

番

人の一生

番

誕生から老人まで

番

1、誕生 2、儀礼

番

子供の遊び・子供組・若人会(わこうど会)・青年会

番

婚姻圈・結ばれるまで・カリブン・トマリゾメ・結婚の年令・嫁入り・

番

デキゴト・予知・死・ツゲ・遺骸と供物・死者の着物・通夜・野道具・ユカシ・納棺・出棺・ホーベー・埋葬・埋葬法・カーバレー・ジョーリ・チヨウベシ・キアケ・モンベイ・葬儀後・忌あけ・年忌・産婦の死・赤

番

子の死・年一度の葬式・入字・耳ふたげ・両墓制  
引沼・生須・田代原・小倉・湯久保・広池・品木・日影

番

族門松のこと  
イツケの共同・イツケ(マケ)の相荷

番

1、赤岩 2、生須 3、小雨 4、品木 5、引沼 6、世立 7、長平 8、根広 9、和光原

番

相続  
恩居  
イツケ(マケ)の相荷

番

1、引沼 2、小雨 3、広池 4、小倉 5、田代原 6、太子 7、引沼 8、根広 9、小倉 10、田代原

番

家族の私財  
1、下太子 2、湯久保 3、小雨 4、品木 5、広池 6、世立

番

1、引沼 2、小雨 3、広池 4、小倉 5、田代原 6、太子 7、引沼 8、根広 9、小倉 10、田代原

番

族制關係のことば  
1、印 2、印

番

1、日影 2、引沼

番

村落構成  
はじめに  
組織

番

寄合  
1、入り  
2、合

番

1、村  
2、仕事

番

1、共  
2、有  
3、地

番

部落のつき合いと労働交換

番



1、怪異  
2、山の怪  
3、妖怪  
4、異狀  
5、怪異のはなし

△参考資料▽

子守神社縁起

言語伝承　　言　　上野　勇　　上野　勇

一方

言

上野

勇

上野

一、部落の家	三三一
1、家のよび名	三三一
2、家々の由来	三三一
3、家の展開—その浮沈	三四四
4、家族関係と家族生活	三六一
二、部落の婚姻	三六一
1、婚姻年令	三七一
2、婚姻年令差	三八一
3、通婚圈	三八一
4、婚姻の社会形態	三九一
5、婚姻をめぐる諸慣行	三九一
三、相続と隠居	四〇一
1、アトツギ(相続人)	四〇一
2、相続の形態	四〇一
3、相続年令	四〇一
4、相続についての慣行	四〇一
5、隠居	四〇一
6、分家	四〇一
四、村落構造	四〇一
1、同族(本分家)	四〇一
2、親類(仲間ショウ)	四〇一
3、地域社会としての村落の組織	四〇一

付

木工関係のこと	二二
マゴダキ	二二
豆腐つくり・二十三夜まち・十一講	二二
山仕事を休む日、天狗のはなし	二二
お産のこと	二二
どうろくじん信仰・峰の千羽鳥・動物の呼び名・しょいつこ・マイ	二二
ノジヨウの弓・干草小屋・ツカ	二二
内子守りうた	二二
調査委員一覧	二二
引	二二
題字・県教育長 田村 遼	二二

秋山記行抄	三三一
上毛温泉遊記抄(復軒旅日記より)	三三一



引沼の道祖神（本文118・120・121頁参照 今井善一郎撮影）



花敷温泉のねどふみ（本文64頁参照 市川昭次郎撮影）



和光原部落の門松（本文92・115頁参照 関口正巳撮影）



正月につくるかかし神（根広）  
（本文118・120・140頁参照 都丸九一撮影）



暮坂峠への道（小雨より生須を望む）  
（本文26・27頁参照 近藤義雄撮影）

## まげもの（柄杓）の製作工程



① ハサミ



② 削り台



③ 錬 (せん) とデツコロ



④ 胸当



⑤ 曲げ板を削る



⑥ デツコロでまく



⑦ ハサミで固定して桜の度でとじる



⑧ 底板を当てる



⑨ 底板をはめる



⑩ 上下点検



⑪ 柄をつけて出来上り

本文67・68頁参照  
相葉 伸撮影

總

說

六合村の展望  
部落概況



調査団の基地湯ノ平温泉入口  
大崎福寿撮影

# 六合村の展望

相葉伸

## 一、六合という名の嶺と峠

群馬県吾妻郡六合村は県の西北部を占める山村で、現在の人口は三六八一人で、その密度は一平方キロに二十人強というより県下最低位の辺村である。もと三原莊に属し、天正十八年以後大部分は沼田の真田領となり、その後一部は天領となつた。旧藩制時代には、入山・生須・小雨・太子・赤岩・日影の集落に分れ、それぞれ完全に独立した六つの村であつたが、明治二十三年、西隣接の草津、前口の両村と合して、「一時「草津村」となつたが十一年を経た同三十三年に、もとの草津、前口だけ「草津町」となり、残余のもと六ヶ村を合せて一村として、そこに六合村が生れた。六合の合併の意だが、これをタニと読ませたのは古事記の例でもわかるように、天地四方をもつて六合とし、これをタニと読む古語によつてゐる。

村は大槻文彦が「南北十里、東西六、七里なる大村なれど、全村皆深山幽谷にして」(上毛温泉遊記)といつてゐるよう、全村深い嶺に蔽われ、それも南から北にゆくほど次第に高く、奥地はまさに「入山」の名にふさわしい。佐久間象山が香野日記に「山深く入るは……入山といふところにかゝりて入る事なり」といつてゐるもの尤もである。

北壁は上間山(2,300m)、白砂山(2,300m)をもつて越後(南魚沼郡湯沢町)に境とし、八十三山(2,400m)、大高山(2,500m)、赤石山(2,086m)、横手山(2,353m)、波峰(2,353m)の山系をもつて信

州(下高井郡山内町)に接している。東はこれより稍低い木戸山(700m)、相倉山(500m)、幕坂峠(2,066m)、高間山(2,300m)などといふような千五六百メートル前後の連山によって中之条町と接しており、南は長野原町に、西は草津町に、それぞれ八百乃至千メートル前後の山をもつて境としている。そして村のどまん中にも、弁天山(2,300m)が聳え、県境の山々との間に野反湖を抱くのをはじめ、千乃至千五六百メートルの峰々が、高い標高の裾を重ね合つていて。

この間隙を、縦って、村の中央部を北から南へ、白砂川、須川が縱断し、更にその支流長征川、湯川、大沢川、下平川、花園川が西から東へ、駒ヶ沢は東から西へ流れこれに注ぎ入り、どこも峻しい谿谷の美をなしてゐる。

唯この川は酸性が強く灌漑用水として不適であるばかりでなく、魚さえも住んでいない魚なき川であり、不毛の水である。草津白根山に端を発する小雨川や、須川の水は赤錆びて下流の吾妻川に至つても依然として酸性による赤錆は烈しい。この不毛の水は永い歳月に亘つて六合の村民の不遇を倍加してきた悲しい宿命でもあった。最近水質改善の調査と実践の機関も生れ、観意推進されているから、やがて奇麗な水への夢の実現もそう遠いことではないであろう。

このようなどころにもきびしい自然と闘いつゝ昔から住民があつたらしく繩文遺跡や土器を伴う住居址も発見されていることは驚異に値するし、それだけに中世以降は落人伝説も加つて、「宵の山本」や「明けの山本」の話もある。戦敗れて此の地に落ちのび大晦日に逃りついたも

のと、翌元旦についたものがあつたが、後者の子孫は今に門松をたてない、前者を宵の山本、後者を明けの山本といつてゐるのがそれである。

入山の最奥地元山には鉄鉱が出て、戦時中以降活動な掘さくが続いている。鉱員は地方「鉱夫」が主で、「渡り鉱夫」が少し上に、鉄山の歴史も新しいので、足尾銅山のようなとよのつた鉱夫の「仁義」は成長するにとまもなく、むしろ鉱夫気質は新らたな近代の組合方式に向つて進んでゐる。南部の太子地区には日本鋼管の製煉所が出来、一二三男の新らしい職場となつてゐるし、国鉄の長野原線も、太子まで乗り入れ僅かながら村唯一の鉄路を得て漸く六合も近代社会の中に一步をふみ入れた感じである。

村の面積は櫛笠村に次ぐ郡内第二位で後に邑楽全郡よりも広い。気候的には冬長く、作物の為に必要な夏の日周期が少い上に、山地特有の霧が巻き風雪も雨量も多い。それだけにこの住民に雨乞いの風習は少なくて、むしろ晴れを祈る「天気まつり」を草津白根山や野反湖の神に祈つて神酒をあげに行つたり、湯川で水を浴び諏訪神社（槻木）に裸詣りをしたりする実修を生んでいるときも、切実な自然環境の所産として、いわれないことはではない。

二、経済圏の伝承

1 交 通 路

この様なところにまともな道は抜けない。今でこそ長野原から須川の沿って、バスの通る県道ができ、村の唯一の幹線道路として、湯の平温泉駅や花敷、尻焼（新花敷）の両温泉を結んでおり、更に近年は野反湖までものばして湖畔のキャンプ場へ若い人々の夢を運ぶなど、観光宣伝に新財源の開拓をしてはいる。立派な鉄筋コンクリートの橋や近代的な吊橋

も最近は出来ては来たが、沢を渡る曲り道にかけられた昔ながらの木橋の中には、すでに朽ちるに任せ、乗客は橋の手前で一度おろされて、空のバスの通過するさえ危ぶむ眼で見つめる場所もある始末である。さればこそこうしたバス道路の抜けなかつた舊つての六合村の旧道はどう狭く、且つ草に蔽われて喰しかつたのも無理はない。

草津の温泉は早くひらくて天下の名湯として、その名が高かつたので、草津との往還は次のように、この村のどの部落からも通し、細々ながら村の往来となっていた。

- 1 日影草津道（日影から湯窪を経て草津へ）

3 2  
太子草津道（太子がみ草津）

4 荷付場草津道（入山荷付場から草津へ）

5 長平草津道（入山長平・小倉を経て草津へ）  
6 入山品木草津道（四万温泉から入山和光原

草津(一)

沢渡草津道

浴客は草履の熱湯に日は何度も入るのに並ぶ大抵のことではない。それは明らかに一つの苦行であり難行である。それで浴客は今日の遊興観

光の客とちがつて行者とみられ「湯通者」と呼ばれていたのである。長

海賊の海道者に魚雷の燃え脂の下や内臓など身体の柔らか部分にたゞれ  
てザクザクと汁が出るし、部分に錦をはさむのだが乾くとひきつれて烈

しくいたんで歩行さえも満足でない。股をひろげて這うばかりにして歩

富田永世が文政十一年八月十一日四万を立ち沢渡に湯浴みし暮坂峠を越えて生瀬（生須）に着いて日が暮れて一泊、翌日小雨を経て草津に着いているのもこの道であった。（富田永世著上毛温泉廻り）

一九は草津で湯治して、やはり同じこの道を「なます」、「奥坂峠」と歩いて通っている。道中で主徳を粋う「ごまの灰」につけられているが、偶然に茶を求めて立寄った生須のはずれの一軒が「目明しの家」であつた為、彼らが驚き逃げ去つて難をまぬかれていたのもこの道であったのだ。（草津道中金の草鞋）

最近この暮坂峠を歌人若山牧水の好んで通つた道として、「牧水コース」の名の下に、地元で新しい観光の宣伝にのせようとしている。

#### 長平草津道

信州松代の佐久間象山は嘉永元年六月十六日、長平草津道を逆に草津から小倉を経て、長平に泊り、和光原に出る道を、鉢山を求めて付近の嶺・川まで踏査し、詳細な健脚の旅をしている。（香野日記）彼は案内人五人、馬飼一人、衣類など背負う者六人、從者四人を率い、併せて十七人の一行で、長平から二里余の「金山沢」で「百九十年ばかり前に何金なりしか掘出せしよ」と聞いて尋ね入り失望して長平に泊つてゐる。「入山の内はすべて蟹多く蟻の巣接散らしたるようにしてしばしも眠る事能はずと聞きしかど此家（谷助といふ者の家）は造りてまだ程過ぎぬ故にや蚤も少なく快く睡れり」とて当時の入山の世評を伝えている。

尚興味深きは彼がこの旅で野反湖が信濃分ではなく上州分であることを痛憤しているところがある。余談ながら記せば、彼が和光原から弁天山

を登り、下つて野反湖に達し、湖から流れる水が魚野川・雜魚川と合流し、中津川となつて北に向い信州に流下するのを見て、文化十四年の上

信国境の紛争以来、この湖が上州分になったことを恐り、上信は日本の背梁だから山背で境すべきで、信濃に落ちる水の源を「上野の池」に入るゝ事その謂れなし」と断じ、帰藩の後古岡、古記録を微しこの誤りを正すといつて「いか岩の嶺」（弁天山のことであろう）を国境として野反

湖の信濃領を主張しているのは余談ながら此の道がもたらした當時識者の一見解を示している。

#### 入山品木草津道

ところで今一つの余り知られぬ草津道が村にある。明治十二年八月、上毛温泉遊記をかいした、言海の著者大槻文彦は四万温泉から草津への路を辿つて詳しく述べた。遊記に記しているのだ。それによれば彼は四万から相の倉峠を越え、白砂川を渡り、京ヶ原（大原のことであろう）を過ぎ、和光原にて、引沼、品木を経て草津に向つているが、ここに出てくる四万から相の倉峠を経て和光原に連する道は彼が通つたこの明治十二年の頃に初めて開通した道路らしく

「さてこの四万よりの新道は三里といえど、余が来りし心にては間の倉の峠を村界として前後二里づつありと覚えたり」といふ「新道」といつては、「路は未だ落成せずたゞ、茅限篭を刈り払いたる許にて草鞋も踏みぬかせんを恐るのみ。」とか、「かつ如何にも難所なれば」等という。また特に

「此の新道に牛は昨日始めて通れり」と云う、旅人の通行せしは余等二人ぞ初なるべき」

といつてゐるのは心惹かれる記事である。四万と草津を結ぶ新たなる「大槻コース」乃至「文彦コース」と名づくべき由緒といえよう。

このほか最近の新道として、野反湖から先の越後新道も、湖畔から地蔵峠を越え、越後に出て、昔の秋山郷最奥の秘境たる切明や小赤沢、大赤沢に通ずる村道が開かれ、バスもまた小赤沢まで、近く開通するといふ朗報もある。この道の旧道はかつて文政十一年（一八二八）越後の商人で且つ文人である鉢木牧之が、秋山郷の風物、民俗採集の旅を延ばして六合村の入山に南下してきた道でもある。彼の記録した「秋山紀行」が今回我々の六合村民俗調査に極めて魅力的な重要資料を提示してくれた。

われわれに統いて、偶々同じ「秋山紀行」を辿つて、山向うの越後の秋山郷



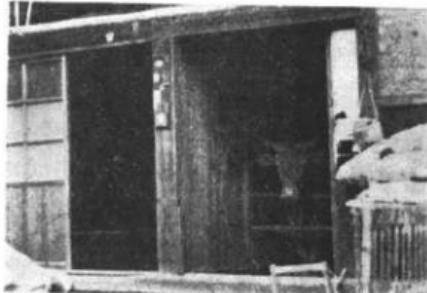
## ショイコを背負った人

湯の平闘牛への吊橋 相葉 仙 堤影

にした。自分もちもある  
が借り馬が多かつた。

昔も今も毎年七月頃になるとまつて信州渋温泉の方から芳が平を越えて七里の道をバクローが入山にやつてくる。一人で二十頭位もある、一匹の。青木川

植えが終る七月頃から翌年田植の初まる五月頃までを一期としてこれら馬を借りるのである。借りは一頭一  
期三円乃至四円の時が多かったが今は千円位になつた。馬ももっぱ



家人に逢う前に先ず牛に逢う

日影八幡所見 相葉 仙 摄影

のほか時に物好きな旅人などをのせることもあつたことは前記大槻文彦の紀行でもわかれる。

く、その冬住みの場所として昔はこの村の小雨にこもった。今その

十三日生州（牛領）を立ち吾妻川をわたりて山路にかゝる、雨もはれ、草津へ一里半ときけば心すゝみて足もかるくおぼゆ、此のあたりの里をなべて冬住とぞい、そは草津人の冬は雪つもりて寒にたへねば日あたりよき山本に家居をつくりおき十月の初より四月の初まではそこになん住める、さて冬住とはいふ也けり（上毛温泉廻）とは富田永世が文政十一年の紀行で云つてゐる言葉である。或は冬住が通称の地名になつていたかも知れない。従つて入湯者の往来は四月から十月の期間に限られ、その後は通行も途絶るので、草津街道に沿う各

2 輸送と交易

ら荷駄と堆肥取りの為で耕作の為ではなかった。ところが近年は牛の方が多い。入山の奥地の根広部落でさえ、二十二軒のうち

ところが近年は牛の方  
でさえ、二十二軒のうち  
馬二頭(借)に対して牛

部落はこの半年が荷難場であり宿場となる。荷付場や小雨は特に綱の幹線と草津への道の交叉点で、荷難場としての要地であったらしく、特に小雨は現在村役場もあり村の心臓部となっている。幕坂峠へかかる起点の生瀬部落は草津へ二里、峠へ二里、（そのさき峠から沢渡まで二里八町）という要衝で、ここが宿場として栄えたのは当然であろう。一皿二錢の煮〆を売ったという当時の上・下二軒の茶屋のうち、下の茶屋（市川氏）は今も昔の名残だけを止めている。十返舎一九が、どちらの茶屋かわからぬが、「なますの茶屋」にあるじ夫婦の白髪をみて「ぢどばどのつぶりは白髪大根なり、さればなますの茶屋のしるしか」

と狂歌している（諸国道中金の鞋）。富田水世の泊った「生州」といえる方山里的賤が家はやはりこの茶屋だったかも知れぬ。県坂寄りの村はずれには目明しの家もあって偶々道中警戒の役を果したことは前にも一九が述べている。

草津帰りの湯道者は、たゞれの為に勿論徒歩ではない。宿場の馬差は馬や駕籠の差配をする。馬の方は女衆でも（子供）でもやれるが若い奇麗な女衆が喜ばれたのは云うまでもない。馬子娘などが発達しなかつたのは奇妙だが、それだけ艶な病客との道中話がはずんだがかも知れない。しかし一体にこの村の人に生活の匂がないはどうしたことだろう。駕籠にのるのは上等のお客で異人のお客様も多かつたようだ。ここにも草津依存の生活があった。今日この縁の切れた沿道宿場部落の沈滯は止むなき時代の推移であるが、最近の「牧水コース」の企画は土地の人々にとって、夢みたびの期待であろう。

ところでわれわれはこの村にある今一つ別の駕籠について記さねばならない。それは病人を運ぶための「病人カゴ」である。カゴといつても大名や僧侶の乗るような箱カゴではなくて、竹で編んだそまつなカゴである。これは各部落でつくって、平素は部落の觀音堂などの堂においてあるが、重病人が出ると、このカゴにのせて、「ホーベー」（組）で交



病人カゴ（平素は堂の片すみに仏具と共に放置されている。）（入山京塚）

相葉 伸 撮影



病人カゴ（入山根広）

相葉 伸 撮影

代にか  
ついで  
二里の  
山道を  
三時間  
近くか  
よって  
草津の  
医者に  
つれて  
ゆく。  
者には中々かれ  
ない。というのは  
この村は永い歳月  
の間無医村のまゝ  
に放置されていた  
からだ。明治十年  
の記録（村誌）に  
よれば、生瀬に一  
戸、赤岩に一戸の  
医者があつた。赤  
岩の医者は湯本氏  
(現在の教育長)  
をしている湯本貞  
俊齊(天保期)省

齊の父子（維新期）二代、医と共に寺子屋も開き近隣に知られた当時の文化人であつて、俊齊は又名主として地方のよい指導者であったようだ。然しこの広い村で、二戸の医者ではその行動半径も限界がある。その後この二戸も医を廃したあとは再びもとの無医村となつた。

村人は勢い信仰やマジナイヤオガミヤ（占い）に頼ることも多かつたようである。だから大抵の病気は「風邪ぐれい」にしてしまつて本人も周囲も我慢してしまつたり、富山の置薬をのんだり、長びいてくると小首をかしげて何かの障りかと、部落の「オガミヤ」に占つて貰つたりした。こういう時の「オガミヤ」の託宣はいつももたいては同じであった。「寒れば癒る！」といふのであった。

だからいざ草津の医者にかかると踏み切った時は病すで驚く、多くは瀕死の重病で、中々生きていれば再び帰れぬ者が多かつたようだし、中には途中のカゴの中で事切れる時もあった。ともあれこうしたカゴを部落共同でつくったことが、かつてのこの村の最大の医療施設であったのである。それでいざ出発となると組や部落の中から一戸一人が出て、大体十人から十五人位が「今日はカゴヤに頼まれた」と当然の義務として水や湯さましや蒲団を持って手弁正当従い、時に交代してカゴをかついで草津の医者まで見送つていった。その形はあだかも不帰の人を送る葬送の儀礼を思わせるものがあった。貧しい辺地の無医村では医者にかかる時はそのまゝ死の時であつたという永い経験の累積がもたらしたものかも知れない。カゴが平素部落のお堂などに他の葬具や仏具などと一緒に無造作に放つておかれているのも、何かそんな感を強めている。

このことを裏かえして云えは、「村の人は死ぬ時でなければ医者にかかりない」という事実もあつたようだ。中でも不幸な人はその臨終さえ医者に診てもらはず、死後空の篤籠だけが部落民に送られて草津の医者の玄関につくと、医者は篤籠の垂れを開けて、誰も乗っていないのを見ると黙つて死亡診断書を書き与えたという話のものこつている。最近までそうであったと村人は語つている。かくて「病人カゴ」の役割はまた多

彩である。

### 文 易

輸送に伴う村の経済生活は亦当然草津依存であった。草津では盆の門火を薪で焚くので、その薪を五寸直径位にまとめた束を「お盆薪」として草津に売りにいっただし、又四季を問わず薪は草津に駄馬で運び出した。「荷付場」はその荷出場で、一寸乃至一寸五分径で長さ二尺の薪四把を馬につけて、一回の売上けが明治四十年頃で二十錢であった。菜や大根も運ぶが、草津はアヤメの咲く頃が栄えた。従つて交易はこの頃が活氣があった。その頃娘たちは草津の湯宿に女中にゆき、「三三男はカゴカツギヤ馬方」としていった。養子にゆく者もあった。鹿児島戦争には戸主は微兵免除であったので、微兵のがれの「籍もらい」として形式的な養子となつたものもあつたようだ。カゴのない頃はショイコで背負つて柄杓やメンバやシヤモジや下駄を草津や温泉まで売りにいった。下駄村は川ダルミ・アタラ・ソミで、特に温泉下駄はソミで作り、歯をつけた形だけにして煙でいぶしたものを卸した。帰りには酒や羊羹を背負つて帰ってきたという。一人前の荷は十貫であった。この頃入山ではリンドウの花を採つて草津に売りにいたり、日影地区では子供にゲンノショウコを一耕地ずつ割りあてて草津の薬種屋に売つたりする。村へ来る旅人はアメヤ・ゴゼ・アホダラキヨウ・セイモン・初輪壳などであつたが、渡り職人には木挽きが越中からよく来た。日影地区あたりでは十人から十五人位集団できて飯場を立ててやるとそこで二三ヶ月滞在して仕事をしてよく唄つたりしていつたが、村の人はあまりつきあわなかつたようだ。芝居の師匠は招かれてきた。村の人は明治の初め頃はよく芝居をやつたが、梨木では竹内伊十郎さんの父（文久二年生）の頃は特に盛んでその師匠は岩島・中之条・三島などから招いた。それで一の谷や忠臣蔵などをやつた。掛舞台をかけ、買芝居もやつたのでそれらの連中も村に来た。大正頃まではよく恋愛で買つたという。見物席はハネギで屋根にしたということだ。きびしい自然環境に向つて、秋田股

引（モンベ）をはいてかせぐこの村の人にそんな明るい話題があったかと不思議な位である。

### 3 農の周辺

山坂の村には耕地は少い。わけて水田に乏しく米の大多数は陸稲によつてゐるが、それとも驚くほど稀少であり、住民は米以外の麦・粟・稗・黍等の雜穀を常食にしていた。試みに明治十年の「物産取調書」によつて小雨部落だけの米穀の產出情況をみると、

玄米 三石一斗 金七円二十三錢五厘

大麦 七十石 金百三十七円二十五錢

小麦 十九石六斗 金七十五円三十八錢五厘

大豆 十一石二斗 金五十円九錢

栗 十四石 金三十円四十二錢

黍 八石四斗 金十八円六十六錢六厘

稗 八十四石 金百十六円六十六錢六厘

蕎麦 二十石 金三十九円二十一錢五厘

とあり、大麦七十石、稗八十四石に対し米は僅かに三石に過ぎない。従つて住民の昔の常食に粟・稗の雜穀が多かつた理由もうなずける。今はとうもろこしが多くなった。これは牛飼の飼料にする為である。

日影地区小字八幡部落のうちには「八升蔵」という地名があるが普通「一升蔵」というのは堆肥十貫目をヒトビタといふ、これで大麦一升を貯くことをいう。ところで一畝の土地に要する堆肥は四ビタで、これをヒトツカともいふ。これが四升蔵であるから、「八升蔵」はその倍に当る。又「八升蔵」の近くに日影及び太子地区に「一貫地」という地名もある。これは一貫文の土地の意であろう。耕地の少い六合村としては一等地の乏しさに烟は次第に山の斜面にのび坂煙となる。従つて性質上焼烟が多く遠いのは家から二十町も離れていることもある。そんな時は

耕地に掘立小屋を建てそこに寝起きすることもあるが、主として湯茶を沸かして休憩したり農具置場にしている。二段の木で屋根の四隅を支えるのが特徴でウダツゴヤと呼んでいる。日影地区や川を隔てた赤岩地区的斜面の坂烟には点々とこの原始的なウダツ小屋が望めできる。

#### マンヨウチ

尚入山地区の根広部落で聞いた言葉に「マンヨウチ」というのがあつた。国有林一段歩借りると、ほかに「二畝だけを余分に自分勝手に開墾して使うことが暗黙のうちに認められていたらしい。この場合この「二畝の土地のことを「マンヨウチ」というのだという。「マンヨウチ」とは面白い言葉だ。

畠用地をこまかして使つてゐる。土地お役人の目をくらまし使つてゐる土地。當林局関係ではふつつかつてることばである。

マンヨウチは発見されれば正當代價で本人に払下げる。ただしマンヨウチ名を藉りて大木等を伐採して売つた場合は専分をうける。

蔬菜類では僅かに菜・大根・牛蒡・馬鈴薯の類をつくつて、いずれも自家の需要をみたすだけにすぎなかつたが、温泉周辺の梨木・荷付場・沼尾・湯久保・田代原等の部落では近頃蔬菜一辺倒の都市近郊の農業様相上、変つて來ているとのことである。鶏は飼つても卵をとつたり肉を食うためではなく、乏しい米穀類の落ち穂のもつたいなしに、これを拾わせる為に一戸ではんの一、二羽を飼うにすぎない。「家をもつたら鶏は飼うものだ」とは荷付場、梨木あたりの人々がこぼれ作物を粗末にしない為に、昔から親代々聞かされてきた言葉だというが、今では百羽から五百羽ぐらい飼う農家も出来て、卵は草津・湯の平・花敷等の温泉に、引張りだこのように売れるのことである。

#### 副業

農家の本業以外では養蚕が盛んで、長野原与喜屋の養蚕の神への信仰も驚く、入山を除くほとんどの部落の農家の主婦の仕事になつておる。又女衆は昔よく糸引きをしたり、麻をつくつて売つたり、麻布を織つた

り、その麻布を染めて長野原から買ってきた疊表にへりをつけて売った。それで織ったものはセーミという。渋とショーエンで染めて疊表につけた。また織の繩をつくつたりした。これは藤の根をぬいて水に浸して洗って石の上におき木槌でよく叩き、桶に入れて揉み出すとわらび粉が沈む。布でこれをこして粉にする。これは今日は傘を張る糊になる。この糊は粘着力もよく、虫がつかないのでよく使われた。糊粉一升は大正九年頃二円であった。当時米も一升二円だったから副業としてはよい収入になった。のこったわらびの穀糰は繩に編つた。しゅろ繩の代用としてよく売れた。この繩を「シナワ」と呼んでいた。夕食後の仕事を「オナベ」というが、昔ランプもない時代には松の根ッ子(ヒデ)など燃やした明りで繩がない、草鞋をつくつた。入山一帯ではスゲムシの副業がある。山野に自生するスゲを刈り取って花敷温泉の湧き出る川の湯につけ、足でふみつける。これをオ踏みとう。(一時若い娘が夜半に一糸まとわざ踏むといった興味本位の誇張した宣伝が流れている。) ナリズムの話題となつたこともあるが、これを天日干して機足にかけて織る。普通ヒトリとサシゴと呼ばれる二人がけで織る。「ヒトリ」とは、織りの主役(本織り)で、「サシゴ」は「ヒトリ」の織るときに草を差し出す補助役のことである。

各部落の九分九厘までは農業だが、その他の職業も少數ある。明治十一年の村誌によれば、

小雨 農二十五戸に対し商五戸、工三戸、女の養蚕・麻製造七〇人  
太子 農二十戸に対し商五戸、工三戸、医一戸、女の雜業九十一人  
日影 農五十戸に対し商二戸、女の養蚕・麻布織一〇九人  
生須 農十八戸に対し商一戸、工二戸、女の養蚕十八人  
赤岩 農二十戸に対し商五戸、工三戸、医一戸、女の雜業九十一人  
入山 農一七〇戸に対し商五戸、工一七五戸、医二戸、女のわらび繩、苔蘚織一一五人

とある。これと現在の実態とを比較する為に仮に日影地区を抽出してみると、

商一戸(肥料、穀類、雜貨)、運搬業一戸、大工一戸、俸給生活者二戸(役場吏員・教師)、鍛冶一戸、農九十九戸

となる。

もともと六合村の日影地区は八幡・中組・下沢・湯澤の四部落に分かれているが、これらの職業を構成する家々は現在一~三世帯、戸数にして一〇四戸で、山本姓・富沢姓・茂木姓・橋爪姓・萩原姓などが主たるものであり、それぞれ次の様な家印をもつていて五月織や、焼物につけている。

### ⑤ 山本 ⑥ 富沢 ⑦ 小池 余茂木 羽橋丸 命萩原

屋号として「カジャヤ」と呼ばれる家がある。今は鍛冶屋をしていないが屋号だけになつて部落の端にある。現在の「鍛冶一戸」は別の一軒である。これからみると、現在戸数では一〇四戸(一三世帯)と明治十一年(五十戸)の二倍に増加しているが、事実増したのは農戸数で、他の職業の戸数は約九十年前とほとんど変わらないことになる。これは一例で、この割合は他の地区について見ても略同率である。これを裏付ける為に参考資料として明治二十二年草津村と前口村との六地区が合併して草津村となつた時の記録と最近(三十六年四月一日現在)との戸数の動態を記すと次の様になる。

村の名	明治22年当時	昭和36年現在
小雨村	二八戸	六四世帯
	一七二人	三〇九人
太子村	二二戸	八〇世帯
	一四六人	三四四人

生須村

一八戸

二〇世帯

二三人

赤岩村

一〇八人

一〇九世帯

日影村

六二戸

五八八人

三一一人

五一戸

一一世帯

一三六人

三五八戸

六二一人

一九一七人

三六八一人

三五二世帯

一七八戸

一六八六人

七三八世帯

合計

三五八戸

六二一人

一九一七人

三六八一人

三五二世帯

一七八戸

一六八六人

七三八世帯

一九一七人

三六八一人

三五二世帯

一九一七人

三六八一人

三五二世帯

一九一七人

三六八一人

三五二世帯

唯注意すべきは、農業戸数は増加しても、耕地がその割に殖えていないことだ。耕地の増加には限界がある。そこで二、三男や娘たちは太子津へ商いを持ち出す栗毛、曲物、下駄、枕、天秤棒、都て右林のものを細工して」とある通り、今も入山部落には本地師、曲物師がいて、前者はこね鉢、飯の大へら、後者はメンバや柄杓等をつくっている。これらの職人はまげの師、又はまげ師と呼ばれるものであるが、明治三十年頃をピークにして、この売れゆきは漸次減少してきたので、人も生産も共に減った。根広部落の中村豊作さん(82歳)はその少いまげ師の一人である。彼の話によれば、その技術は和光原部落の「甚兵衛が長野県から教つてきた」のを教えられたという。技術は信州からの流伝らしい。

#### 4 まげの師と本地師

「秋山紀行」に「草津さえ深山の奥なるに、此の入山はこと更ら深山

薄い板を曲げてつくった弁当箱メンバはアルミの弁当箱ができるから

は完全に押されて今はほとんど作らなくなつたが、柄杓は今も作られる。草津の湯道者(湯治客)に売る湯柄杓や家庭の水柄杓、お産の神様に願かけに供える底抜け柄杓など僅かな需要が、細々と昔の名残をとどめている。

材料は唐繪と呼ぶヒノキの一種で、秋まで仕入れ(ヤマドリといふ)をし、仕上げはもっぱら冬の仕事となる。ヤマドリの時は遂々深入りをして、野反を越え越後側の山まで入り、国有林を伐採したこともあり盗伐事件になったこともあったという。以来国有林の監視者(彼らはリンクサンと呼ぶ)の目がこわかつたらしく。

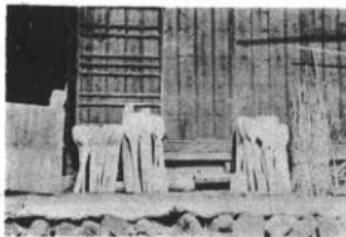
ヤマドリした材料は三十センチ位ずつの長さに鋸でひき、鉈(板割り鉈と呼ぶ)で割り、薄い短冊形の板にする。これは曲げ板と呼ばれる。

更にこれを鉈(両端に柄があり、両手にもつて手前に引いて削る片刃のもの)で、一ミリ位の薄さに引き削る。この時は胸に当て木(ムネアテ)という)をつけ、曲板をあてて引き削る。これを熱湯で茹で柔らかくして、テツコロと呼ぶ丸木のローラーにかけて、力を入れてころがらしあばつておく、そのあと丸みのついたものを二日程日向で乾かしたもの

を一升入(一・八リットル)なり、五合入(九百ミリリットル)なりの大きさに輪にして、桜の樹皮で縫じる。これに柄をつけば仕上りとなる。(工程口絵写真参照)

明治三十年前後は信州や越後へも売れていた。そつから商人が買に来たからだ。柄杓は当時一升入は三十二本をヒトコレーといふ、八十銭位であった。五合入りは九十本、三合入りは百二十本、二升入りは二十八本がヒトコレーであった。

まげ師と似たものに本地師がある。これは山から原材料(サキヤヤ)を取り、必要な大きさにタマギリにしたものを使い、コギリでひき、テオノ(ヨキ)で粗型をつくる。これまでの工程がアラキドリであ



仕上つたシヤモジを路傍に乾す木地師の家  
山仕事もやるのか人気がない（根広所見）



ながしにおかれたコネバチとシヤモジ  
(京塚所見)

— 相 葉 伸 撮 影 —

る。それからチョーナや原  
始的な手マワシロクロにか  
ける。こうして木の盆や、  
コネバチ、シヤモジなども  
つくる。入山一帯の家の台  
所にはこのようなコネバチ  
や大きなシヤモジがみられ  
る。殊に旅館など大人數の  
飲食場などで使う大シヤモ  
ジが日当りのよい縁に大量  
に干してあるのをよく見か  
けるが、これが木地師の家  
である。まげもの師も木地  
師の十二様を職業の神とし  
て信仰している。彼らは  
十二様は男性だとみていい。  
る。

### 三、社会生活の民俗

#### 1 主食と間食

水田が少く、僅かな雑穀に頼らねばならぬ六合村は一般の村人の主食  
に粟・稗・麦が用いられることが多かった。四つ足も食べず、酸性の川  
からは川魚もとれない。鶏は飼っていても前記の様にこぼれ作物を粗末  
にしない為だから飼つても一羽にすぎず、卵も鶏肉もとろうとしない。  
卵を食べる時腹の中で雞が啼くといったりして売る者も買う者もな  
い。つぶしても食べない。蛋白質はもっぱら行商のニシンで間に合わせ  
たという。

子供の間食には豆煎りやコウセンをつくったり、チョーセン焼餅（稗  
の粉で団子をつくって焼いたもの）やタズやワラビを叩いてとった粉で  
焼き餅にしたり、秋にはどんぐりを粉にして稗に混ぜて煮たりして与え  
た。一月十四日の鳥追祭には子供たちは戸毎に薪一本との日だけつく  
る米の団子をせびり、チヨウヤ（集会所）に集つて食べ合つた。早春の  
頃ともなれば、

「じやおう椎現水権現今までしゃでえめ夏になりたら焼死ぬぞ」  
と唄いながら、ふきのとうを探して廻つて歩いたものだという。「じ  
おう」はふきのとうの方言である。またもの日には手打のうどんをつく  
り、五月四日にはトロ芋を食べた。同じ調査委員の大崎福寿氏が世立  
て採取した話は面白い。弟思いの兄が弟にせめて世間のうまいものを食  
べさせたいと長芋を食べさせたら弟は、こんなうまいものを見はいつも  
食べていただと怒つた。兄はなだめたが納得させることができず、やむ  
なく自分の咽喉をかき切つて見せたらそこから「アオズ」（青虫）が出  
ただけであつたという。食糧不足を背景に生れたトゲ／＼しい昔話であ  
る。そういえばこの村へ来て犬を見かけることが少ない。犬は昔からど

こでも割合に飼わなかつたという。秩父のお犬様（三峯神社）の信仰があるにはあるが、そればかりではあるまい。おそらく食糧不足の為に余分なものは飼わなかつたのである。

こんなわけで、一寸した食物でも他を抜いてできるところは人に美まれば、たたえられ、すぐ名物になる。入山地区で「根広の甘酒」長平の南北、小倉のすも」と謳われたのもそれである。

## 2 食物と行事

食物は乏しくとも必ず食べ物に縁のある年中行事となれば、子供らにとって特に嬉しい。節分には「オニギライ」の煎豆を瓶一杯ほそばりながら「鬼は外、福は内、鬼の目ン玉ぶつこねけ！」と力一杯豆を撒く子供らの声は威勢がよい。旧七月十三日には門火を焚く。梨木では庭でヒデを焚き、京塚などは麦藁を束にして焚き、荷付場の方向へきて横手まで迎え送る。その時

オジイサン、オバアサン、コノ火ノアカリデオイデオイデ

オジイサンオバアサンコノ火ノアカリデオカエリ オカエリ（梨木、荷付場、京塚）

オ盆サンオ盆サン コノ火ノアカリデゴサラツシヤイ ゴサラツシヤイ

オ盆サンオ盆サンコノ火ノアカリデカエラツシヤイ カエラツシヤイ（日影地区一円）

と子供らがくりかえし大声でとなえてゆく。子供たちはお盆様は旧七月一日の「カマノフタ」の日（釜のふたのあく日）に出発し、十三日間かよつて來たと教えられているのだ。

家では竹で盆桶を四角につくり、山の花（ところにより紅葉）を飾る。入山地区的盆桶は白樺の枝木を三本切ってきて、一本を立て、一本を横木にしてこれに結い、横木に手打うどんをぶらさげ前に壇をおくる。十三日には手打うどんに、ジャガイモの天ぷら、（入山では手打うどん

に赤飯、まんじゅう）を、十六日にはボタモチ、ダンゴをつくり、墓と盆棚に供える。十三日を「薦靈鬼」と呼んでおり、特に無縫仏をして別には供えない。施餽鬼を一般に子供の供養と信じているようだ。

盆の唄や盆踊りなどどこにも特に見当らなかつたが、農も休むし、親にも子にもよい日だ。入山の根広その他は茄子やキウリの馬をつくらるが、村の南半はつくらない。キウリをつくらぬ禁忌があるからだ。

「とうかんや、とうかんや、とうかんやはいいもんだ。朝ソバカリに星ダンゴ、夜餅食つちや腹太鼓」（入山地区）

これは新築を東ねて地面を打ちまわる十日夜の喜びをうたつてゐるが、太子地区では十日夜の晩にカシキをつくり、栗、黍の餅をついて其のフトコロに入れてやる慣習がある。こうした土地の子供だけに、同じカカシアゲの行事も何か身に詠みていいらしい。

## 3 ダンナ組と子供組など

荷付場部落には戸主だけの常会が今もある。つまり「ダンナダミ」である。毎月二十七日お調訪様の縁日の日に集まる。昔は無屋の集りや、年貢・慶弔・まつりのはか村貯金により貸出し、あとで利子などの利益を分配したりしたらしいが、今は部落の相談事をし、そのあと酒二升で懇親



常会の議題

無尽・年貢・慶弔・祭・村貯金等。写真はその一つ、嘉永6年のもの。（小雨地区）

相葉 伸撮影

親となる宿はまわり番でその日は午後二時頃から四時頃まで、こ

の日は男は無論だが女にとつても部落中の農体日となる。常会の終る頃には、家では主婦が神棚にお神酒を上げ、うどんを作つて夫の帰りを待つといふ。この

夜は部落十七戸

にとって嬉しい

家庭団欒の日と

もなるのであ

る。

この部落には

また子供組の常

会もある。地蔵

堂にオヤツをも

ちよつて相談し

たり遊んだりす

る会である。今

は学校の上級生

が指導者にな

る。

これらの特定

の年令階層の常

会とは別に部落

の男女が出かけ

て飲み食いする

講の日もある。

ビシヤモン講・棟名講・觀音講などあるが、荷付場の觀音様の縁日など

でも旧二月十八日、昔は堂でおこもりをし、そこに寝たり、中には夜明

しをするものもあった。今はだんだん廃れてきたのである。(二間四方

のこの觀音堂の中には代議士候補の大きな花輪があった。有名な石の道



荷付場の觀音堂左方の斜面に白く小さく見えるのが右図の道祖神



抱擁相愛の道祖神(荷付場)

— 相葉伸撮影 —



共同井戸(荷付場)

相葉伸撮影

「夜這い」を「男のつとめ」とした地域社会の芸術的昇華でもある。その前には五寸程の丸木の一部を剥いて顔にした「道祖神」が何体もあがつていた。一月十四日にかけてあげたものでヤサシイ顔にかゝれてある。(同じ一月十四日にカツボタ(櫻)でつくつて神棚にあげる。一戸一本のカカシ神はイカメシイ顔に書くのだそうだ。)飲料水は共同



梨木の地蔵堂  
子供の常会の場  
石碑はヒキハカ、手  
前はボチ(ウメハカ)

相葉伸撮影

祖神が見事な相愛の姿で、この堂の傍の斜面の草の中に佇つてゐる。近年まで

に佇つてゐる。

井戸に頼ることが多く、そこに井戸神様を祀っている。川は酸性が強いため使つていいない。ここは又水汲みにくる部落の人のさゝやかな社交の場となるのである。

#### 4 住 居

日影地区にはこんな諺があった。

「平沢とかけて何と解く、裸馬と解く、

心は鞍（倉）がない。」

これは日影の八幡部落の中の小部落平沢をあざわらつたものだが、そ

の嘲笑した周辺部落といえどもそれ程のものではない。奇麗な白壁の倉などはほとんど見られず、荒ら壁の粗末なものにすぎない。少い宅地の庭はほとんど無く、ぎりぎり一杯に建つた、畳室付きの二階家や三階家には手スリが突き出し、その上部に屋根をうけた梁をのばしたセゲエ造りが多く目立つ。天井は昔は簾子張だったがこの頃は板張に切代え、温度の調節を考えて、屋根裏までも有効に利用するようになっている。この形は明治以後に多くなった。家中には大抵台所とザシキの二カ所に炉をつくり、主人が大黒柱を背に坐る正面の座を「ダンナザシキ」、向つて左が「オツカサンザシキ」（ワンザともいう）で、「ダンナザシキ」の向い側（つまりダンナザシキの真ん前に向いあつた坐が嫁のすわるところで、此処は本来キシリ（木戸）と呼ぶのが一般であるのに荷付場部落では「ヨコサ」と呼んでいたのには驚いた。お客様はオツカサンザシキ（ワンザ）の真ん前で「シタサ」と呼んでいる。

ところで長男夫婦が出来ると父が他の家族をつれて新宅に出る隣居分家の風もある。娘は姑が同じ家に住む限り主婦権の移動（セイフワタシ）はないのである。

#### 5 禁忌と呪など

禁忌 食物の乏しい割合に禁忌作物が多い。村一帯に白根山の氏子と

して里芋とゴマをつくらない。梨木ではキウリを作らない。伝染病がかつて流行した時キウリは作らぬといって願をかけたので、代りに白瓜をつくるという。根広ではウツダの四軒だけが鱈を食わない。

玩具 鳴楽は乏しくとも子供は天真爛漫遊び道具を見つける。「アマツコ」がそれだ。これは学名を「花枝」と呼ぶ植物で梢円形の葉の中央に白がかった黄色い花が咲き、後に実となつて怡度身の様な感じになる。この葉は皮が鞘のように引くと簡単にぬけるので、これを刀として駆けまわるのである。

咒 こんな元気な子供たちも一度家屋の中に入れば「番をふむな、」「まだぐな」、「枕にするな」、「まただら戴け」、「いやなお客の時は手拭をかぶせて逆さまに立てる」。「働きにゆく人のすぐ後を掃くな」などといわれる。村人にとっては、帶そのものが神性をもつてゐる。邪魔を払い出し、福を掃きこむ威力あるものとして扱われる。元旦の朝の掃除は三回内に掃き込んでから外に掃き出せというし、金然元旦には掃かせない家もある。邪惡や禍を掃き出す力をもつ神は、また入りくる新らな幸福をも追出して了う靈力をもつものとして恐れたためであろう。

厄落し 楠や手拭を三本辻にする。（梨木、荷付場）

カギン様（雷除け） 節



カギン様（京塚所見）  
相葉 伸撮影

「カギンサマ」で、初雷の時に紙包みの豆を食べる（梨木、荷付場、京

魔除けの縁 墓場には鎌をさしておくる。魔除けの為だという。入山地でよくやられる。

子供の虫除け 鎌をかりて子供を撫でる呪いのあとで御祓まいりのとき二挺にしてあげる。今はブリキで作る。風切り鎌といい、風の方向へ刃を向けて土に立てる。(梨木、荷付場)

耳病 道祖神に椀に穴をあけて下げる(梨木、荷付

血止め 桑の木のもとについている小豆色の苔のようものをとつてつける(梨木、荷付場)。

村の各戸の戸口に熊野の午 王札が貼ってある。鳥が群れ飛んでいる黒刷の画だが、病気やお産のときはその中の中を向いて飛んでいる鳥を切り抜いて晒下すればよい。メカゴ(眼病) 井戸のふちで、フルイで井戸の水を覗けばなる。水いぼ 水いぼを擦るときは鎮守(諏訪神社)の石をかりてきてあとで二つにして返す(梨木、荷付場)



(京塚) 塚(びくの右下のもの)  
王札 熊野社の牛神

かくて数多い呪はそのまま護身であり、儀式もあったのである。

方言 この地で来て面白く見いたのは「コナツチ」という言葉であった。「コナツチ」と「ゆく」の用例が示す様に親しみと軽さを含む「お前」といった意味の複数である。単数は「コント」という。このほかではオッカアドン(母、主婦)、ヂツサマ(祖父)、クンナサロ(下さい)、ゴツアンデカンス(物を貰う時)。ありがとう、イブセエ(屋根など上った子供に対し、あぶない)、クダーレ(下さい)、じろ(いろり)、ダボウヤロ(子供を叱るとき)、ヨウジョウシナサイ(用心せよ、山仕事にゆく人などに)、タッジ(谷のどんづまり)、テッカイ(山の頂上)、ダッジ(足の早いこと)などがあつて、それなりに親愛と善意を交えて交わされていて、秋山紀行にのった方言が今も半分は残っている。

#### 四、儀礼の人生

##### 1 お産の神々

無医村で一番不安なものはお産であったが、無論助産婦などはない。部落で経験ある老婆が取り上げ婆となる。産婦は取上げ婆の指導で前かみになつて坐つて生むのである。

この村の大きな特徴として、村の各地に産の神が夥しく多く、それへの信仰が盛んなのも、この村の産への不安と医療施設の極度の貧困を物語ついている。

荷付場の子安様 京塚のコモリ様  
大胡の産婆様 雪冰岬の熊野神社

などがそれである。熊野を除いて他は底抜け柄杓を供えて頼み、御祓まつた後、笹に湯をつけて赤子を洗つてから、その笹とワラの輪を神社にあげる。(同前)

ホソー(天然痘) ホウソウ神は屋根に祀る(梨木、荷付場)。赤子が生れるとワラで輪を二つくり赤子の頭に上げたり尻にいたりした後、笹に湯をつけて赤子を洗つてから、その笹とワラの輪を神社にあげる。(同前)

たが、これは熊野へ安座を頼んだ家であつた。京塚の「ヨモギ様」の信仰圈は全村に亘って広く且つ深かつた。変つてゐるのはこの社は現在山口米司氏の個人經營で、二月廿五日の昇殿祭りで、子持女が大勢集る。昔は参詣者全部に酒や赤飯を出した。氣の永い人は一日中いたといふ。「子守大明神の守護、子守神社」という神札は赤岩から法印がきて作る。



こもり様の寄進帳（慶応4年4月のもの）の一部  
初めに「信心寄進の御方」とあり男の名が並ぶ。  
信仰團がよくわかる 相葉伸撮影

の「コモリ様」の信  
のはこの社は現在山  
持女が大勢集る。昔  
古中いたといふ。  
がら法印がきて作る  
といふ。これは元



いづみ籠と熊野神社の安産祈願のシメ縄  
右端に立つは産婦（日影地区八幡）

相樂 仲撮影



### いづみ橋（入山根店）

相素 仲 摄影

(入山ではいづみ桶

「いづみ」は、こともの意で、秋山紀行にも「重量を呵るには此うづめ」とあり、「いづみ」はその転訛であろう。今日に残存する貴重な方言

さて、産婦はこれ  
ら安産の神を念じな  
がら坐って、上から  
吊った力綱に縛って  
できたのである。昔

紙の幣束をつけて赤飯をあげる。またワラで輪を二つくり赤ん坊の頭へあげたり、尻にいたりしたのち笹に湯をつけて赤ん坊を洗ってやり、

をつけ三ツ峯（秩父のお太様）をかりて高い岩山にまつてオタキアゲをした。それを供えるとお太様が来て食べるといわれた。子守さまは十八人乃至二十一人の子があつたと語られている。今は伝兵衛の四代の後裔によつて祀られている。このほか二十三夜様を祀る女の集りをすこところもあつた（日影）。赤ん坊が生れると雪隠まいをするのは珍らしいことではないが、一日たつとオガラで宮をつくり、それに赤岩の法印に切つて貰つた赤い

は産む時に「マクリ」(下剤)をのませたという。ヘナ(臍の緒)は縁の下などに埋める。産毛剃りは女児が二十日、男児が二十一日、剃り毛は粗末にならないよう、「植木の下におけ」といわれる。産婦は三日か五日でもう起き働き出す。早い程よいとされた。産婦の食べ物で悪いものは辛いもの、油もの、太ねぎ、しいたけ。柿も悪いとされる。お産は最初の子だけ実家で産む。食い初めは男児が百二十日目、女児は百十日目、子育ては太田の呑電様に頼かけて七つ坊主としてトトタイ(後頭部の毛をのこす)の風は明治の末まで行われた。

誕生一年の御祝の御返しは大福餅で、子供に大福餅を背負わせ三歩歩けば丈夫になると信じているが、七五三の御祝いは全然やっているといふ。

昔は間引は多かったが、腹胎はあまり知らなかつた。私生児はシセイツコ(私生子)といつてゐる。

## 2 トンビノハネなど

典型的な隔絶性農村として、当然結婚圈は村内が多い。時に草津の方に出る者はあつても来る者はなかつた。根広部落の様なところでは半分が部落内、残りは入山地区内だつた。女の方が一つ多いのがよいといふ。「金のわらじ」でさせという言葉はここにもあった。

年まわりは女は十九、男は二十五が厄年で悪いとう。一般に女は十八位、遅い方で二十四、五。婚礼のときは嫁が台所から入る。しきいのところで姑が茶碗をもってたち、姑が一口のんで残りを嫁が飲む、それから勝手の炉を一まわりしてから座敷に通る。(鍛冶屋敷)

広間では三々九度をしないで別室でやる(赤岩)三々九度は嫁から始める。

とまり初め 年が悪いときは「とまり初め」といって泊まるだけで契らない。一般に、一月、二月、五月、十二月が良く、三月は「先き別れ」、

四月は「死に別れ」で悪い。六月は農繁で少ない。仲人のひまな時が選ばれる。

ばれる習慣がこうした形で生れたのである。式には四斗博一つ位空ける風習だった。

お茶呼び 式の翌日に嫁の披露の意味で女だけを招いて酒肴を出す。これをお茶呼びといふ。招かぬ場合は部落内を嫁の名をかいだ手拭をもつて挨拶まわりをする。

婿とりの場合は「お茶よび」を男だけにする。

式の後片づけは近親や兄弟たちがする。

嫁と呼ばれる期間は子供の生れるまでだといふ。

入山の奥地では「トンビのハネ」という言葉があつた。仲人がまず嫁の候補者のいる部落に「貰つてゆくから」という事前儀礼を部落に対しとする。話がまとまるると仲人が嫁の家のへ酒一升をもつてゆき正式の約束となる。これをテムスピとか手ジメといふ。貰い方は、式後十五日乃至二十日位たつてから仲人に酒一升を贈る。これをトンビのハネといふ。

これで部落内に披露してくれという意味である。仲人は「トンビのハネ」を披露するから。といってこの酒一升を部落にやる。他部落から嫁・婿が来たときは部落中を手拭一本ずつもって挨拶する、これを村まわりといふ。神社にはゆかない。(根広)

一般に村内婚が多い為か、里帰りは日帰りが多く婿は同道しない。このほかは実家にゆく日は正月と節句だけだという。

## 3 送葬の習俗

魂呼びの風は入山の奥地にはすでになかつたが、南半部にはあつた。瀕死の重病人が出ると、家人やホーベーが出て氏神へお百度まいり(十人なら十回)をした。

又病人が男の時は屋根の棟へ上つて病人の名を呼んだ。女の病人の時は台所の水桶のそばにいって名を呼んだ。梨木の竹内与十郎さん(明治26年)の、弟が草津に行った時母が死にそうになつた。帰つてくるまでもたせようとして呼んだら息を吹き返した。会わせたい人があれば呼べば

必ず息があると信じている。（梨木、荷付場）

死ぬと頭を北に顔を上に仰臥させる。このことを「マクラケエシ」という。坐棺が普通だが産の死者は寝棺。埋める時も寝棺は北むきに生ける。（梨木、荷付場）

入山地区南部の梨木、荷付場部落に見られ、ウメハカをボチ、マイリハカをヒキハカと呼んでいた。入山の奥地には見られなかつた。死人の出た家では家の前のカイドウに一週間だけモンビヨウをたてる。多野郡上野村ではモンバイと呼んでいたもの、こゝではモンビヨウと呼ぶ。五尺位の大きさでこれに戒名、歿年月日を和尚が書く。これは供養のためで、モンビヨウを見てオモライ（乞食）などが入つて来ると食べ物を施すという（梨木、荷付場）

正月に死人のあつた家は

門松を庚申塔のそばに捨てる。（梨木、荷付場）

正月に死人のあつた家は



### 部落の葬式

葬列に参加する人々は後ろ襟に白い紙切れを下げる（京塚）  
相葉 伸撮影



カワバレ草履とチョーベン

相葉 伸撮影

穴掘りに使った道具や団子を

出し水を汲んでおく。

（梨木、荷付場）

つくった鍋釜などは物置のすみなどに入れ、一週間使わない。（日影）

墓のまゝしろに魔除けの鎌をさしておくるのは入山地区の特徴である。

両墓制が入山地区南部の梨木、荷付場や日影地区にあった。ウメハカをボチと呼び、ボチの土を一握りもってヒキハカを作る。ボチとヒキハカとの距離は一般に近く、日影地区的平沢部落は家にも近い。盆には

ヒキハカにはまいらず、ボチだけにゆく。（日影地区、下沢部落）

石碑は三年忌か七年忌に建てるのが普通で三十三年忌には樹木を植える。これを枝塔婆といい、枝のついて幹（柱）を削つて戒名を刻む。これを別れ塔婆ともいう。これを境に死者は先祖様になり、親戚の縁が薄くなる。娘の実家などは他人になる。

死後に来世のあることを信ずるのは「オジイサン、オバアサンこの火のアカリデオイデオイデ」ととなるが、益行事は仏教のもたらした教養だが、それとは別に産で死んだ人があると、一尺角の赤い切れの四隅へ四本棒を立て、水の流れのところの人の通る所へ柄杓をおいて、通る人に水をかけて貰い、赤切れが褪せ奇麗に白くなる頃になるとよいところに生

喪家では葬式の出たあとすぐ帶木で掃く。普段は客の出たあとなど、すぐには掃かないが、嫁出しと葬式のときだけはすぐ掃くという。（日影、八幡）

葬列に参加した人は皆後ろ襟に白い半紙を細く折ったものをつけ垂らす。（京塚）

埋葬から帰ると喪家では臼を横にして、その上に膳をのせ塩

変ると信じられているのは県下一円の習俗で、ここもその例に洩れないが、面白い生れ変りの話もあった。

死者の身体に墨で印をつけておくと、その印のついている人が他處に生れ、その墨はもとの墓地の土でなければ落ちないと一般に信じられてゐるが、品木生れの山本文一郎さんの家のバイホウと、いう人が死んだ時腹、背、掌に字を書いて葬つたら長野県下高井郡穂波村（今は山村）の佐野のバクロウの家に生れ、その字を消す為に佐野から墓の土を貰いに人が来たという。バイホウは腹が出て猫背で腋臭が強かつたので家の人にもきらわれていたが、無類の馬好きで、いつも馬やの中にいて馬のからだをなでまわしていた。そんな人だったので死んだ時に字をかいたりしたのだろうが、今でも馬の好きな人のことを此の地ではバイホウと呼ぶのだといふ。（京塚）

（祈祷師）（靈媒）このほか荷付場にはまた死者の靈を呼びよせる人もいる。中沢多喜松さん（58才）中村日信さん（82才）で、家のまわりをまわり、位牌を手にせ線香の煙の上にかざしながら死靈を呼び寄せ、死靈の聲音を伝えるといらうのである。中村さんは岡山の人で今はいない。尚この村は金村一力寺といふ、日影の竜澤寺（曹洞宗、檀家四二〇戸）がそれである。僅かに赤岩に光松院（圓城寺末、檀徒四〇）があり、根広の月洲寺は廢寺となつた。このほか赤岩地区に天理教支教会、生須に宣教所があり、同信者五十人位。外にこの頃は創仙学会員も一二、三の根をおろしている。

## 五、怪異の幻想

鉄道といえばやっと南の端の太子までこの頃通じただけで、全村深山幽谷といふ全くの隔絶地農山村でバスの通る道まで出るのにも一汗も二汗もかねばならず、路はけわしく景尚暗いというところであつてみれば、そこに奇怪な話が眞実性をもつて語られてきたのは無理からぬこと

である。

天狗様 山仕事にゆくと向うの尾根で天狗様が太鼓をたゞいていた。恐れて場所の悪い、人のあまりゆかぬ低い所に祀つた。『村はずれの下に祀れ、上に祀るといだすらするから』と云い合つた。今では矢倉だけ祀つてある。（入山地区根店）

河童 京塚部落には十三淵というところがある。河童に子供を引きずりこまれた。

世立部落にはキューイネ淵という所がある。そこで大きな岩魚を釣つた、「キューイネさらば」といつて逃げられた。河童であった。それが惜しくて又行つたらこんどはすりこまれた。キューイネはその人の名からつけられたものらしい。

ばけもの 入山の根広部落におばけが出た。いつも髪をとかしている美女であった。そこへ寺をたてた。月州寺がそれである。（今は廢寺）近くは弁天山の尾根伝いだから野反湖の弁天様が尾根づたいだから来たのだろうといった。それで根広には弁天を祀らない。

祟り 入山の根広部落には矢倉・中村・ウワ段・ネビロの四つの小字があるが、明治二十九年に赤痢が部落に流行した。各小字に隔离所をつくった。中村では觀音堂を建立した。すると觀音様が怒った。世人話（中村農作さん（82才の先代）の家の者）の者が崇つた。首が重く垂れ下つて上げるのが難儀な病気になつた。占いを見て貰つたから觀音様の祟りで「タピツタン」という病気だといふ。觀音様にあやまつて堂を別に建て直したら癒つた。（根店）

三十年位前 子供がなくなった。下駄が一本あつた。湯川に落ちたと大騒ぎした。易をする坊さんがいたので、そこへ聞きに行こうとして提灯をつけていたら提灯の底をもぎとつていつたものがある。狸の仕業といわれた。（梨木）

このほか狐にかされた話などもかつては多かつたらしく、それらを語ってくれた村の人々の善意の眼は懐しく、漸く近代化に向つたこの村の明日を夢見る瞳でもあつた。

# 六合村の部落概観

湯本貞司

六合村を訪れる民俗学関係の方、又は郷土史家や観光客等のために、道案内を便宜のつもりでこの稿を書く。

## 長野原駅よりのバス路線

六合村にお出でになるには、国鉄長野原線の終着駅太子（おおし）に降りられるのが、一応順路とも思われるが、六合村の南から、順次部落のこ案内いたしたい都合上、バス路線によりご案内しましよう。

さて長野原駅と、六合村の奥地花敷温泉間には、国鉄バスと草軒バスとが、およそ交互に運転して六往復している外に、最終バスは長野原。小雨間の一往復もあり、ます山間部としては、がまんどころでしょう。なお夏季の観光シーズンともなれば、この外に長野原反湖間も、三と四往復あり、併せて、太子までの国鉄ジーゼルカーの五と六本の乗入れを加えて見れば、秘境六合村の壁も、明るい窓が切り開かれて行く思いがする。

### 長野原野反線

長野原から小雨・入山を通じて野反湖に通ずる道は、県道長野原野反線と呼ぶものです。県道とは言つても道幅・勾配・屈曲・路面のいずれもまだ整備されない悪路で、音をもじつて「険道」などと諱評するものもある。しかし県道編入の歴史の浅い上に、大小の橋梁の数が多いし、渓谷沿いではあるし、本格の県道らしくなるには、こゝの処、しばらくの歳月を待たなければならない道である。

しかし十年この方、幸いのこと事故らしい事故は、ほとんどないので、この点は安心を願えると思う。

## 大字赤岩

長野原からバスに乗り、須川橋の東の袂で、急に右折して六合村に向い、須川の流れに逆行して、車にゆられながら、途中長野原の一小字の貝瀬を通過する。昔は麻など沢山つくり、今はこんなにやくなどが盛んな豊かならしい農村落です。

貝瀬を過ぎ更に山峠の道を縫って進むと、小さい峠の切り通し道、マルヤに出る。こゝに小さい丸い岩山があるので、まるいわ・マルヤと呼ぶのでしよう。

こゝマルヤが長野原町と、六合村との村境である。

さてこのマルヤで、北西の方六合村を眺めると、一望の大天地と言うほどではないが、六合村の風景が眼前に展開する。西の方真っ正面には、草津白根が高く王座のようすわり、その麓には草津つ原が裾野をひき、西から東へ須川の流れが延々と横たわり、川を挟んで两岸に、小さな河岸段丘の耕地が開け、南が大字日影、北が大字赤岩の民家が点々と見える。日影の耕地の端ぶちを太子線の、ジーゼルカー又は煙を吹いて貨車などが走るを見れば、何か秘境のズレさえ感じるのである。

## 広池

広池は大字赤岩の一小字である。赤岩は戦時中まで一人の区長の切り

まわしであったが、戦後は本村（ほんむら）と言われる赤岩と分れ、今は広池の駐在員（大体区長と同じ立場）によって管轄されるようになつた。

広池の駐在員は、広池・出立（いでたつ）・矢の下・中室（なかむれい）・ドウリッバラ（高間開拓地）を管下に持ち

戸数 五七戸

人口 二八六人である。

（昭和三七年現在）

この広池は、昔赤岩と一村の頃は、名主その他の村役など、主に本村の赤岩から出して、やゝ從属的の部落性格であったようだが、明治この方は、すべて対等の力となり、ますます上向きの姿をとっている。

生産の仕事としては、養蚕・製炭・酪農などを主とし、椎茸・なめこ・養鶏等も相当にやっている。又この広池は營林署の指導協力によつて、国有林野の下刈り・整地・植え付けなどによる労働収入が大きく、特に国有林の払い下げによる製炭は今に衰えない実績を挙げている。

しかし大部分が兼業農家であることは、やむを得ないことで、農家の外に製材業・日用雑貨の店一を数えるのみである。

民家の屋根も、もとは茅のくず家が多く、いく軒かの石置きの板葺き屋根であったが、今は瓦屋根又はトタン屋根に、年毎に変つてゆく。消えゆく農山村の、伝承も生活も、この屋根の変化が、象徴しているかに見える。

## 赤 岩

バス停留所の「赤岩入口」で下車して、西に一軒、徒歩で十五分ほどゆくと赤岩である。この一キロばかりの村道は、もとは辛うじて駄馬を通するぐらいの路であったが、昭和二十三年から二十五年にかけて、三年がかりで、たくさんの村伝馬とわずかの県費助成で改修し、ようやく自動車もいり村人の便利は大きくなつたものである。何ヶ所かの岩山切りの困難とも戦つたが、山村の道路はすべてこのような苦しみを克服

して、手のひらの血、額の汗で、赤ん坊を負った女のつるっぱしふるいもあって出来たのである。

さて赤岩は、もとは「ほんむら」とも呼ばれていたが、今はその呼び名も消えて来た。

戸数 四八戸 人口 二六一人

ひとたまりにある部落としては、六合村では大きい方にかぞえられる。專業農專業の農家も十戸以上あるが、やはり兼業農家が大部分で、養蚕・こんにゃく・製炭・酪農・養鶏・椎茸など小規模ながら多角經營が多い。

部落の入口に小さな南小学校があり、学校の上の、安山岩の屏風岩の山高いところに、赤岩神社がある。この神社はもとは「いづなさん」と言われ、飯綱神社であったが、明治四十一年の例の神社合併のとき、村の熊野神社・諏訪神社・稻荷神社の四社を合祀して、村社赤岩神社となつたのである。本来は諏訪神社が村社の扱いを受けていたようであるが、「いづなさん」が、お宮も美しく、景勝の地であり、かつ祭典も「赤岩のいづなさんのお祭り」と近隣に評判であったよう次の次第で、合祀の時に、村社にえらんだものと思われる。

この種の神社の盛衰興亡は、どこでも見られるが、小雨の諏訪神社、入山講説の原の諏訪神社、やはり合祀の時、廃社になつた、太子花園の諏訪神社などと共に、赤岩に諏訪神社が存在したことは、吾妻郡西部の神社分布の上には忘れてならないことと思われる。

この外部落のカミの方、北に觀音堂一字があり、三原三十四番の札所

觀音の大悲の影や赤岩の

朝日も照らす夕日かがやく

の御詠歌が残つてゐる。

なお村のワゼ（うわ手）がたに昆沙門堂、タダリがた（下方）に地蔵堂（東堂ともいう）がある。春の彼岸中、念仏講のお婆あさん連が、声

をはり上げ、節をつけ、太鼓と、鉦ではやして、ナアムウアアミイーダ  
アアンブウツウウー、ドンドンチヤン、ドンドンチヤンと、のどかに念  
仏を「申す」のが、もとは聞かれたものである。夕方春の日が西山に近  
づくころに、お供えの蕷麦のおしんこ（おだんご）を指で三ヶ所回ませた  
形）、栗ボタ餅、栗の赤飯などを分けてもらい、子供がゾロゾロ集つ  
て来た。筆者もその子供の一人であった。

#### 秀英法印の道路記念碑

地蔵堂の庭に、珍らしい道碑がある。昔享保の頃、上野国館林領梅  
原村光明寺門弟に、秀英という僧があり、寺の許しを得て諸國修業の  
末、縁あって赤岩に落ち着き、村童たちに手習い師匠となり、赤岩の産  
業改良や、風俗の乱れるをいましめ、実に大きな村人の敬仰の行者とな  
った。晩年（寛延二年）秀英法印は、自筆書置きを認めて、所持金二十  
六両四半分十三両は村の公典のことにつかってくれ、半分の十三両は自  
分の死んだ時のことと始末に当たるべくれ……と、生前に遺言状を書き残し  
たのである。そこで寛延年間、赤岩村中惣出で、タカヤノオネから出立  
までの道、すなわち前に述べたが、今の自動車道の古道の険路を平治す  
る難工事を成就したのである。ついに秀英法印は先達の心配をし、堅い  
岩山の道には、大量のボヤ・マキ・枯木を山と積んで燃し、岩石をもろ  
くして、崩したと言い伝えられている。

この秀英法印は、タカヤノオネの険路平治を終えて後、寛延四年五月  
二十八日の大長雨による上の平（かみのひら）山崩れの為、止宿してい  
た大上（おおえ）の富沢氏の十才と八才になる童子二人と共に、庄され  
て逝去されたのである。

いまでも「大上」の墓所には、この三人の冥福をいのる地蔵さま石碑  
が建ててあり、又山崩れのあった「カミノヒラ」山の麓には、村人の建  
てた秀英法印の大仏像の石碑が、今も村を見おろして、遺されている。  
なお東堂の地蔵堂の道路碑には、  
表面に

当所平治険路告成碑  
村中現方秀英

左側面

寛延四年辛未  
五月吉祥日

合村の地に、このような道碑が残るのは珍らしいと思う。  
法印の死後、大上の富沢氏は地蔵像石碑を建立し、村人は法印の大仏像  
石碑と右の道碑を建立し、なおさらには、菩提寺の日影の竜沢寺に、詞  
堂金八両を寄進して、永代の供養をたのんだ。

堂金八両を寄進して、永代の供養をたのんだ。

覧

一金八両也

右者秀英法印詞堂金鑑受取申候 永々相伝位牌立置獻茶飯回向可申候  
為後證如此候 以上

宝曆六年子正月

竜沢九代

正宗園

観

伝左衛門殿

法印門弟申中

右の古文書は竜沢寺正宗和尚の詞堂金八両の領收証である。ちなみに  
右の伝左衛門は、筆者の五代前の先祖で別名妙英と称した人であるが、  
秀英の英、妙英の英の共通していることに、何かわけがありそうであ  
る。

赤岩の鏡学院

赤岩「やまね」の鏡学院は、古いぶん古から続いている法印の家であ  
る。現在も法灯を守って、郡の西部は勿論、東部まで沢山の信者があ  
り、春祈禱、地固め、屋がため、病氣や災難よけのまじない、易、部落  
や「まけ」の小祭り等々を、たのむものが多い。

鏡学院の関係記録には、大永年中（一五二〇頃）より畠何々御年貢除地といふものもあり、四、五百年にわたって続く法印の家は珍らしい。

#### 舞台屋敷

もとの熊野神社と隣接して、割合に大きいしつかりした、村の舞台があつたが、終戦後とりつぶして、屋敷あとは現在煙になつてゐる。天保十三年、水野さま御改革で、一たん舞台をこわしたが、長くは続かず、すぐ新築したものと思う。このことは別項萩原進先生の芸能の部に出てゐるから略す。

#### 河童の伝説

むかし赤岩のお医者が、河童の腕を切つて、河童から疵薬の製法を教えてもらい、腕を返したという伝説、別項にあるから略す。

## 大字 日影

「赤岩入口」を辞して、バスで須川に架けた出立橋（いでたつばし）を渡ると日影になる。日影は南から下沢（しもさわ又はうるしさわともいう）。中沢・平沢・八幡と、山を登つて湯久保というように、小さい数部落に別れて、一大字となつてゐる。戰前は区長が全大字を、管轄していたが、今では、下沢・中組・八幡・湯久保の四人の駐在員を置いてゐる。

下沢 一二五戸  
中組（中沢・平沢・田端） 一三九人

一三戸  
一四一人

八幡 三八戸  
湯久保 二九戸  
一七八人

専業農家も、いく戸かは教えられ、養蚕・農作・酪農等に専念しているが、大部分は兼業農家で、商店二戸、寺院（龍沢寺）一戸がある。

## 湯久保

明治以来新らしく開けた部落であるが、草津温泉に近い地の利を得て、花いんげん、馬鈴薯、換金的の野菜や作物の産出が目立つ農村となつてゐる。

#### 八升蒔きと一貫地

この地名については、相葉先生の「展望」の中に紹介されているが、八升蒔きは、六合村の耕地の中で、第一等の地味であると言われ、農作物の収穫の特別良い処である。しかも、この八升蒔きからは、繩文土器（後期）や石器などの遺物の出土が、実に豊富で、住居址らしい形跡もまたあつたようである。田端の小池新十郎氏は土器、石器を採集して大量に保存されている。

## 八幡

幡

八幡という地名は、八幡宮があつたので、呼ばれた地名である。

八幡宮は部落の県道沿いの高い石段の上にあり、やはり明治四十年、日影中の他の各神社を合祀して、日影一社の八幡宮となつたものである。六合村には諏訪神社の所在は多いが、八幡宮はたゞこの一社だけかと思う。吾妻郡内でも八幡宮は三四社にとどまるが、この八幡宮系譜はこの地の土豪湯本・浦野等に関連あるやとも聞いている。

#### 妙全の逆さ杉

バスの停留所で「大杉」と車掌が呼ぶ処に、文字通りの大杉が、すぐ窓外に聳えているのを見る。これは六合村の名木で、龍沢寺の大杉、妙全の逆さ杉、妙全杉の名で通つてゐる。樹齢八百年ぐらいと、土地のものは言うが、いずれにしても六七百年に近いだろとは、専門家も見ているようである。

むかし妙全という住僧の尼さんが、杉の杖を門前に、逆さにさし捨て

たのが、逆さに育ったのがこの大杉で、だから、今も枝が逆さに垂れているというのである。

前に赤岩の処でのべた、河童の伝説も、この日影の逆さ杉伝説も、類似のものは他所にもあるが、分布等について調べて見るも、又面白いかと思う。

#### 岩景山竜沢寺

この寺は創立年代が天養ごろと言われる、由緒古い寺の由である。天養年間、例の逆さ杉の妙全尼が住み、又僧栄昌が住んだが、寺の堂宇が破れ朽ちたので、文禄三年に曹洞宗の明堂宝珠が開山となり、湯本三郎右衛門が再興開基したものと言う。

慶応二年、火災で全焼、庫裡を再建したが、明治四十三年の風害で、岩景山の山崩れに押されて庫裡がぶられ、住職もその子二人とともに圧死の不幸を見た。現存さゝやかの本堂と庫裡は昭和になって再建したものである。

むかしの寺記録、文書、過去帳を始め、水害等で消失したが、寺以外に残存する旧記、繪図等によつても、この寺が相当な規模のものであつたことが、うかがえるのである。

#### 三原三十四番の札所（日影の内）

三原三十四番の靈場の中で、日影の内は左の三ヶ所が挙げられてゐる。ただし日影くわぞの（桑園）堂とあるは、今の大字太子の「かぞの」で、当時日影太子一村をなしていたからと思われる。

第二十一番 日影 あふみ  
たづねきてここでほとけにあふみどうう一世あんらうの身こそたのもし

第二十二番 日影 くわぞの（桑園）堂  
あらたかにゆいりて拌む観世音くわぞのまよにぜうとなるべし

第三十四番 竜沢寺  
たきのさわ憂き身のあかをすゝぐかな大悲の影ややどりもやせん



# 大字太子

バスで大杉を見て、すぐ右下の須川添いに、鋼管鉱業会社の工場及び太子駅を眺め、花園橋を渡って「上太子」で下車し、道を西へのぼれば、こゝが太子である。

もともと「上太子」は、「しもおおし」と呼ばれていたのであるが、花園に太子駅が出来てから、バス会社等で、下太子に「上太子」と言う停留所名をつけたので、結局「上太子」が通り名となつたのである。太子は花園（かぞの）及び榆（にれぎ）等の小字をふくめて、大字をなし

戸数 四〇戸 人口 一九九人

大部分が、兼業農家である。

この太子は、すぐ上の草津原を登れば、近く草津温泉に隣接しているので、昔から、生業上草津に依存した点が強く、今も草津に年間を通じて、野菜その他物資を運搬して、売りさばいている。

いま明治十年調の太子村誌を見ると、その物産の処に、

物産 麻（下品） 四百五十貫

繭 およそ四十貫

薪（但三貫目） 一千俵

薪（一束七百目、三十束一駄） 百駄

炭薪 1・草津温泉へ運搬し売却す。

とあり、炭・薪ともに、草津の入湯客の自炊用に供したのである。勿論野菜や蕎麦粉や、漬物等雜多のものを、充りあるいはいたと思うが、これ等は格外として、村誌には載せなかつたのである。

花園の諏訪神社

「かぞの」には諏訪神社が祀られていたが、明治四十一年の神社合併にあり、小雨の諏訪神社に合祀されてしまった。

いま明治十二年調べの神社明細帳を見るに、太子村字花園に、村社諏訪神社があり、日影村田端に、無格社諏訪神社が見えるが、当然村社扱いは一格上の扱いであると思われるから、この花園の諏訪神社は、合併するには惜しかつたようと思われる。

## 太子の不動堂

太子部落の上の村はそれに近く、不動さんが祀られている。堂は花園川の渓流に沿つた岩窟に組みこんで、高く造られており、清い流れと映えて、小さながら奇勝の不動さんである。毎月二十八日には、善男善女の参詣者が沢山見られたが、近年やう薄れたようである。

## 鋼管鉱業KK群馬鉱業所

この鉱業所は、戦時に軍需資源の鉄を確保したいために、施設されたのであるが、戦争の終了後も、幸いにして鉄鉱石の需要が、ますます高まつて来たため、すでに約二十年に近い年月、送鉱を継続して来たのである。

寒村とも言うべき六合村に、この鉱業所の開設されたことは、村の経済、交通、文化の発展の上に、大きな貢献と影響を与えたことを、忘れではない。

鉄鉱石の採鉱をしている元山の群馬鉄山については、大字入山の処で記したいのでこゝには略す。

## 長野原線太子駅

渋川太子間の鉄道長野原線は、大戦中群馬鉄山の鉄鉱を急速に、川崎又は八幡の製鉄所に送鉱したいために出来た鉄道である。いわゆる真貫工事の鉄道で、全国各地よりの学徒勤員、又地元の六合村は、青壯年は全般戦線に徴用された残りの老年たちが、ほとんどオテンマのよう奮り当たられ、しかも昼夜兼行で、出發したのである。徒つて昭和十九年の一ヶ年に全線完通して、昭和二十年一月一日に鉄石の発出荷、貨車十

一輛編成、同日午後三時十五分太子駅発車、日本鋼管川崎製鉄所に送られたのである。

その後も太子駅は貨物専門駅で、客車扱いをせず、村民は勿論旅客の不便等に困難したのであるが、昭和二十九年六月、太子駅客車乗り入れが実現して、通勤・通学・観光等々の文化面も、明るくなつて来たのである。

現在太子渡川間、五往復、内一往復は高崎直通である。

### 太子の地名

太子を「オオシ」と言わざ「タイシ」と読む人はかなり多い。太子は御検地帳の所載に、下太石というのがあるが、或いは、太石（おおい）に焦点を当てて見るも面白いと私は思っている。地名のついでに、花園も昔はくわ園とか、桑園などと書いたが、何かカズミ緒（こうぞ）のカズ野というような古名から出たか、などと考えることもある。地名は語原のわからないのも興味的である。

## 大字 小 雨

バスが太子も過ぎて、小雨で下車、ここは役場前である。部落のうしろ裏には、高く切り立ったような安山岩の岩が、そばたって居り、仰いで見あれば、首筋が痛くなるようである。前には須川をはさんで生須の家々がならび、幕坂にゆく道も見える。

この小雨は一応、六合村の中心地であつて、六合村役場・農協・小学校・中学校・郵便局・営林署担当区・警官駐在所・木炭検査員駐在所・東電などがあり、外に商店・旅館・飲食店等も六、七戸を数え、又近頃になって県企業局の湯川発電所建設事務所の事務所・寮・住宅なども建設された。

小雨はもと小雨を沼尾と合わせて、一行政区としてやつて来たが、今は小雨と沼尾とに分れて各々に駐在員を置いている。

### 小雨 戸数 五四戸 人口 二五八人

この戸数の中には、前記の商店六戸、木材業者一戸もあり、他もほとんど兼業農家である。

明治十年頃の記録を見るに、小雨は、戸数一八戸（沼尾をふくむ）学童男九人、女三人とあり、

明治二十二年頃、学童男三一人、女三三人とある一例を見ても、こういう邊地の農村等が如何に移りかわってゆくか、うかがえる。

### 草津冬住みの跡

小雨は生須とともに、昔から明治・大正の始めころまで、草津入湯のお客や荷物を、馬やお籠で運搬するのが、主な生業だったし、また草津の人たちは、秋の十月八日（旧暦）から翌年の四月八日まで、冬住みと言つて、小雨や沼尾へ下つたので、経済的にも文化的にも、草津温泉の大いなる影響があった。むしろ草津の出店のよの一体觀があつたのである。いま小雨から沼尾あたりにかけて、耕地や宅地に散在して残る冬住みの屋敷あと、石垣のあとなどを眺めると、華やかであった当時のものが偲ばれる。

とりわけ部落中央の辻近くに残っている山本十右衛門の冬住み屋敷あとは、宅地の広さ、石垣の豪壮さ、さすがが草津の山本のあとかなと思わせる。現にその住居は今も立派に残つてゐるのである。

むかし山本の家で、小雨に冬住みにおりると、女主人がお供を從え、おかいどりのうちかけを着て、近所の家の挨拶まわりをしたこと、まわりの家では本当に気づかないであつたそな挨拶を兼ねて、山本らしい格式を見せたことであろう。

六合小学校の西近く、古い松や杉の大樹の中に諏訪神社

### 諏訪神社

が祭られている、神社合併に際し、太子花園の諏訪神社、生須の赤城神社等が合祀されたので、この諏訪さんは小雨・太子・生須の三大字の氏神ということになっているが、時経て今日ではやはり小雨の氏神様がありのようになつていて、時経て今日ではやはり小雨の氏神様あります。合併の時に、神社の經濟維持というようの点に重点をおいて考えすぎ、無理な合併をしたのは、この地の例に限らなく多いが、惜しいことに思う。

#### 小雨寺と金藏堂

今は無いが、もとはこの二つの寺堂が、小雨にあった。小雨寺は三原三十四番の二十三番の札所で

金藏堂は同じく二十四番の札所で

ひとすじに祈る利生のあらわれて

こん藏堂と きくぞれしき

金藏堂は、こんぞう沢にあつて、草津の光泉寺の冬住み寺に、あてていたのであるが、明治の初めからは、冬住みにも降らず全くの無住寺となつたので、明治十一年頃、学校として使つたことがある。この学校を

上大坂学校と称し、生徒は十三人、教員は西窪盛泉という方であった。これも今は無いが、沼尾に沼尾寺があつた。三原三十四番の二十五番の札所で、親音の救世（ぐせい）いの舟に棹さして

苦界の沼をわたるうれしさ

#### 沼尾の毘沙門堂

これは沼尾の山田氏の、三代ばかり前の先祖の茂太郎さんという人堂を建立し祭つたものである。

六合村地方には、毘沙門信仰は今もつて、根強く残つていて越後の浦佐（うらさわ）諏訪りは年々絶えない。赤岩では明治の末、火事で毘沙門堂が焼失したまゝ放任しておいた處、その後チビスが年々大流行したので、毘沙門さまの崇りだと言つて、さよやかではあるがお堂を再建して、春秋日をきめてお祭りをしている。

#### 牧水コースと小雨

大正十一年（一九二二）十月十九日、若山牧水は、同行の青年Kと、草津の宿を立ち、運動茶屋から小雨の原をたどり、九十九折の小雨の大坂を降り、奥家のような小雨の学校をなつかしみ、生須→幕坂→花敷（一泊）十月二十日、花敷→幕坂→幕坂峠→沢渡→四万……という行程を走られたのである。

われ／＼は、誰が名付けたというでもなく、この草津から花敷、沢渡まで、牧水二日の旅のあとを、牧水コースと呼んで来て、今では一般に牧水コースで知られるようになった。牧水のみながみ

紀行から、文と歌を抜萃して見る。

とりどりに紅葉した雜木林の山を、一里半ほども降ると、急に喰しい坂に出会つた。見下す坂下には大きな谷が流れ、その対岸に、同じ様に切り立つた崖の中ほどには、家の數戸か二十戸か、一握りにしたほどの村が見えていた。九十九折になつたその急坂を、小走りに走り降ると、坂の根にも同じような村があり、普通の百姓家と違わない小学校なども建っていた。対岸の村は生須村、学校のある方は小雨村といふのである。

九十九折わしき坂を降り来れば

橋ありてかかる映の深みに。

おもわぬに村ありて名のやさしかる

小雨の里といういぢりける。

董

いせし家にからんを壁を抜きて

学校となしつ物教えをり。

学校にもの読める声のなつかしさ

身にしみとおる山里すぎて

以上四首は、小雨にのこつた牧水の歌である。

## 大字生須

小雨から牧水コースに添つて「橋ありてかかる狭の深みに」の須川をわたり、対岸の部落に出れば、ここが生須である。この橋も昨年度、鉄骨の新装とかわり、六合村ではまず豪華の橋となつた。なるほど牧水が言つたように、十戸か二十戸の一握りの村であることは、今でも変わらない。現在も

戸数 一二戸 人口 一二三人

という小部落である。

生須は耕地が、極めてせまい村であるから、昔から、学問とか手職とかを身につけ、農業外、部落外に生業や職場を見つけて出る、という不文律のようならわしがあり、明治、大正、昭和と一貫して今日に至つている。

従つて村の戸数や人口も明治の初めから、ほとんど増加していない上に、勿論全戸が兼業農家であるが、俸給生活者を何人も出している家もあり、他郷で相當に經營しているものもある。結局耕地よりも何よりも、人間が一ぱん大切であったから、早くから教育という上に关心が深く、文化や生活についての感覚も一般に高められたものと思われる。

街道文化の影響

生須は古い昔、草津と飛地的ではあるが、一村をなしていたこともあり、婚姻その他の文化交流も盛んであったらしいし、その上小雨と同

様、草津入湯客や荷物の、草津沢渡間運搬の難ぎ場になつてゐたから、上の茶屋、下の茶屋で代表されるようにタチバの厭わいを見せてもらつた。このような意味で生須は、一種の街道文化の影響下に育つた部落のようにも考へられる。勿論中仙道等の本街道の文化と対比して見る余地は全く無いが。

### 赤城神社

この神社は神社合併で、小雨の諏訪神社に合祀されたが、社殿境内も今に清掃整備されていて、生須では祭日をきめてお祭りもしている。この社の石灯籠など實に立派のもので華やかであった生須の昔を物語るかのようである。

この社殿に接して生須公民館がたてられている。少年団、若い衆組合が発起して、部落の總力により公費を村に仰がず立てたもので、永い伝統による少年団図書室などは、注目に値する施設である。

### 庚申塔

生須の北の村はずれにある庚申塔は、高さおよそ四メートル、庚申塔の書風、彫刻等、實に文化財の価値あるもので、往時の生須の街道を飾つたちがいない。小雨の村はずれにある馬頭観音の大石仏像とならんで、大きさではあるが双璧をなす石造美術といえる。

### 小雨橋のこと

昔、吾妻の表往還が道陸神峰に、阻まれていた時代には、幕坂路は本当に重要な路線であった。従つて小雨、生須の間の須川に架かる小雨橋普請は、地元民の苦勞はひとつならないものであったのである。すなわち吾妻の西部に於いては大庭大前間の端恋橋<sup>1</sup>、長野原の琴橋<sup>2</sup>とこの小雨橋の三橋は、御公儀橋と言われ、今でいう吾妻西部四ヶ村、當時の霞二十一ヶ村の助合橋になつてゐるのである。

これ等の橋々のために、村々の名主や百姓が、どんなに苦しめ泣いたかは、村々に残る区長筆箋の中の古文書が、如実に訴えている。中でも小雨橋は、大出水のため、架けたばかりに、すぐ流出することも屢々

で泣き面に蜂のような残酷物語りが、百姓の上に覆いかぶさったようである。しまいには助合の村々で出合金（たしあいがね）一百両をこしらえて、之を小雨と生須の両村に渡し、将来この小雨橋の修理架橋の責任の一切を、小雨、生須両村に負わせたのだそうだ。

当時の二百両と言えば中々大金であって、小雨と生須と対等に半々の百両ずつわけ、勿論義務も半々にすることにしたそうである。

しかし両村には力の相違もあり、何もかも対等ということでは、後々何度も両村の間に紛擾も出来て、村役人をなやませたが、ようやく明治の御一新となり、道路の規則も変って来て、両村もやつとのことで厄のがれになつたといふ。

#### 補足資料(一)

##### おぼたて

旧の五月五日に、村中の子供たち（学校へ行つているものは、男女とも大抵たた）を部落の大神宮さまにあつめてした行事である。おかしらという部落の世話人（一人）が出て、米一升、小豆一升ほど出して、小豆めしをて（昼間）、とちの葉にのせて子供たちに分けてやつた。これをするとき、病気にならないといった。（世立）

##### おかげしら

おかしらは毎年交代。帳面があつて順番でした。むかしは、正月二十五日が交代日であったが、現在は四月一日に交代している。

おかしらの仕事は、おまづりの世話をしたり、山のくちの日をきめたり、山わけをきめたりすることで、部落に直接関係したことの世話をした。（世立）



# 大字入山

小雨で再びバスに乗車して、沼尾を過ぎ、いよいよ入山路である。右

に渓谷の対岸に湯の平温泉を眺め、草津にわかる左に見送つて、荷  
場が見え、湯河橋を渡つて梨木部落、これから喰しい渓谷ぞいに、し  
ばらく人家もない道を行く。遠く入山の世立や見寄部落が見えがくれす  
るあたり、何か秘境深くわけに入る気持にひたる。ボッチャリ六、七戸見え  
る見寄りを右対岸に見、世立の下を通り、へき地診療所を左下に、引沼  
を通つて花敷温泉下車、こゝが広い大字入山の中心地である。

入山は戦前まで一人の区長で広い行政区の世話をしていたが、戦後は  
次のような区分の行政区にして各々駐在員をおいている。

世立（見寄を含む）四八戸

二四六人

五〇戸

二三三人

引沼

二六戸

七一人

花敷

一九戸

一〇七人

京塚

一五戸

一〇五人

田代原

一七戸

八六人

品木

梨木（荷付場を含む）一〇戸

一〇七人

和光原

一七戸

一七九人

根広

一二戸

一二二人

長平

一三戸

四一人

小倉

二二戸

九五人

元山

六七戸

四八人

このかじ坂は大字入山分の幕坂部落と、大字赤岩の鍛冶屋敷部落を合  
わせて一区としたのであるが、便宜上大字入山に入れた。とも角、入山  
という六合村の一大字の下に、十二人の駐在員をおくということは、い

かに小さい部落が点在しているかがわかる。同時に山と山との間に、ひ  
とつかみの猫額大の耕地ですらも恋い求めて、そこを安住の地と定めた  
大昔のころの先人たちの姿が目にうかぶ。

## 入山は隔絶部落か

入山については、秘境というようの探訪魅力にひかれて、明治以来学  
者やジャーナリスト等々沢山に調査にはいつている。

従つて書物にも刊行され、雑誌・新聞・ラジオ・テレビ等でも紹介さ  
れることが、実に数多いのである。たしかに落人伝説や、木地筋やネド  
踏みの習俗等に、隔絶地らしい昔からの趣が残っていることは、事実で  
あるが、離島や奥地又は九州の山奥に残るような、民謡や民踊等の古  
いかけの残存していないのはどういうわけであろうか、私はこれに対し  
入山は本当の隔絶地ではなかつたからだと考えている。それは何と言つ  
ても、西の方に天下の名湯草津温泉を一、二時間行程の近くに控えてい  
ること。また東の方には、幕坂峠を越え、沢渡温泉を通つて、中之条や  
原町の月六齋の市日にも出て、曲物やその他山の物産を売つて、それ  
べく日用品など買って日帰りが出来たこと。こういう草津と東部吾妻の  
二つの文化圏の円の交錯するところに入山は置かれていたと思う。

大槻文彦の旅日記にも、「草津に大火のあった時、羚羊の皮の袖無し  
を着そろえて火事見舞にかけつけた」とあるが、本当に近村としての親  
近ジンギをかわす間柄であった。それは同じく秋山紀行にある「草津へ  
商ないに持出す栗毛・曲物・下駄・枕・天秤棒すべて右様のもの才工し  
て交易し」などから類推される日々の経済交流、どんなにか都からいら  
らの文化の風を、入山に運んだか知れない。

さてそう言う点で、入山にも木地屋、ねどふみ、また獣師たちの素朴  
な民謡や踊りの芽はいくども／＼芽をふきだしたことは思う。しかし  
芽を出しても、いつも都から高いレベルの歌踊・演劇が輸入され  
て来ては、そのあかぬけた芸能に圧迫されて太刀うち出来ず、双葉に

なるやならずと萎縮してしまったのかと考えられる。

それにも何か、先祖伝説の一端をしのぶような歌の名ごりでもありますまい、なお後々の研究にゆだねたい。

### 著山牧水と入山

牧水コースについては、小雨のところで一寸記したが、小雨から暮坂を通じ「左り花敷温泉」の道するべに心ひかれて、暮坂から入山にはいり花敷に一泊した。この入山での牧水の歌は沢山あるが、中から四、五首を紹介すれば、

先生の一途なるさまもなみだなれ

家十ばかりなる村の学校に

ひたひたと土踏み鳴らし真裸足に

先生は教う その体操を

先生の頭の禿もどうとけれ

こよに死なむと教うるならめ

(この三首 十月十九日)

ひと夜ねてわが立ち出づる山かげの

いで湯の村に雪降りにけり

上野と越後の國のさかいなる

峰の高きに雪降りにけり

(この二首 十月二十日)

### 長塚節と入山

「土」の作家長塚節は、明治四十一年の夏、入山を訪れ、野反を越えたことがある。

その時の一首

入山にて

唐糸の花のこすえにひとつづつ

蜻蛉（あきつ）をとめて夕さりにけり  
小栗上野介の家族逃避地

幕末の偉傑、小栗上野介が権田の島川畔で、斬首された時、その夫人、母堂及び息女一の許嫁日下いき子の三人は、家臣中島三左衛門と逃れてこの入山の同山田弥平治の家にかくまわれ、ここから夫人は野反越え、母堂と娘は波峰越えの二手に分れて、会津潜入に成功した。

権田から和光原までの潜入行の通路については異説もあるが、旧坂上村の須賀尾崎より長野原の琴橋にかかり貝瀬を経て広池の山本市兵衛方に寄り、馬を仕立ててもらい、市兵衛が案内に立ち、鍛冶屋敷・暮坂・入山・和光原にはいったという経路が通説のようである。

広池の山本市兵衛と和光原の山田弥平治は親るいの間がらであり、両家ともその土地の豪家であり今もつよい。山田家は、幕府の目明かし役をつとめ御用提灯など預った家だといふから、この一行の出発の時から、和光原の山田を目標にして、連絡をしたものかとも思われる。

(慶応四年一八六八年)

### 佐久間象山のこと

信州松代藩の佐久間象山が、京都で暗殺される十五年ほど前、嘉永元年(一八四八年)にこの入山より野反に入り金鉱探しをしたことは他の項に載っているにつき略す。

### 野反湖觀光

野反湖は上信越三国の国境近くにある堰塞湖で、湖面標高はおよそ一、五〇〇メートル、近来世に知られて来た観光地である。

佐久間象山の晩年日記にも、もとは「のどり池」又は布池などと書つたとあり、信州の琵琶池十ばかり合わせたばかりに見ゆとも記して、当時(百十五年位前)はかなり大きな池であったが、湖水の流出口の魚

## 幕坂峠と牧水碑

野川の川底が浸蝕されるに従つて、年々やせ衰えるよう、浅く小さな池になつた。幸いにして東電のロックダム工事のために、周囲十二糠米の湖とかわり、自動車道路も通じ県道長野原野反線と一緒に格上げされ、都塵はなれた、俗っぽくない観光地となつた。

### 入山世立の枝垂（しだれ）栗

世立の山本繁太郎氏所有の畠に、樹令五百年以上の、枝の下にさがる枝垂栗の大木が、保護されていたため、現在も樹勢旺盛に繁茂している。先年群馬県文化財専門委員の調査の結果県指定天然記念物の指定をうけた。

昔からテントウ栗、又はお天狗さまのとまり木などと言われ、枯枝を取つて燃しても、火に燃るとか恐れ、多年にわたり痛められなかつたのは幸わいであつた。

### すわの原の諏訪神社

国鉄バスで荷付場から、日光のいろは坂のような九十九折の坂を登り、諏訪神社前で下車して、五分ほどで参詣出来る。これは神社合併によつて、大字入山の一社の總氏神となつたもので、特に地元の梨木、荷付場の篤い世話によつても立派に維持されている。

昔は旧の七月二十七日が祭典であったが、今は八月二十七日で、草津をはじめ遠近の参詣者でにぎわう祭典である。この社前の石灯籠の一对には、石工信州高遠何々とあって、高遠の石工の当地方進出の一端を見せている。

### 荷付場と長平の道祖神

六合村にも道祖神は數多く祀られているが、中でも荷付場と長平の抱擁型異風の道祖神は、有名である。これは余りにたくさん紹介されてゐるからこゝでは略す。

昭和三十二年十月二十日、牧水記念の日に中之条町と六合村の境界点に、牧水旅姿と「枯野の旅」の詩を刻んだ牧水碑が建ち、幕坂峠は一躍世の注目を集めるようになり、牧水コースをたどるハイカーも又多くなつた。

### 枯野の旅

### 若山牧水

乾きたる

落葉のなかに栗の実を

混りたる

朽葉がしたに棟の実を

とりどりに

拾うともなく捨いもちて

今日の山路を越えて来ぬ

### 長かりしけふの山路

楽しかりしけふの山路

残りたる紅葉は照りて

軒に錆うる鷺もぞ啼きし

上野の草津の湯より

沢渡の湯に越ゆる路

名も寂し暮坂峠

### 花敷温泉と湯の平温泉

六合村のこの両温泉は、ともに大字入山の中に入つてゐる。近時この二つの温泉が、観光ブームの余波にのつて、すばらしい発展を見るに至り、野反湖観光、幕坂路観光と合いまつて、六合村観光の将来に希望をもつた。

持たせている。なお外に応徳温泉が、湯の平温泉のそばにあるが、いまは旅館もなくさびれているが、いずれ開湯の時もあらんと期待される。

### 群馬鉄山

元山の群馬鉄山は鋼管鉱業会社群馬鉱業所の経営下にあり、この鉄山から採鉱された鉱石は、索道によって、太子駅に送られる事は、太子の處で述べた、国鉄長野原線を突貫工事で成就させた原動力は、この鉄山にあったことを前に述べた。盛時は年産三十万トンにも及ぶ送鉱で、鉱石となび称せられる鉱山であったが、近年はやゝ整理期に入ったようである。こゝに入山小中学校の各分校があり、児童生徒八十名教師六名（昭和三七・四・一現在）の、山の学校となっている。

### 熊倉住居跡

元山の鉄山の東近くに、熊倉開拓地がある。その入植者の一人、黒沢三千太郎氏所有の開墾畑の中に、住居遺跡と認められるものが、およそ五十ヶ所もあり、先年群馬大学尾崎教授及びその研究室の人々によつて、うち四ヶ所の発掘調査が行なわれた。その出土の遺物の土器、住居の構造等すこぶる興味ある考古学上の問題を投げかけられることと思われるが、現在調査途上のことにつき、聞きおぼえの点など発表は控えた。所有者黒沢氏の熱意と協力も大きく、六合村の郷土誌研究にも、大きな資料となることは疑わない。

### 小倉の番屋の平

小倉の部落をはずれて東に、番屋のテエラという場所があるが、これは萩原進さんの浅間山風土記に、入番所として紹介されている。閑所ではないが、百姓交替で見張り番をした、番屋あとであろうか。とすれば主として、越後信州の北国筋から入つて来るのを見張ったものと思わ

れる。

### 品木部落について

國の水資源の國策のため、品木部落は、永遠に水底に没することもあるか、と聞く。

このことについて、兎や角と申し述べる余地はないが、六合村の郷土誌上、本当に重大のことであるから、考古、歴史、民俗その他一切の調査を、後世にいたり萬歳なきよう完了して置く必要がある。

品木は草津入山間の交通上の要所であり、大沢川の西の五輪の塔群、部落の上の石仏の百何十体群、お行さまの口碑、豊富な民俗学上の魅力ある話題等々、記録にも残し、また写真等におもかげを、永久に残すことの必要を痛感してやまない。その意味に於いて、今回の民俗調査は、得難い資料を残してくれ、ありがたいと感謝しているところである。

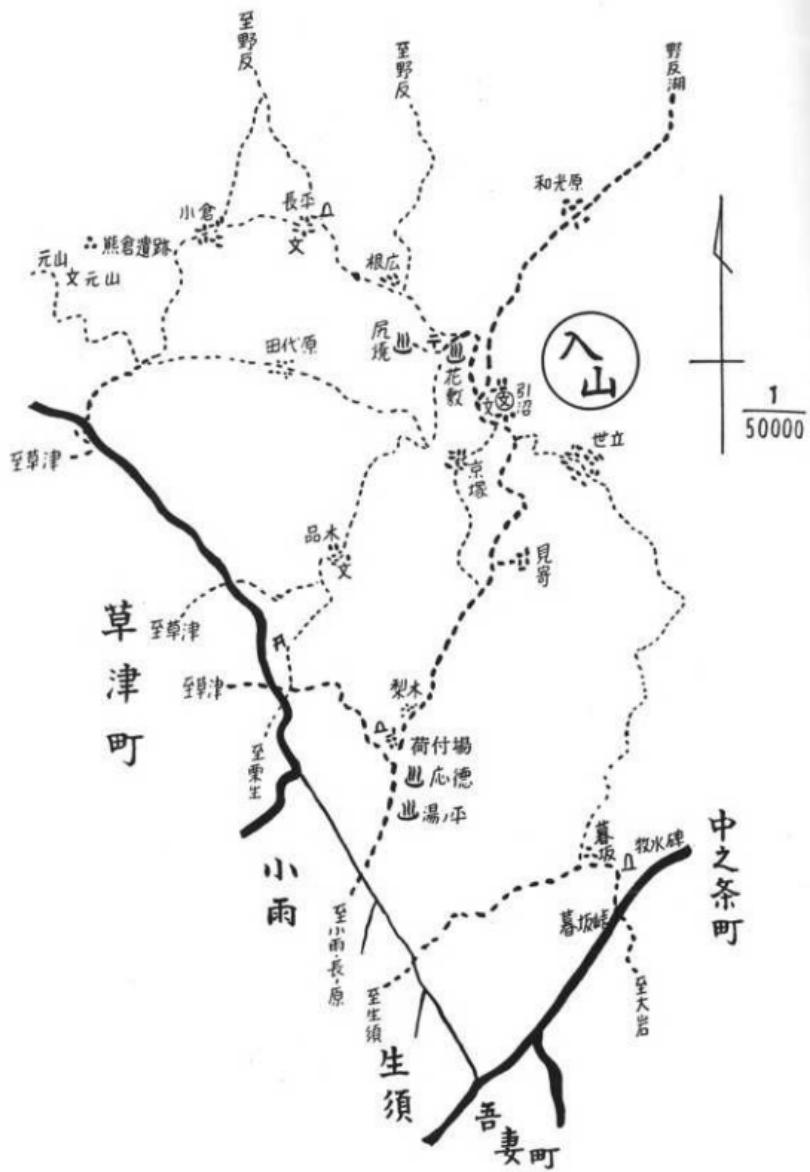
### 補足資料(二)

#### 木工関係のこと

大胡（勢多郡城南村下大屋）の産泰様の柄杓は入山でつくつたものである。かみのはちは、高崎、前橋方面へ出したもののが多かった。しゃもじ・ひしやは裏内へ出したが、これは、一升、二升用で、こえや天井水を汲むのにつかつた。メンバは、越後・信州・埼玉（川越）へ出した。

まげのつくりというのは、ひしやく・かみのはち・メンバをつくるもののことである。稚木屋（ちのぎや）というのは、しゃもじ・おつ（汁）のしゃもじ・鉢、ねばこち・こころぼち（まばともいい、かいこをひろぐ鉢のこと）をつくつた。入山全体で、木工関係の仕事をしていたものが、百人ぐらいづついた。このうち、しゃもじは、長野・新潟・福島・埼玉（秩父）・静岡の方面へつくりに出ていった。

産泰様の柄杓というのは、大湖南の産泰神社へ安産祈願に行つた人たちが、お札に門前の店で買って、底をぬいて奉納するもの。（根広）



前

編



馬を引く婦人（太子）

池田秀夫 撮影

## 食 衣

## 住

都 九 十 九 一

は、当然雜穀であつたはずで、從つてアワ、キビが常食であつた。その

食物についての習慣を、食制・食品・食料に分けて考えてみた。  
まず食制。三度の食事は正式のもので、膳に座って食べることは変わらない。しかし季節により、または考え方によって、三度の食事のはかに、一度あるいは三度の食事をする。これは入山の各部落に顯著で、他地区では廃れて来つたようである。すなわち、朝食前によるものを朝茶の子、あるいは朝コジュウハンと言つて。これを食べてから朝飯前の仕事にかかるのである。そして朝食。是食と夕食との間に一度、コジュウハンまたはコビリエなどと呼ばれるものをとる。これは冬は省略される場合が多いらしい。その代り、夜業の季節に入るので、夕食後夜食をとる。合計六回の食事が掲げられたわけであるが、そのうち朝茶の子も冬は省略されるから、都合四回あるいは五回というのが普通である。

これは入山地区に限らず、山村地帯では、右の事実が普通であったようである。が、近時、学童等の弁当持参の関係や作業形態の大きな変化に伴つて、次第に三度の食事に固定して来つたようより観察される。

食制の中でもう一つ、晴れの食事と普通の食事、これもこゝで扱われる問題であるが、これは年中行事、人の一生等において取り上げられるはずであるから、省略する。

次に食品と食料について。

そのうちで、米、麦を主食とすることは、次第に普及しつつあるが、入山地区においては、未だこれが一般的とは言えない。一体この村は水田に乏しく、米作は誠に恵まれない環境にあるから、少し前までの主食



オカマの小屋  
家の中にあるとけむいので、最近は外に小屋  
がけにした例もみられる。（京塚）

井田安雄撮影

中でも、入山地区は、ヒエが重要な畑作であり、これを常食としていた。米食が普及した現在でも、米とヒエの混炊である。このことは、雜穀のうちでもヒエ作の少い本郷においては珍しいことであり、おそらく耕地の少い本村においては、その雜穀作といえども、おそらく十分で

はなかつたであらう。早・冷の天候不順は、たちどころにその台所をおびやかすに至つたであらう。そのことは、補食・代用食品が各種にわたり、とくに飢餓年の救荒食物の伝承が豊富であることによつてもうなづける。

シダミ、ドングリ、笹の実を始め、ワラビ、クズ、ホド等の草根もまた重要な補食料だったことについては、以下に報告がある。ただこゝで注意せられるのは、他地方においてだいじな補食料であったトチの実が食べられないらしいことである。トチの木が無かつたのではない。この木は、入山の約子材料となる木であり、上・信越国境の山中には、多く自生していたかと思われるのに、食料として採集された伝承は、尋ねても得られなかつたのである。

その他の山菜類も多様に豆るし、食用芋もまた多いのは、他の山村と共通している。

服飾については、調査員の関心が浅かつたせいもあってか、採録が極めて少なかつたのは残念なことである。

衣料として麻が作られたことは、吾妻郡一帯の山村地帯と共に通していいる。これを績み、織つたこともある。天然のものとしてシナ（科）の皮をはぎ、またブドウ蔓、スゲ（苔）を用いた。スゲにはヤチスゲとイワスゲがあり、イワスゲの方が丈は短いが丈夫であった。これらは、テレビにも紹介されたネドフミの作業によって柔軟にしたのである。しかしこれ等の雜織維は、衣服としてよりは、ケヂー（みの）、ハバキ（脚絆）、カサ（雪巻）などに用いられた。またネコと呼ばれる敷物に用いられた。

服装は、晴れ着とふだん着ないし作業着等を考えてみねばならないのであるが、ほんど重要な採録がなされていない。

『大言海』の著者大槻文彦が、明治十二年この地を通過して草津に向

う途中の見聞を録した『上毛温泉遊記』中に

「往年の草津の焼失した頃、区長の宅へ灰撒きに見舞ふと、村の男女の衣服にて来る。何かと聞けば羚羊の毛皮の袖無を捕へ着たり。」

とある。入山の地は、曲物類の木製品を主業としたが、また狩猟も盛んだったことは、同項の報告に明かである。羚羊の毛皮も容易に手に入つたであろうし、これは防寒服としても適当してよい。それが「いちげん、葬礼、火事見舞」の晴れ着だったのか、灰撒きの作業衣だったのかでないが、草津の者にも異様に見えたとすれば平素はあまり用いなかつた服装であったに違いない。

住居のうち、最初に冬住みのことを掲げた。これは草津温泉では海拔が高く、冬の積雪寒冷のために常住に適していない。そこで冬季間だけ、山下の草津前口村及び本六合村の小雨に下つて住んだのである。荻原進氏著『草津温泉史』によると、変つた住み方なので諸家の注目を引いたと見えて、それに関する記載が多い。その中の『草津町郷土史』によると、例年十月八日を以て家を鎖して下り、翌年四月八日を以て営業を開始したが明治三十年以降、次第に冬住みを止めに至つたのである。この四月八日、十月八日は、山開き、山経いの日に一致する点が民俗学上の興味をひくのである。

冬住みの小雨は、もと草津を開拓した人々の故郷の地でもあったであろう。

次に新築の合意については、群馬の山村地帯に一般に行われていることで、第一集『片品の民俗』でも、「男アルギリ人足に出る。」ことが報告されている。また、新築儀礼においては、こゝよりも、もっと儀礼的なことが利根郡利根村砂川にあった。(わが赤城根村)

これ等については、著者の『山村の風俗と暮らし』中にも報告しておいた。

屋根は  
カヤ屋根

「風俗の古樸奇異なるは、村中に夜具持てる者は数える許にて、家々の席毎に炉ありて、固より薪に乏しからぬ地なれば、夜は衣着たるまま終夜背をばあぶりて臥す。」

あるようなことも、かつてはあったのである。この炉邊の名称について、ダンナザシキ、ウワソザ、シタンザ、ヨリツキ等はそれでよいとして、ヨコザと呼ばれるのがヨリツキの位置にあるといふ報告が、長平年トタン・瓦等も

普及して来たこと及び小倉からなされているのは、果してそうであろうか。『秋山記行』には「こさ」または「御座」を上座としているのは、伝聞の誤まりであつて、ヨコザとあるべきではなかつたか。そしてヨコザが上座とするならば、この報告にあるヨコザは、近年になつての変化かとも怪しまれるのである。

これ等の座席が、どのように使われるかについては、本文中に報告がある。

土間をロジというのは、吾妻から利根の山村にかけて、通じる。うまやの奥の土間に、味噌たきの大釜が置かれ、釜神もこゝにいますと考えられ、正月十四日の夜には、こゝに諸道具を供えて祭るのである。

屋敷神については、信仰の項参照のこと。

終りに附屬屋について。

母屋の他にオヤ・コヤその他の区別があることは報告によつて知ることができるが、こゝで特に注目されるのは、ウダツまたはウダツ屋のことである。この小屋は、最も原始的、簡単な小屋で、地軸をつけず、マタバシラを柱として、これに棟を支えさせる小屋を言つてゐる。

ウダツについては、さま／＼な用法があり、昨年（昭三六）八月九日付朝日新聞に柳田国男先生が掲載された『意味深い「ウダツ」』の一文は、非常に示唆に富るものであった。それによると、通例建築仲間でいうウダツは、三尺ぐらゐの東柱をさして、『和名抄』の中にも説明はあるが、それ以外に「土台から棟まで通した柱のことを言つてゐる例



カヤ屋根の家の小倉（市川昭次郎撮影）

次に平面形であるが、四間×六間ぐらゐが普通であると言われる。間取りは一般に不整形、くい違ひ田の字形であるが、湯久保の報告例は整形と見られる。これは例外と見るべきであろう。各部屋の名称は特に変わつた点もない。

台所は普通板張りになつていて、そこに大きな炉がある。『秋山記行』には「いろいろをちろと申」とある。こゝを中心として家族生活が営まれていたであろう。大概文彦の『上毛温泉遊記』に、



1



2

## 倉（世立）

1. セイロ倉
2. ハメオトシ
3. ハメオトシの倉  
のハメに木のくぎを  
うちつけてかべをぬ  
る。木くぎがわかる。  
(都丸撮影)



が中央から離れた土地にみられる。」として、信州蓼科山麓のウダチ造りは、みな貧乏で、小屋と言う代わりにウダチ造りと書いてある。しているのは、六合村のウダツに近い。先生はさらに、その分布を山梨県塩山附近のウダツ柱、伊豆下田、静岡県安倍川上流、沖縄のウツタチバラの例をあげられ、伊勢神宮の棟まで通る柱、出雲大社の棟持柱から民家の大黒柱にまで及ばれ、建築上意味の深い柱だとされている。六合村のウダツヤは、現在人の住まない小屋にしかすぎないが、かつては、蓼科山麓のウダチ造りのごとく、人の常住する住家であり、あるいは、民家建築の、ごく原始的な形態を示すものではなかつたかと思われる。ある。

ただし、田代原の報告では、カヤ垣、カヤ屋根で「床は棒を並べその上に板を並べ、その上にネコ又はスゲムシロを敷き、冬はネコの上に更にスゲムシロを重ねた。」とあるから、この方は人が住んだのかも知れぬ。それが次第に零落して、單なる附屬屋に堕して行く過程を示すものかと思われる。

附屬屋のうち、土蔵についての報告は全然なかつたが、附け加えておこう。この土地にも土蔵はたくさん見られた。しかも雪のためであろうか、または土質や技術上の問題であるか、まわりの土がはげ落ちたものが相当にあり、中の板張の状況も観察するのは好都合であった。また九つきの板だけのものもあった。

この地方の土蔵の基本的な構造には二通りある。一はハメオトシと呼ばれる。周囲の柱に縦のみぞをほり、羽目板を上から落しこんで板壁とするものであり、他の一は、セイロと呼ばれる、厚板を下から順に重ね上げる一種の段倉式のものである。もちろん、どちらの場合も、この上に土蔵をねるのであるが、その際、壁の崩落を防ぐために、竹釘を板面あるいは壁面に打ち、または繩などをぬりこんでおく。

# 一、食 制

## 1 一日の食事

朝茶のこ これは前日の残物をオムスピとか、団子にしてたべた。

朝飯 これは御飯だったが、稗、麦、粟等にかけてとしてカブなどを入

ヒル これは朝飯の残りをたべた。

コビリュ これはイリヤキとか、ボチャヤキを作つてたべた。

タ飯 ろどんなどをたべたり、汁団子などを作つてたべた。

タ飯 うどんなどをたべたり、汁団子などを作つてとてとしてカブなどを入

冬うちあさはん、ひるめし、ゆうはんの三度。五九月彼岸ごろま



自家製の豆腐

この日、部落に葬式があつた。(京塚)

井田 安雄 摄影

ユーハン  
コジュウハン  
オヒル  
タ飯

煙で食べる。

以上は夏。冬はメンバなどの造る関係で、ヤシヨタをとつた。(世立)

一日の食事回数 農繁期は四回、普通閑な時は三回。  
農繁期のめし。

朝めし 七時  
ひる 十一時  
こじょはん 三時半

夕飯 七時十九時

飯をたべる用具は大きな茶碗が用いられた。老人は軽くもつた。箱籠  
が各自にあり、その中に各自の茶碗、皿等をしまっていた。今はチャブ  
台が一般である。

弁当はメンバに入れて持つていった。之は五合位入る曲物で、入山で

できた。塗り物も素木もあった。水は瓶で運ぶ。

副食物は昔は菜食が普通であった。油いため位が御馳走だった。草津

では、あさはん(めし)・ひる(めし)・こじゅうはん(やきもち)・  
ゆうはん(めし)となる。仕事をするときは夜食をくう。林業関係の人  
は、間食をこのほかの時期にもたべることがある。(湯久保)  
日の長いとき、重労働の場合には、コジュハン、コビリをたべる。

(小倉)

朝食 ごはん(稗、麦を米一升に対し一、二合入れる程度)  
昼食 うどん(乾しうどん)。忙しくてオキリコミも殆どできない。

夕食 うどん(乾しうどん)。忙しくてオキリコミも殆どできない。  
アサバン

(田代原)  
アサコジュウハン 朝草刈りに行く人が、稗などの焼き餅を一つずつ  
持つてかけた。家でも食べる。

オサバン

ユーハン  
コジュウハン  
オヒル  
タ飯

煙で食べる。

以上は夏。冬はメンバなどの造る関係で、ヤシヨタをとつた。(世立)

一日の食事回数 農繁期は四回、普通閑な時は三回。  
農繁期のめし。

朝めし 七時  
ひる 十一時  
こじょはん 三時半

夕飯 七時十九時

飯をたべる用具は大きな茶碗が用いられた。老人は軽くもつた。箱籠  
が各自にあり、その中に各自の茶碗、皿等をしまっていた。今はチャブ  
台が一般である。

弁当はメンバに入れて持つていった。之は五合位入る曲物で、入山で

できた。塗り物も素木もあった。水は瓶で運ぶ。

副食物は昔は菜食が普通であった。油いため位が御馳走だった。草津

## 主食

ムギまたはヒエと米を半々に混ぜたり、ムギ七と米三にしたり、アワと米を混せたりした。三種混せたこともあるが、ムギとヒエだけの飯はなかった。水田はなかつたし、オカボも全然作らなかつた。(小雨)

代用食 大麦は一反に七升まきといつた。

大麦のひき割りのあら粉をこねてムギバナダンゴを作つて食べた。

小麦粉はこねてにぎつていろいろの灰にくべて焼いたヤキモチや、ほうろくでいったイリヤキ(ウスヤキ・ホウロクヤキ・ヒツベタガエシ)等にして、さとうをつけて食べる。ウドンは毎晩のように食べる。(小雨)

ウドンはモノビでなければたべなかつた。小麦粉は米の代用にされる程大事であつて風邪でもひくと小麦粉団子をたべて喜んでいたものである。(田代原)

むかしはひえ、あわと麦が主食。  
今は米が主で、麦を少しませる程度。

代用食としてはくずっこなががあった。これはくぞばの根を掘つてつくつたということを聞いている。くぞばの根を掘つて、うすでついて、木で三度ほどこして、しろい粉にしたもの。これに小麦粉、そば粉をまぜて、だんごややきもちをつくつた。(小倉)

主食は、米に、麦・稗、または蕪などをまぜて食べた。その割合は家によつてちがうが、五分五分、七分三分(七分がませもの)の場合も、三分が混ざ物の場合もある)等。

汁は味噌汁が主で、葱・いんげん・馬鈴薯などをコに入れる。

## 一、食 品

### 2 ハレの日の食物

長野原方面と交通が容易になつてから豆腐類、魚類等が入つて来た。山でとれるものは、栗・タルミ・ワラビ・ゼンマイ・ウド・キノコ類(椎茸、モトアシ、松茸、ネズミアシ、マイタケ)(小雨)

### 1 月十五日には小豆がゆ

おまつり(八幡様)のときと秋葉さまのときは赤飯をした。(湯久保)



大きな土の窯(京塚)

とうふづくりなどにつかう

井田安雄 撮影



ヤナと干本ギネ

都九十九一撮影

代用食は、稗團子、粟團子、キビ團子（この場合はキナ粉、砂糖をつける）。

小麦のオヤキ（焼きもち、ホーロクで小麦粉をとかしたもの）を焼く。シベタガエシ・イリヤキ・ウスヤキ・ホーロクヤキ等種々よぶが大体同じもの）。

救荒食物にはクズの根、ワラビの根、笹の実等を用いた。

御馳走は節句等の祝の日に作った。赤飯、すし、ボタモチ等である。外に一日、十五日、二十八日の三日は麦めしでなく別の御馳走を作った。

祝日とその御馳走

穂蕎祭——赤飯

五月節句——餅

オカマツブタ——赤飯、ナレ

十日夜——餅頭（八月一日）

七夕——これは一定していない。

（小雨）

飯は麦、ヒキワリ（信州岩村田から買入れていた）が約九割位入った

もので、米はやはり信州から買っていた。

一般には麦めしが煮えかえったとき、粟をふりまいた程度のもの即ちドウシソメシ（乞食は色々なものをもらってたべるので、そのようにまでためしをいふ）をたべた。これが米だけの飯よりかえってうまかったのである。

昇食と夕食の間にはヒエの粉のやきもちをコジュハンとしてたべた。

（広池）

主食：ひえ、むぎ、あわ  
米なんぞは、小さい頃は具合がわるくないとしてくれなかつた。病人には米を竹の筒に入れて、米だ、米だといて振つてみせたといふ話も残つている。

農繁期には暗くなるまで働いたが、小麦がとれるので、おやつにまんじゅうなどをつくつた。（品木）

凶荒食物 不作の年にはワラビの根からデンブンを取つて食べたといふ。戦時にササの実を取つたことがある。ササは実がなると枯れるという。（小雨）

飢餓のときの代用食には次ののようなものがあつた。

ささのみを粉にして食べた。

わらびの根、くずの根は沈澱させて真白にし、それを粉にして、だんごをつくつてたべた。

ならのみは粉にして食べた。（小倉）

## 2 稗の食べ方

稗にモチビエ、ウルチのヒエ、朝鮮ビエ（穂が三方に分かれている。）

とあり、穂を搾打してトーミにかけ、実は大釜で蒸し、やわらかくなつたらこれを干して水車にかける。

カテメシ 鍋にヒエとカブをそいで入れるかサイの目に切つて入れて煮る。甘味も出てやわらかく、これを常食としていた。ヒエ飯は腹がすかない。

稗だんご 粉にしてだんごやまんじゅうにして食べた。

稗餅 モチビエをついて餅にした。

コナネリ 小麦粉にヒエの粉を混せてねつてうでたりして食べた。

ハナネリ わらび粉と混せてねつたもの。（長平）

## 3 食品名彙

ヒエメシ・アワメシ・ヤキモチ・エリヤキモチ・ダンゴ・マンジユウ  
カテメシ 稗飯の中には、カブヲ（蕪）をたゞつきつて入れて煮て食つた。甘くてうまいものだ。そのせいか、ブッケーシ（病）は、むかしはなかつた。またインゲンの種も、稗飯のカテにして食べたが、子供の

ころはほんとうにうまいと思った。

ボタモチ 稲か栗を煮て手杵でつき、これに小豆あんをつけたもの。

アンモチ 白でついた餅の中にあんを入れたもの。

ニカラミ 右の餅を小豆あんの中に入れて、一しょに煮たもの。

ヒエモチ アワモチ・キミモチ・ソバカキ・ウドン。

ソバ つなぎにはよもぎを使う。

ホウトウ にこみうどん。ただしうどんより山廻のものをホウトウと

いう。

ソバネットウ 汁をつくると、その中にそば粉を入れてかきまわす。

オツケダンゴ 汁の中に、小麦・朝鮮稗・そばなどの団子を入れる。

(世立)

ボタモチ、ニモチ、ボタモチといふのは、もちあわをふかしてついて、あんこをつけたものをしていい、もちあわをつけて、あんこをつけたものはニモチといって区別するといふ。(品木)

ジャオウ ふきの新芽でうで味噌であえてたべる。「ジャオウゴンゲン、ミズゴンゲン、イマデジヤ、デエメエ」といふ。これは痔に悪くなる(神経痛)によくきくといふ。(下太子)

### 三、食 料

#### 本の実

シダミ(どんぐり)、ドングリ(ならの実)は、ゆでたものを麻袋に入れて、川水にさらして、あくだし、乾かしたもので白でついて粉にして、トウミギ(唐糸)のキナコにまぜて食べてみたことがある。不作の年だった。ところの実は食べなかつた。ぶなの実はやつてみたがとても食べられなかつたということである。(世立)

#### 笹の実

ササは六〇年に一べん花をつけ、実がなれば枯れてしまうといわれ



干し草 (小雨) 今井善一郎撮影

る。一度、その年は稗に実が入らなかつたので、村中で出でとつた。大麦の種子みたいだつた。粉にして団子に食べた。戦争中も、これをとつて食べた。たいへん助かつた。その時はコザサであった。ハイジク(竹)にも実がなつた。(世立)

#### わらび根

三月、山の雪が融けかかるところ、掘ってきて、二~三日川の中にはとばしてから女衆が、川原で、それをトン、トンと叩いて中の筋をとつた。これは一玉にして五両ぐらいに売れた。沈殿したハナ(澱粉)は集めて粉にして食べた。茶碗に入れてお湯をかけると、モクモクとかえつてしまふ。これをジリヤキにして食べた。京塚から来る友だちの中には、毎日これを弁当に持つてくる生徒もあつた。ハナはのりになるので、機屋や傘屋に売つた。(世立)

春秋の農閑期に雪のない時を見てわらびの

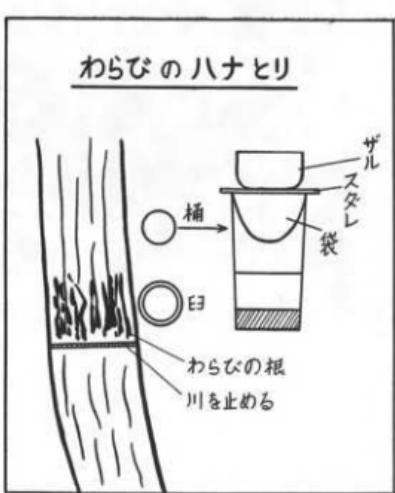
根を掘つて粉をとつた。昔は見渡す限りの原野であったが、近年は植林でわらびの原も少くなつた。

試し掘り一秋も早いうちがよく、根を掘つて見ると鍼に白い粉が多いので、あちらこちら試し掘りをする。それ起し一試し掘りで澱粉の多そうなところが見つかるとくれ起

しをし根をはたいてとる。夕方まで掘って帰る。

臼でつく。根は川で洗い、臼に入れてつく、つき上がるとその汁を袋でこして大きなヤナ（桶の長いもの）に沈ませ、上水をこぼし、水を入れてかきまわし、また沈澱させて上澄液をする。さらし終ったものを干して仕上げる。これをハナと呼んでいる。  
食用方法—湯でかいて食べるか、残り御飯の中に粉をといて入れてまで食べる。ねっとりとしている御飯になる。

わらび繩—わらびの粉をとった残った糸を干して繩にする。細い繩で、水に強い弾力性のある繩が出来る。植木屋がショロ繩の代りに用いた。(長平)



食用植物  
うど・わらび・せんまい・ふき・ままつこの葉・ととき・うるい(うりつば)・じゃおうじ(ふきのとう)・たらべ・すいこん(すつかんぼう、子供がたべる)・よもぎ(くさもちの材料、これの小さいときはもちぐさという)・あけび・くるみ・山ぶどう・ひらくち・またたびの実・きのこ(めいたけ・しめし・まつたけ・しいたけ・つばもとあしきんとき・はつけ・ねずみあし・ちちたけ。ちちたけは、ちいばともいう。ちちたけは夏であるが、外のきのこは九月から出る)。(湯久保)くり・くるみ・山ぶどう・こはぜ・しらくち(よそでは、こくわといふ)・あけび・やまつか(あかいたまあり)・わらび(これは壳を剥る)・せんまい(壳を剥る)・ふき(壳を剥ばうれる)・わかな(とよき)・うるい(うりつば)・せり。

ふきのとうのことは、じゃおうという。

じやおうごんげん みづこんげん

なつになりや やけしぬぞ

これは春先に子供がうたう歌。ふきのとうは、雪がきえると同時にでてくる。(小倉)

食用植物名集

つる草であつて、ところに似ているが、ところは食べない。長い根が出て、そのところに、じやがいもより一寸小さいくらいのいもを

木 ド

アカモタシ・シイタケ・シマモタシ・ドロモタシ・イワタケ・イツボ

ンシメジ・メ

一タケ

まいたけ。昨

年（昭和三十五年）八貫匁

ぐらいのをと

つた人がい

る。出る木が

決っている。

カワヒキは

かたはのこ

と。

アカンボウ

まいだけに

ならの木にぶら下って生える。

似ている。

シジノキンタマ  
センボンモタシ

千本しめじ  
チユウボ  
乳茸  
(世立)

キントキ・ハツクケ・シメジ・マツタケ・シイタケ・シズミノアシ・ツバモト・  
チイボ以外は秋九月頃からとれる。（湯久保）



栗拾い（幕板）

井田安雄 撮影

## 二、服 装

### — 晴着と作業衣 —

はれ着…よそいぎという。

ふだん着…ちよいちよい着、ふだん着という。

仕事着…やまさきという。（品木）

晴着…ヨソユキという。チャイコイギは長野原あたりに買物に一寸

出掛けるときに着る。

ふだん着…仕事着としてはヤマギ、ハンキレなど。

腰巻…十五六オ頃から着た。これは母親が作ってくれたものである。

禪…モッコフンドシを着る。（広池）

山仕事と畠仕事で昔は荒かつた。

ボヤ切りや木伐りの時は筒袖であったが、畠仕事の時は長袖にタス

キをしたものである。背負仕事と軽い仕事の時もその様にちがつてい

た。

仕事によって半襟などもことなり、筒袖のワキをあけて赤いキレなど

のぞかせて美しく見せる気持があった。（引沼）

友達が久々で来て遊びにゆく時など晴着をきる。病氣見舞などにも着る。勿論婚葬の時は着る。

晴着の事をトフトキという。（引沼）

足…草鞋、手製の足袋、冬は雪グツ。  
(ラ)

背…ケンデエ、(蓑、昔は手製、入山では岩スゲを用いた。普通はワ

頭…スゲ笠（これは夏）

雪の降る時は昔はワラグツにカンジキをはいたが、今はゴム長を用い



ケデ一

都九十九一撮影

平常着は普通の長着冬は袴、綿入、夏は单衣物で、羽織や絆天を着た。足は下駄か草履。足

(小雨)



冬住みのあと (小雨)

石垣だけが残つてゐる。中央は草津道  
近藤義雄撮影

来たまま沼尾に

住みついた人も

一軒ある。昔は

草津と六合村の

戸長役場がいつ

しょで小雨があ

つた。冬住みは

最近なくなつ

た。

新築

頼まれば何

日でもコウリヨク

タに出る。コウ

リヨクの範囲は

同部落の者は出

食と夜食を出す。財産のある人は酒も出す。

薺刈 十月以後の部落の会議の時に施主は申入れをする。山の口あき

が終るとコウリヨクで薺刈りに出る。今はトタン葺きが多くなつたので

コウリヨクも少くなつた。

ワタマシ きた人にバクメシ(丸麦の飯に小豆を入れて半日ほど煮て

かゆ状になつたもの)を一ぱい出す。

「ミョウガが出ると草津の人が泣く」といわれるが、ミョウガの出る時期になると草津ではお客様が来なくなるので、こちらへ冬住みに來た。夏期になるとまた行つてしまふので、その家は空き家になつた。そこ出身の人が草津に出たわけではなく、縁故もない人が來ていた。冬住みに

## 冬住み

## 三、住居



巨大なる大黒柱（小雨）  
市川久義氏宅 今井善一郎撮影



セガイ作り（小雨）  
二階、妻の三階の部が順々に出張つてゐる  
今井善一郎撮影

火入れは、水性の男の人に「はじめてのろだから火をつけてくれ」といって新らしいマッチで（昔は火打石できり火をした）ろに火をつけた。入る順は、施主がろの正面に、三日以上上すけたコウリョクの人が集つてくる。そこで主人が救援を馬を入れる時は、塩を少し馬になめさせて牛馬商の人引



長平 本多春長氏宅

間取りと住み方

い所で五五種ある巨大な木材が使用されている。

（小雨）



偉大なる馬屋類（マヤビタイ）（小雨）

今井善一郎撮影

き入れる。  
これは新らたに牛馬を買った時も同様。（長平）

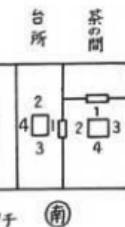
材木では巨大的な材木を用いた家がある。市川久義氏宅の大黒柱は大きい面六二種（内面の部五八・二種）、小さい面四五種（内面の部四二種）ある。又同家の既びたいは厚さ大きい所で七六種、狭

た。おつかあがする。(小倉)

### 屋敷神

本家分家の屋敷神は本家の稻荷を共  
同におがみ、分家にはない。稻荷は春  
は二月の初午に秋は家によって定めた  
日にお祭りする。(小雨)

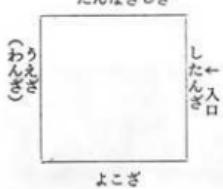
### 附 属 屋



いろいろは座敷と台所と二ヶ所ある  
のが普通である。その坐席は上  
の如くである。

- (4) (3) (2) (1) 主婦  
客 又は家人

(小雨)



山や煙に臨時に作る小屋をいう。地  
フクを据えず、柱を掘立てにする。柱  
の先端を二又にして、そこへ横  
木をのせるようにする。(小雨)

ウダツヤ：ちふくの入つてない家のこと。柱だけまるっぽの家のこ

と。土に柱をつとおしてつくる。山から二又の木をとってきて土につ

つとおしてたて、それに丸太をわたして屋根がかゝれば、それがウダツ

ヤ、これは自分の家でつくる。

クズヤ：かややむぎわらでつくる。(湯久保)

オヤ：いくぶんかいのものをいれるたてもの。小屋よりはいくぶんか

土台の入つているもので、これは大工がつくる。居宅の近くにつくる。

コヤ：あわ、ひえのからや干草などを入れておく建てもので、土台が

なく、またばしらをつかつてつくる。大体はたけにつくる。(品木)



マタバシラの掘立柱を立て、カヤ垣、カヤ屋根である。床は棒を並べ  
その上に板を並べ、その上にネコ又はスゲムシロを敷き、冬はネコの上  
客があると子供がにげてあけて  
客に対する手配をもらう。  
よこざ…ぼや、たきつけをおい

に更にスゲムシロを重ねた。

マタバシラはスゲ繩やアワガラ繩で結わえる。これはスゲ、アワガラを花敷でネドにひたしこれをあげて干しておき、使うとき水をかけてはとばし、石の上で木槌でたたいて繩になった。（田代原）

オヤ…麻を干すとき収納する小屋。

コイヤ…肥料を入れる小屋。

ウダツ…獨立小屋。ウダツのオヤもある。（下太子）

### 補足資料(2)

#### マゴダキ

マゴダキは、惣領（長男・長女）にかぎつてした。嫁の里方と婚家の両方で二回した。日は、男女とも生まれて二十一日。この日まで嫁さんは里方にいて、その日の朝里方でマゴダキをして、その日のうちに娘家にかえつきて、ここでマゴダキをした。里方へは嫁の近親者を招待し、娘家へはむこのむかしは、入山の鎌門で結婚していたのでこういうこともできたが、最近はしなくなつたようだ。（引退）



ウダツ屋（小雨）

今井善一郎 撮影



ウダツ屋の柱の上部（小雨）

今井善一郎 撮影



コヤ（生須）

中には干草がいづばい

都九十九一 撮影

# 生業

## —交通・交易を含む—

近藤義雄

### はじめに

六合村は、南北に細長い村で、北部の入山地方は交通も不便で開発もおくれた地方であり、南部は鉄道も入り、道路もよく交通の便にも比較的恵まれているので、生業をはじめ民俗にも多少の相違がある。特に古い民俗は主に北部に残っていた関係上、今回の調査報告の内容特に古いものでは、生業をはじめ民俗にも多少の相違がある。



馬頭観世音（生須）

草津道に生須と小雨に一対、天保12年建立。  
信州高遠石工作  
近藤義雄撮影

ため交通関係の資料は南部にかたよっていた。また、南北とも草津に依存した生活をしていた村である。

### 交通

昔は草津温泉への本街道が村の中央部を横切っていた。この村は沢渡温泉から暮坂峠を通り、生須—小雨—草津という道が幹道で、部落は須川に添って分布しているので、幹道からそれている部落が多かった。村の各部落の交通は、ほとんど須川添いの道であったが、近年野反湖の開発により、村の幹道は長野原から野反湖へ通ずる川添いの道となり、暮坂越えの草津道はほとんど利用されなくなってしまった。バスも野反まで通り、鉄道も南部の太子まで入っている。

また、古くは、野反から魚野川の上流に出て長野・新潟県の秋山地方との交通もあり、若干の海産物もこのルートで入って来た。その状況は、鈴木牧之の秋山紀行にも記されている。

長野原からの道は、赤岩、日影などへの通路も早くからあったが、草津への街道も湯久保を通っていた。暮坂越えと共に草津道の本街道で、土地ではドウシヤ道などと呼んでいるが、高崎から室田を通って草津に入る人は主にこの道を通りたもので、道するべなども湯久保に残っているから、昔は相当重要な道であったと思われる。

交通関係の民俗として今回採集されたものは主に暮坂越えの草津道であり、峠や宿の茶屋に関するものが大部分で、峠の信仰などはほとんど

得られなかつた。ただ、生須と小雨の間にかけられた橋の修理について、霞領二十一ヶ村の負担のことが古文書などにも度々見えているが、霞領内の共同仕事など橋以外の関係も調査する必要があつたと思う。組合村の性格を明かに出来なかつたのは時間の関係上止むを得なかつた。

## 交 易

山奥の村で、草津に依存した生活であり、その取引される物は変化しているが、いまだに草津関係が強く、村を支えている。しかし、村に入つて

くる物質は、北部の入山地方は新潟の秋山地方との関係が深く、馬よりも牛が山の交通に使われたことは注目してよい。尾瀬沼の畔を通る会津街道でも、或は甘利の内山越えでも牛が多く使われていたが、山の細い道を通りのには牛が強かつた。特に狼に対するとき、馬は弱く牛は防

ぎ得たので運搬には牛が適していたことをよく聞く。六合村ではその話はきけなかつたが、秋山への山奥の道は狼の群れに出会うことも多かつたものと思う。秋山記行の中にも狼の大群にあつた話が記されているのもその間の状況を推察できる資料である。

村へ入つてくる者としては、御師、興服屋、薬屋、小間物屋、遊芸人などであるが、碓氷峠の熊野御師が全村をよくあるいていた。しかし、代参講は村にさまざまな文化までもたらすものであるが、山奥の関係かその種類が少い。女などは村から外へ出る機会是非常に少く、最近まで吾妻の西部から外へ出る人は少なかつた。婚姻関係も村内が多く、特殊な家柄や、財産家でないと遠くとの縁組みもなく、行商人に依存した生活であった。

変つたものとしては借馬制度があつた。これも信州の佐野との関係だけであるが、山村の苦しい生活から生れた特殊な現象とみるべきである。

生業関係の資料は豊富に集められた。南部では農業関係の資料もあるが、北部の入山地方に集中された。特に都九十九一氏の数回にわたる調査の結果まとめた曲げ物、狩猟の民俗などあり、井田安雄氏の小倉狩りのはなしと共に山村の生活を詳細に記述することができ、県内山村生活の貴重な資料となるものと思う。明治十年の郡村誌から物産、民業関係を四、五村ひろって見ると次のとおりであり、当時の生業関係の状況を知ることができる。

### 赤岩村

物産 動物 薩百五十石其品良カラス、同国前橋ニ売輸ス。

植物 麻五百貫目下品ナリ、東京ヘ売輸ス。

民業 男農業ヲ業トスルモノ四十一戸、商五戸、工三戸、医老戸。女農業 メラノナス者九十老人。

### 生須村

物産 薩五石老斗、麻百四拾貫目。

民業 男農業ヲ業トスル者十八戸、女農業ヲ業トスルモノ十八人。

### 太子村

物産 薩拾石、麻其質下等四百五拾貫目近傍駅町及東京ヘ輸送ス、炭

一千俵(但三貫目俵)、薪百駄(老駄二十一メ目草津ヘ輸送ス)

民業 男農業ヲ業トスル者二十戸、炭薪ヲ業トスル者二戸、女農業及

農桑ノ業ヲ助ル者二十七人。

### 入山村

物産 薩粉百五十貫目、蕨穂拾駄、下駄木履百駄、柄杓三百駄、杓子五十駄、中之条町、渋川村、高崎駅諸方ニ輸出ス。

民業 男 農商工業及ビ獵師フル者百七十七戸(商十五戸、工百七十五戸、獵師十二戸)、女 櫻織、菅蓆等ヲ業トスルモノ二百五十五人(注カツコ内は朱で消した線がある。)

なお、文政三年に記された鉢木牧之の秋山記行からその当時の状況を記すと次のように記されている。

抑此入山と申は總名にして、十二ヶ處に飛ぶ村家あり。其内に温泉の出る場一ヶ處ありと云ども、人界の外の極なる辺地、草津の者さへ其趣向も知らず、人の往来も稀成る処とかや。実に草津温泉さへ深山の奥にて四方の里地に遙きに、又、此處の山奥にて。平昔の業は、草津に入湯の者（が）調る木枕・木鉢・下駄類・箸箱・天びん棒・折敷・椀・搾蘭木杯のたにさく、又、自家の材木、都て板木等伐り出し、是を男女の業とし在ば、秋山通行の狩人輩が奔走の内にも、處々に、入山の樵夫にて、山師の道もあるとな。

以上の状況から見て、入山地方の民俗は、江戸時代以来の生業状態をのぶものが相当豊富に採集された。しかし、近年鉱山の開発や野反湖の観光開発が進められ、急速に生業関係も変化してきた。曲げ物細工なども村中で行っていたのが僅かに数軒、これも草津の湯に用いるか、勢多郡城南村の産泰神社の底ぬけびしゃくなどに売出されている程度となり、この地方の特産も変ってきた。野反湖のはとりにさくリンドウや山奥のアカツルなどが東京方面に売出されてきた。古い山村の生業関係の民俗も今が最後の時期であることを痛切に感じさせられた。

## 交通・交易

### 草津道（暮坂越）

生須は沢渡から草津へぬける中間で、昔の草津入湯客はほとんどこの道を通つたものである。当時の道巾は六尺と九尺道、沢渡から生須まで四里八町、途中生須から二里が鉢になつていて。草津までは二里、この間に男は籠屋、女は馬方をしてかせいだ。

馬方 茶屋には馬さしがいて、客がくれば誰々と割当てる。中には草津までオットー車というのもあり、沢渡の方から来た人がする。期節は七月八月が最も多く、十月になるとほとんど通らなくなり、百

姓仕事の忙がしい時期であったから自然百姓はおろそかになり、もうばら交通関係でくらしていた。駄賀は草津町までは五十銭、沢渡まで一円



ヤダラ（生須）

馬の両脇につけ人がこの中に入り草津道を往来した。

近藤義雄撮影



草津道の茶屋（生須下の茶屋）

近藤義雄撮影

十銭であった。馬には両轡を用いた。両轡というのは折りたたみ式で、馬の両側につけ、木の樋の下を繩でまいたもので、その上に布団などおいて客を乗せた。客はこの箱状の中に入り荷輪に手をかけてのつていだ。当時ここのか料金は日本一高いといわれていた。客は道端の馬乗り台

石から（今部落の下にある記念碑の台石になっている）馬にのった。

沢渡へ行く時は十時と十一時に出かけて四時頃ついたが、暮坂峠にかかると坂が急なためゆれがはげしくなるので「おひろいをねがいてえが」と客に声をかけ歩いてもらつた。若い客はどんな坂でも乗つたまま行くことが多く峠までついた。峠には茶屋が二軒あり、一軒は小雨から出た家、一軒は大岩の人であつたから、こちらの馬方はたいていは村の方へ客をよせ、そこでしめを食べさせたが、「皿一錢で客によつては馬方にもくれた。大岩の人の茶屋は若い娘がいて見晴らしもよく、こちらは老人夫婦のため客を生須の人の茶屋へよせたくも、よく反対側につけさせられた。

草津へ行く時は客引きが新田まで出でていて客のとりつこをする。宿へつくと人によつては駄賃以上にくれる客もあつた。草津へ行く人は歩きが多かつたが帰りはたいてい乗つた。籠は男衆がかかつぎ。えらい人でないと乗らなかつた。二人でかづぐので馬の倍のねだんであり、外人がよくのつた。當時（明治二十年前後）は毎日異人を四、五人見た。大きい人は割増をもらって運んだ（以上の話者は明治四年生れ黒岩なべ女）。

下の茶屋の市川昭次郎氏の家には、當時茶屋でつかつた皿類、櫛、机などがある。すわり机の裏には、

千時明治六年  
西第八月  
東京元修根邸内住  
御雇陸軍大教師  
仏人  
デシャルム

とある。茶屋の縁側は巾五尺程の土間の奥に細長くついている。

小雨  
櫛  
が、霞領（西部吾妻のほとんどが入つてゐたと思われる。）二十一ヶ村が援助してかけていたので、霞櫛ともいつた。以前生須には百五十円という村有金があり、これは三百円の二分の一で、小雨と半々で持つていた櫛の基金である。この櫛をめぐつて両村では何回も対立した。その根本は、両宿が接近していたので、草津への輸送の分担が一ヶ月の上十七日は生須、下十三日は小雨と分担していたことにはじまるもので、公用



明治6年の机（生須）  
仏人デシャルム草津入湯に立寄つたので新調した。

近藤義雄 撮影

同断

日本人

奥田賢英

人馬の割当と橋料の負担であった。次に關係文書の二、三を記すと左のとおりである。(生須)

生須村小雨村駄賀之事

一 売ヶ月之内上十七日生須村、下十三日小雨村ニ相定、草津より上沢渡へ附送リ申諸荷物之義者十三日ハ小雨村ニ面おろし附可申候、十七日ハ生須村ニ而附可申候、上沢渡筋より草津江參候荷物之義ハ生須村ニ斗おろし小雨村當番之内生須村ハ小雨村之者老人宛相詰、荷物草津へ附送リ可申候、十七日者生須村ニ而附送リ可申候、右之通御伝馬御廻状何御役ニよらず生須村十七日、小雨村十三日相勸可被申候。小雨村番之内ハ運々為致間敷候、若運々仕候ハ、證之者共方へ御掛り可有之候向後相互連乱為申間敷我等共加判仕候為後日仍如件

草津村訖人

名主 伊左衛門

訖人 六兵衛

同断 惣右門

同断 佐左衛門

同断 武衛門

同断 権兵衛

同断 字右衛門

同断 佐左衛門

同断 武衛門

同断 権兵衛

(生須村有文書)

生須村衆中

為取替議定一札之事

一小雨村生須村境ニ掛渡有之橋一条之義是迄差縫居候処今般御巡檢港半大屬様草津村江御出役御利解ニ基兩村示談行届き候上者先般佐藤權少属様江差上候済口之通り賣二十巷ヶ村より引請對談仕候上金武百廿五兩也巷ヶ村全百拾武兩武歩ヲ、請取預り置右利金ヲ以木品等貿易可申候且人足之義者両村軒別ヲ以罷出永久通行無差支掛渡し可申候其余何事

ニ寄須一村同様肆間敷談判可致様示談行届き候上者重而遠亂申間敷候為後日為取替議定一札如件

右小雨村  
小前惣代

星野重平

百姓代 三月五日

同 断 安次郎

百姓代 市河久三郎

組頭 星野惣五郎

生須村 小前惣代

中沢多一郎

同断 藤内次

同断 藤平次

同断 安十郎

同断 安原金弥

同断 日影村

同断 安原人

湯本平内

(表紙) 小雨機済口証文

差上申済口証文之事

一御支配所上州吾妻郡小雨村生須村間ニ掛渡有之土橋道義元御普請所ニ

御座候處明和歲中霞武拾屯村引受自普請ニ相成居候處不行届候處去已年中再応示談被及無拵

本小雨生須兩村江及示談候處不行届候處去已年中再応示談被及無拵

橋本小雨村々ニおるて草津村与頭金平太子村百姓代安七郎右兩人立会

金武百武拾五両ニ而霞村々付引請置候本生須村江度々及示談候處不承

知之義申募候ニ付小雨村より當午年肝煎名王安七郎江願ニ付岩鼻郡御役

所江御申立ニ相成此度御巡檢様御出役佐藤權少風様草津村御旅宿江小

雨村生須村兩村御呼出し双方江御利解之上元立入人日影赤岩丙村江取

扱方被仰付双方江異見差加へ示談左之通り

霞村々付請取申候上者金武百武拾五両義小雨村生須村兩村ニ而金百  
拾武兩武分ツ、請取置永々通行差支無之様示談之上兩村是迄通り睦敷  
軒別人足ヲ以掛渡可申考赤岩村日影林立入示談行届申候上者重而双方  
中分無之候附者此上御役所江御筋等無御座候依之済口為取替一札  
如件

上州吾妻郡

小雨村

組頭 惣五郎  
百姓代 久三郎  
同 断 与平次

生須村  
名主 藤平治  
与頭 勘市郎  
百姓代 又四郎  
百姓代 田中四郎

太子村  
肝煎名主

富沢 安七郎  
同

小雨村兼帶  
草津村

日影村  
名主 平内  
同  
拔人 金 弥  
同  
断頭 順平  
同  
狩宿村  
肝煎名主 源重郎  
同  
太子村  
肝煎名主 安七郎  
同

赤岩村  
名主 平内  
同  
拔人 金 弥  
同  
断頭 順平  
同  
狩宿村  
肝煎名主 源重郎  
同  
太子村  
肝煎名主 安七郎  
同

岩鼻郡  
御巡檢御出役

佐藤權少風様

草津道 (長野原道)

ドウシヤ道は、昔は草津への本道で江戸道ともいつた。道するべに地  
蔵大士がたつていて、長野原道、草津道と記されている。湯久保附近に  
小屋をつくらなかつたのは、山道のため悪用される心配があつたので人  
のとまれないようにしておいた。(湯久保)

外から来た行商人

村の消費物資はほとんど外部から入つて來た。

魚物では魚類が入つて來た。鮑・塩引(鮑)・鰯・鰯するめ・秋刀  
魚及びそのヒラギ、数の子等が多く、鮑や昆布などは誰も貰つて食べた。  
明治になつてからソウメンが入つて來た。これは長野県の上田あたり

から来た。

衣類は江州商人がよくもつて来た。地縫の木綿や麻の織物が多くた。また薩摩あたりから来たという人もあった。

小間物屋は櫛・かん挿し・ザンザラ・タケナガ・キセル・煙草入れ・ガマ口等をもつて来た。又玩具の類も持つて来た。玩具はラッパとかガラガラ等の簡単なものであった。

その他に竹細工なども移入されて来た。籠の如きものである。

その外薬屋がやつて来た。置薬で富山から来るのが多く、大和からも後には来た。本当に讃岐から来たか否かわからぬが、「讃岐高松千金丹、万金丹」など云つて洋傘をさして来た。そして「セイセイ薬舗」の製剤は、「その效能も著し」と口上を述べた。

これらの行商人はこちらが現金を持って居れば勿論現金売りしたが、現金のない場合は貸し売りしたのが多い。又物々交換を行つた者も多かつた。現物で交換したものは溜めびしやく・めんつう・干しわらび・杓子等が主であった。(引出)

昔は越後の秋山地方の切明から来た。主に米・塩鰯・塩等で、牛が運搬に用いられていた。今のように信州から物資がくるようになったのは草津が発展してからである。

牛はこゝで悪い道でも荷を背負つて通り、坂道で寝てもそのまま起上る。馬は背負つたままで起きられないで牛が古くはつかわれた。

(長平)

部落の交易は、草津との関係が一番多い。米・酒・たまごは草津を通つて來た。戦争前は、馬や人の背ではこんできた。(小食)

## 烟の産物と仕出図

蔬菜などを朝の四時頃で、草津で売つて午前中にかえつてくる。売

くるもある。売りに行くのは夏のさかりだけで、この間一日おきか、一週間に二回ほどは売りに行く。売つてくるものは、

花いんげん・トマト・とうもろこし・ねぎ・大根・なっばなどすべてのもの。この中で花いんげんとながいものはとくに多くつくつてうりに行く。売りに行くものは女衆。

ここでは養蚕をしない人は草津の錢をとっている。草津へ行つて売れるものをつくる。それが現金收入となるのである。養蚕をしている人は少しがいどり程度。養蚕をしている人よりも、余計に金をとっている人もある。湯久保から草津までは約一里半、時間で一時間半ぐらいかかる。(湯久保)

むかしは、草津へなにをもつて行つてもゼニになつた。草津はいいところ、妙なところであった。草津にさえ行けば、煙草せんにはなつた(明治十一年生まれの山口定十さんはなし)。(品木)

## 山の産物と仕出図

わらびとせんまい

乾燥して出す。百貫位は毎年出している。今年は生でも出した。主に女衆が原野(マダガサ場)へとりに行く。売り先は草津で、土地に仲買人がいて貰い集め、最近は伊香保や信州などの温泉場へも出している。仲買人の中村氏は伊香保へ百貫、四万へ百貫出したといふ。

きのこ マイタケ(一個で一貫以上のものもあり、生で草津へ出していた)、チクボ(自家用)、シイタケ、ナメコ(この二種は人工で行つていて、長平は少いが入山中では相当出している)、アカモタシ(自家用)。

リンドウ 十五年ほど以前から野反へ採りに行って草津などへ売り出した。今は東京市場へ直送し、関西方面まで運ばれている。野反までは往復四時間かかり 五六百円の収入がある。長平で一日に二千本位い

とつて来る。一本三、四円。リンドウは水上げがよく、一週間位い水に入れないとも生きかえる。太子駅では忙がしく取扱ってくれないので便利屋にたのんで出す。

アカツツル 野反で採つてくる。生花の材料として最近相当出るようになつた。(長平)

### 村へ入つて来た宗教家、芸人の類

おれ配りには出雲大社がよく来るが、古くから来るのは峰さんであつた。峰さんはどの家へ入つても炉辺の上座へ坐る事になつてゐた。

寒い頃來るので「峰さんが来たから寒い」などいた。村の役員の家に泊り、家をまわつて御祈禱し、お札を配つて行つた。奉謝はソバ粉一升位が普通であったが、今ではお金を三十円から五十円位さし上げる。

一の宮様も来る。これも三十円から五十円位のお金をする。

高野山といふのも来た。これは二人並んで来てお経を上げていった。お金を百円位あげる。

丸山教会といふのが一時この村に来て厚さ四分位の五寸四方位の板に丸山教会とかいたのをトボグチの処へ打ちつけ行つた。

三峯さんは、こちらからも参拝したが、やはりどういう人か鼻の下の建

立にやつて来て、山犬の瘦せた絵のある札を各戸において行つた。

日清戦争の後、これは他所から来たのでないが、家の入り口に「梅山大将御宿」という紙を貼るのが流行した。赤痢の病除けになつたといふ。その前後にカッパ、天狗、稻荷等の絵や像を入口にはつた事があら。

旅の僧はずい分エライ人も来たようである。子供の死んだ時など、上

どの部落へも入つて来て、語り終ると「十銭又誰か買つてくれねえか」など云つた。

万才は岡崎の方から來た。

本づくれた。

祭文語りは錫杖の短かいようなものをならし乍ら、いろいろの歴史的な物語をしてきかせた。時々「悪魔を払うホラの貝」といつてホラ貝を吹いた。白井権八の物語などして、権八の編み笠をなかなかぬがせない。その度毎に十銭位ずつ出させておもわせぶりして金をとつた。へソ穴くどきなどいう猥褻な文句もあつた。

八人衆といつて一人で八通りの声を出して聴衆をたのしませた芸人も來た。室を暗くして天上へ上るぞといつて声がだん／＼高くから聞えるようにも天へ昇るよう感じさせたものもあつた。

口寄せという女も來た。枕程の箱をもつてゐた。これに白狐の毛が入つてゐるといい、風呂敷に包んでいた。それによりかゝつて、聞く人がたずねた事に、いろ／＼に返事して語つた。出てくるのは親でも誰でも出た。行方不明の人なども出て來た。女も年寄りも若い娘も出て來た。

芸人や信仰関係でないのに、箕直しや鍋かけ屋などがあり、これらは信州から來た。(引沼)

今から五十年ほど前までの事だが、雪がとけた頃(春先)に、越後から三味線をもつたゴゼが、「三人きた。その人たちをとめて、村の人たちが金を出して聞きに行つた。ゴゼは、八百屋お七やしんとくまるなどをかたつたが、いいところまでくると、やめてしまつた。そんなときは金をやつてつぶけてもらつた。祭文も春先にきた。しゃくじょうをもつた男がきたが、どこからきたかわからなかつた。これは、ゴゼよりいくらか高級なものをかたつた。遊芸人はいろ／＼のが入つて來た。ゴゼといふのは越後から四五組位

かつた。方才は上方のものがきた。(品木)

## 奉公人と出稼ぎ

### 奉公人

年期奉公人と日雇があった。前者は一年ぎめの奉公人で三月一日が出ていた。しかし年期より日雇の方がこの村では多かった。

奉公人や日雇の居やすい家とあるづらい家とがあった。主としてその家の食物のよしあしによつたようである。(引沼)

### 出稼ぎ

村で山仕事の材料が減つて来た為諸所に出稼ぎに出る人が生じた。

静岡県の方へ杓子削りに道具だけ持つて行った人もある。

長野県では飯山の在へ行つた人がある。

埼玉県は、秩父郡大滝村や橋本へ行つた。

県内では利根郡の土出へ出かけ、今一人そこに住みついた人がある。

(引沼)

### 仲買人

村の産物は山の木で作ったものが主であったから、大概これは仲買人が買つめて他所へ持出した。メンバ・シャモジ・シャクシ、その外蕭なども仲買人が持出した。(引沼)

### 入村の手続

格別むづかしくなかつた。酒を買って村人の承認を求める位であつた。(引沼)

## 借馬

借馬というものは、六月末から翌年の四月まで信州から馬を借りて山仕事につかうとしたことで、主に信州下高井郡穂南村佐野の宮崎留吉、中沢栄一郎の二人から借りた。はじめは明治の初年頃からといふ。昭和の初年は一期五円位の損料で、戦後は七百と千円になり、今は三と四頭しかいない。昭和の初め頃は入山全体で五十と六十頭の馬を借り、長平でも五と六頭ばかりだ。二軒に一頭位の割。

馬は冬の間木炭運びにつかう位であつたから、馬は入山になると太つて帰つていった。(長平)

## 村内の職業の変化

### 引沼

袖(そま)がこの村の主な職業であった。針葉樹を伐つて曲物を多く作つた。昔は原材は無償(タダ)であった。黒檜(クロベエ)・櫛(セミ)・桟(ツガ)等が主であったが、次第に衰えて来たのは適材が少なくなつた事が主である。

その外、山が国有林となり材料の採取が無償でなくなり、監督がきびしくなつた事も一つの原因である。それは大正になつてから規則が出て營林署で取締るようになったのである。それを知らずに、或は知つてからも山へ入つて罰を受けた人がある。罰金をとられた。そこで止むなく原本を払下げ、或は民有林を貰つて伐つた。

民有林は普通の家の所有山は五反から一町歩位の人が多く、一町以上三町位の山持は四軒ほどあつた。

曲物(まげもの)は村内全戸で作ったものである。山本類蔵という産物の仲買屋がいて、村中の産物を一手に買受けて他所へ売出した。産物

はしゃもし（大、小）・メンバ・杓子（メシ、汁共）・木鉢等が主産物で、全部素木で出した。山本氏から米や醤油等の現物支給で仕事をうけてしていた。



炭を運ぶ（幕坂）

井田安雄 撮影

木炭もかつては重要な産物であった。入山全部で四万俵位出した。昭和三十三年には五千俵位に減ってしまった。この炭燃不振の原因も原木の減少と、人手（焼き子）のいなくなつたためである。

### 小雨、沼尾

大部分が農業であるが、商家が四戸程、杣は戦時中迄、三、四人あつた。炭焼は專業五軒副業七軒ほどあつた。炭は白、黒両方であったが今は両方共滅つた。

昔は収入の主なものは炭と養蚕であったが今は椎茸作りなども盛になつた。また、沼尾の部落では草津へ出す為めに、野菜・胡瓜・いんげん・馬鈴薯等を作るようになつた。

### 生須

入植し次々と山を開墾し、稗をたべながら次第にのびてきただが、それさえ獲れない年もあつた。その折は長野原まで出て買ってきただが、當時は山でシヤモジを製作してそれを売り、金にかえたのである。その他ザツキを作り、ワラビナワを作つて売つた。

### 田代原



コジユハン運び（生須）

井田安雄 撮影

足すると小雨からだのんだ。ほとんどの家が屋号をもつてゐる。茶屋は一軒あり、上の茶屋（焼けて今はない）、下の茶屋とよばれ、にしめ（一皿二錢）、そらめんを売つた。にしめはいんげん、芋、昆布を煮たものであり、相當ににぎわつた。

土地は、水田一町三反四畝で、明治四十三年の水害で流れて減つたが最近ふえてきた。桑園は約四町五反、普通畑が九町六反程あり、山林三

いる。

昔はタテバになっていたので馬方が多く、かごかきもいた。人数が不足する

した。茶屋は二軒あり、上の茶屋（焼けて今はない）、下の茶屋とよばれ、にしめ（一皿二錢）、そらめんを売つた。にしめはいんげん、芋、昆布を煮たものであり、相當ににぎわつた。

土地は、水田一町三反四畝で、明治四十三年の水害で流れて減つたが最近ふえてきた。桑園は約四町五反、普通畑が九町六反程あり、山林三

今はなくなつたザツキ（座木、カミノハチ）はハナザツキ、キクザツキともい、正月様に供える御飯を入れるオモリモノに彫つた。現金収入の主なもの一つであつた。

開拓当時はラビナワ（スジナワ）をなつた。ラビの根を木棟でたいて洗い、スジだけにして乾して繩にならうのである。これは植木の枝の引きや垣根のしばりなわ、土蔵のカバゴメなどに用いる。大正時代の中頃まで一本一ヒロでイチボウとい、五ボウを一しばりにしてこれを二つ即ち十ボウ、これを十郎ち百ボウ、これを三つよせた三百ボウをヒ荷した。當時は買手が来て取引したのである。

これは雨降りの仕事、夜なべ仕事としたもので、採取後たいてお

トダマといい、これを五つで一行李として、四円五十銭乃至七十銭で出荷した。當時は買手が来て取引したのである。

これは雨降りの仕事、夜なべ仕事としたもので、採取後たいておいて冬仕事主として女仕事としたのであつた。

花いんげんは今では「草津みやげ」となつて年間六、七十俵約三十五万円程出荷しているが、昭和七、八年頃に北海道から種を移入した。それが現在の如く盛になつたのであるが、北海道物が一千百二十円位で売られるのに對し、当地産は百八十円位でないと売買されないので、伸びることにも限度がきているようである。これも当地で一本十五、六円の竹を中之条・小野上・長野原方面より買入れて三年位しか使用可能でないことも関係していると考えられる。

この部落は現在田が二反歩、畑が二十町歩あるが、終戦前昭和十三年頃まで養蚕を四、五戸でやつていた。一戸当り最高四十貫まで、この頃は現金収入の主なものであったが、今では養蚕以上のものをやり始めたのでやめている。

入植以来農業、炭焼きを行い、稗を栽培していたがその稗が酪農を発生させた。最初綿羊、山羊を飼つたのが昭和三十一年に組合を作つて、今では二十一頭の乳牛を飼つている。十四頭からは既に牛乳を採り、六合村農協を通じて明治乳業に出荷し、年間五十万乃至六十万円の収入をあげている。これまで前述の如く「花いんげん」が大きい現金収入で

あつたが、これからは酪農で進むことになるであろう。  
ラビは五、六月から七月月中旬まで、草津に出荷して年間約十万円の収入をあげている。

リンドウは終戦後今から七、八年程前から、東京・名古屋・京都の生花市場に出荷している。八月二十八、九日頃から九月二十一日頃までで、年間収入約三、四十万円。

## 小倉

ここには、水田はない。畑は約十町、山林はわずかで、山林の収入はほとんどない。

天明年間以前に地域的な飢餓があったといわれている。その頃は四十戸ほどの戸数があつたという。この飢餓によつて、何人も残らずに餓死したという。現在でも、テツヤシキ・ゼンヤシキ・ソーエモンヤシキなどという名称がのこつてゐる。これらのところは現在は、はたけになつてゐる。小倉では、十五戸以上ふえると、ふえた分はわきへ行かなければならなかつたといふ。

生葉は麦が主。ひえ・あわ・きび・大豆・小豆。これらは売るほどではない。自家用ぐらいである。

以前は草津へいろいろなものを買つて行った。六合村の谷へ車が入るようになったのは昭和になってからである。  
養蚕は少しやつた。春蚕もする人が何人かはあつたが、蚕の真最中に霜がふるのでやくなつた。夏秋蚕はした。七月二十五日前後にはきたてで、九月のはじめに出荷した。

まゆは全部売つた。養蚕の収入は、明治前から戦争中までの収入のおやかたであった。  
木工がさかんでこれが収入源である。入山地内には仲買商人がいて、村をまわつた。新潟県の方へ出荷した。まげのものをやつているのは小倉の三分の一以上。下駄をつくっているのは二軒。炭をやいているのは二

軒。あとの人は、めんばやしゃもじをつくった。

麻は自家用程度。とうもろこしも同様。たばこは、子供の時分に自家用としてつくった。

りんどうは戦後、草津へバスがくるようになってからの特産で、八九月に野反湖から女じょうがとってくる。

現在は、ひえはほとんどつくっていない。養蚕をしているのは現在小倉で四戸ぐらい。群馬鉄山と営林署の工夫としてかせいしているものが八割ぐらい。しかし大体は子備的な仕事で、四十才ぐらいまでの人が働きに出ている。

薪はこれまで売る薪としてはなかつたが、今はいく分はある。

炭焼はむかしから少しづつしている。売ってはいるが大した収入ではない。原本は全部官有林の払い下げでやっている。

### 湯久保

第一の収入は林業。炭焼き・薪・バルブ材のきりだし。ほとんどが官有林の払い下げによる。自分の山をもつてしている人も少しはある。

第二の収入は養蚕。年に一回、七月末にはきたてる。

第三の収入は蔬菜。にんじん・ごぼう・白菜など。白菜は最近つくりはじめたものだが、出荷組合があつて、東京へ出荷している。

水田は約一・五町で、これを十軒ほどで耕作している。ほとんどの水田は最近できたもので、昭和のはじめには三反ほどしかなかつた。畑はむかしから三十八町といわれてきたが、今は百町以上はある。

山林は四、五軒もつていてる程度で、部落の共有林はない。

一戸あたりの土地は、大百姓で二町ほど、少い方で八反ほどある。むかしはあわとひえとそばをつくった。そばのあとへはひえをつくり、ひえのあとへはそばをつくるというように、ひえとそばを同じはたけに交互につくった。肥料はざごえ（堆肥）を、ここから約二糸はなれている八幡から馬ではこんでてつかつた。

薪はこれまで売る薪としてはなかつたが、今はいく分はある。

炭焼はむかしから少しづつしている。売ってはいるが大した収入ではない。原本は全部官有林の払い下げでやっている。

最近陸續、麦もつくるようになり、とくに水稲などは農業改良普及員の指導で熱心になり、戦後になつてふえたものの一つである。

### 広池

部落の現金収入は「炭焼き」が主なものであった。木挽きと共に県内から渡り者によるのが多く、生産量の多い年には二万俵位焼き、村で消費するほかは大部分を信州に運んでいたが、最近は七、八千俵位しか焼いていない。

K氏は炭焼きをしながら倉淵村の川浦から昭和十年に移住し、三年位で二山焼いた。K氏（60才）は中之条生れ、その妻（59才）は甘樂郡君原村の生れでトチの木を材料に木鉢を作り、K氏もその真似をしてハチボリを作り、木を胸切りにして振り臼も作っていた。

K氏の妻は祖父と父が冬仕事に木鉢を作っていたそうである。こうして環境の中で小さい時から木鉢を作る技術を身につけたのであるが、今はもう作らず道具は長野原の弟に渡している。



そば畠 (湯久保)

近藤義雄 撮影

## 品木

はたけにはあわ・ひえ・菜大根・いも・朝鮮とうもろこしをつくつた。

現在は薪炭の収入が第一だが、むかしは、薪・焼下駄の収入が多かつた。焼下駄は部落の半分ぐらいの家でつくっていた。山からの収入としては、薪や下駄の材料程度であった。糞をしたのは二、三人。糞糞や麦少しだった。

下駄は、川ぐるみやしなが原料であった。品木では七分仕上げをしてよそへ出した(火をどんどんもやして、いぶしてつくつた)。主にひきば(低いはのもの)をつくつた。

下駄の材料は、付近の官有林からとつてきた。もとは、小諸・高崎・渋川・草津へ出した。草津へは湯下駄が沢山うれた。今では小売り程度しかつくっていない。

水田は、ここには一反歩ぐらいで、これを五軒でもつてある。畑は一戸あたり七、八反である。山林をもつているものは、部落の半分ぐらいで、平均すると、一戸五、六反程度。

## 日影

新しく入つて来た農業

園芸作物が最近多く入つていて、白菜、キャベツ等。

陸稻も昔はなくて比較的新しい作物である。

減少したもの

馬の数、昔は六十戸の村に百頭位飼つていた。一軒に二疋三疋の家も多かった。今は村中で三、四頭しかいない。

## 特殊作物

## 麻

麻は三十年程前までは栽培していたが今では栽培する家もなくなつた。

当時は三反歩位植えていて自分でこなしていた。然し三島の麻より品位が落ちていて、船の綱(ツナソ)などに織つていたのが多い。普通は麻の皮をはいで板べらのようになつたのを乾し、平にして六尺位のを五貫目一束にしばり名古屋方面に売つていた。

また昔は自家用としてセーミに織つたが、これは僅かなものである。麻は炭焼きについで現金収入で、ついで糞糞であつたが、今では麻も糞糞の方が盛になつていて、(広池)

湯久保では、最近てんさいを試作はじめたが、高冷地でできしているようだ。しかしまだ本格的に栽培されるまでにはいたつてい

ない。

畠のヘリを織つて売り出した。織つたものを染めて用いた。(日影)



てんさい 煙 (湯久保)

近藤義雄 撮影

## 休日

正月  
お盆

六月廿日頃、田植えを終えた時一日。  
蚕休み 春蚕、夏蚕に二日

ソクリ（畑仕事）が終ったとき隨時

これらは区長が触れてくるが全部が休むわけではない。

昔は風が吹いても吹かなくても三百六十日、三百二十日の日は仕事を休

み、神酒を飲んでお祝いをした。（広池）

## 自然暦と農事占

○ 入道沢の残雪が、人間をさかさにしたような形になれば、そろ／＼春の播付けが始まる。片足もげれば豆、へそまでもければ何を播いてもよい。

○ ハンコウ鳥がなければ豆・稗の播きしゆん。

○ セキリンは社日の二・三日前後に来る。

○ 紫のツツジが咲いたらじやがいもを播け。

○ オニツツジが咲けば稗をまかねばならぬ。（品木）

○ タイノコウ（鯛の魚）の残雪をみて、その脚がもげ、へそがもげる

と、春モソ（粟・稗）をまく。

○ ハツコウがオクリから鳴けば春が早く、暖い。下から鳴けば反対。

やはり春モソ播き。（世立）

○ 大豆は五月二十日頃蒔く。曆のチュウの日に蒔くとハトがくわないと、いう。

白根山のサカサ入道の足首がとれたらヒエのまきしゅんである。

野バラの花盛りに栗をまく。

ソバは土用あけの二日位前、5日、6日、8日頃まく。（広池）

○ 農作物の豊凶は碓氷峠熊野神社の占うツツガユ、トカクシサンのおみくじが来るのによつた。麻〇分、米〇分、麦〇分等。（下太子）

○ タツ、イヌの日は米の種を蒔くのを避けた。また蚕をはかない。

（下太子）

## 焼畑

引沼では、焼畑の事をヤキマキ（焼詩）といふ。雜木山を伐払つて、焼いて、種を蒔き、金属（鉄）の熊平（カナコマデ）で焼きまわしておく。

蒔いたものは、粟・稗・蕎麦等で多い人で一人四反位だった。

五十年前迄はよく焼詩を行つた。（引沼）

品木では焼きまきはあんまりしなかつた。

草を刈つて干して、乾いたら火をつけてもやした。そのあとへ、菜・大根・あわ・ひえ・麦など、時期によつていろいろなものをまいた。やきまきは、のめしもの（怠けもの）がやるには一番柔軟な仕事であった。次年の年になると、土がやわらかくなるから、はたけのかたちになつて、つくりたいものを作つた。ふつうのはたけになつたものは、自分ちになつた。やきまきはどこをしてもよかつた。これは今から五十年も前のころのはなしである。（品木）

## 草刈り

草は採草地で刈る。用途は家畜のえさ。

(通称ハラ) というところにある。

草は各自すきほど刈ってよかつた。

草刈りの用具は鎌だけで、馬をひいて行つた。かっぽし(かりほし)

といつて、刈って地面に干しておいた。

なお、採草地のはかで、年中刈っている若草はいつ刈つてもよかつた。(小倉)

各種の鎌 (湯久保)



井田安雄 撮影

麦はこび (引沼)



組合にある。牧草地は部落から約一耕はなれた平らなところで、ミドノ

有権は、小倉牧野協同

### 女の仕事と夜なべ

### 田畠の単位

刈りはじめの日は九月二十一日で、この日

をヤマノクチという。

草刈りは二十一日から三日間、これ以前は草が弱るというので刈らなかつた。ヤマノクチは毎年きまつている日。

この三日間は各戸から何人出て刈つてもよかつた。

現在は分割している。これは昭和二十四年から、国有地が解放されて、十六戸で分割している。所

田畠の単位には、町反歩のはかにマキとツカがある。マキは蒔であり、播種量によりその土地を価値づける。ツカは塙、策とも書くが、収穫量で畠の価値をきめる。

#### マキとツカ

日影部落の小字八幡に八升蒔という地名がある。一升蒔は堆肥十貫目を一ビタといい、これで大麦一升を蒔くことを一升蒔といふ。このへんでは、二畝の土地に要する堆肥は四ビタで、これをヒトツカともいう。一つカは四升蒔である。

湯久保では、五十坪で、六十坪を一つカという場合もある。太子は五十五坪。

蒔は田についてのみいう。(湯久保)

日影の八升蒔の近くに「一貫地」という地名がある。一貫文に相当する石高の土地であったのかも知れない。ツカ、マキと共に近世以前の古い日本の単位として注目してよい問題であろう。

水車：男は水車をつかわない。順番がきまつていて、各家一日ずつつかう。夜があると自分のものをとって、次の人と交代する。仕事は一晩中している。水車をつかうのはおかみさんの仕事で、娘にくるとすぐにする人もあり、娘がわかい場合は、すぐにはたのまない。

はたおり：今はしないが、以前は娘でむすめの仕事であった。木綿は長野原で買ってきて、自家用のはたをおつた。網は織つてからそめやへやつて、もんつきなどをつくった。



朝鮮ショイフコ（小雨）

今井善一郎撮影

た。疊表を長野原から買って此のへりをつけた。八幡  
女は一寸のこまかい仕事をする。草鞋つくり・草履つくり・俵あみ・炭俵あみ。

女が自分の所得にする金をキューでという。鶏の卵などの売上などで作る者がある。（引退）



菅ムシロを織る（和光原）

萩原進撮影

野菜うりは草津へかごを背負って行つた。これはむかしから今でもしている。娘や娘が歩いて売りに行つた。もつて行くものは、きゅうり・いんげん・大根・たまな・白菜など。この収入は家の手助けとして、家計に入れられた。

このほかに女の仕事としては、養蚕・草とり・草刈り・牛の飼育・裁縫など。

一人前といふのは男女とも二十才ぐらいからである。（品木）

村では副業として「糸引き」を昔はよくやつた。畳のへりも織つた。麻で織つたものを「セーミ」という。これを洗とショーレンで染め

まつてある。スゲをねせこむ所をネドといい、作業をネドフミという。スゲはねせるとアタが抜けて來なくなる。ねせているうちに浮き上がるとふけてだめになるし、雨が降ると増水して流されるのでセーマー（あわてて）直しに行く。現在では自家用のスゲムシロを作り、座敷にうす

べり代りに敷いたり、台所に敷くのに使う。

（和光原）

の共同仕事で材料のスゲはヤチニ生えているヤチスゲ・イワスゲなどを使い、九月十日ごろムラで日を決めて刈り取り、二、三日干してから花敷の川原の湯の中に一週間ふみこんで石の重しをのせてねせておく。部落ごとに日割りが決

ねコはアワがらをたたいて柔かくして織る。

## 夜なべ

毎年冬季、夜九時から十一時位遅夜なべを行つた。

若い者は娘のある家へ集つて、四五人のいい友達でよって夜なべ仕事を行つた。ねむけさまになつてよかつた。

夜食が出た。ヤキモチ・ジャガうで・豆イリ・サツマ等であつた。夜なべに作ったものは、草履・草鞋・曲物の桜皮ぬい・馬の沓かき等であつた。

夜なべがもとで結婚した人もあつた。(引沼)

## 老女聞書き

### 1. 引沼の山本さかさんのはなし

#### 子守り

さかさんは小さいとき村内の親類へ手伝いに行つたという。十才ごろから十三才ぐらいまでだつた。奉公でないから、別に出がわりもなかつた。給料も別になく、お礼として着物を一~二枚もつた程度であつた。当時は、さかさんと同じ年齢の人で子守りの奉公を行つた人もある。年期は二年の人もあるし、一年でかえる人もある。子守りを手伝わぬときには学校へ少しばかり出た。学校へは十日のうち一日か二日ぐらいしか行かなかつた。当時は四年で卒業だつたが、全部は行かなかつた。

#### 草かり、野良仕事、水車當番

朝おきてからすぐ近くの山へ馬をひいて草かりを行つた。草かりをしてから食事をすませて、さくぎりやはたけうないに出た。

水車仕事は全部女衆の仕事であった。部落には水車が二つか三つあって、水車使用の順番ができていて、七日に一度ぐらいまわってきた。順番にあつたときには、星も夜も水車小屋へ通つて水車の面倒をみた。水車番は、むすめもおかみさんもおばあさんもした。

## 馬子

十五、六才の頃には沢渡まで馬をひいて荷をこんだ。沢渡までここから四里はあつた。行くときには、「二里ぐらい行くまでは暗かつた。かえりも残りの一里ぐらいはくらくなつてからかえってきた。馬にはわらぐつをはかせて行った。くつがきれればすぐとりかえて新しくつをはかせてやつた。

積んで行つたものは、ひしゃくとか、しゃもじで、入山でつくつたものを作買がつて、それを荷づくつて駄賃でつけて行つたのである。明治三十五年頃には、沢渡まで四里の道をはこんで七十銭ぐらいもらつた。また、かえりの馬には米を一俵つけてきた。これはこび貨が三十銭だつた。米は作買人にわたした。こうしたこととどれくらいやつたかわからない。こういう仕事は、どこの家のむすめがやつたのではなくた。馬のある家のむすめがしたのである。当時は、馬のある家はそれほどなかつた。

#### わらびとり

馬のない家のむすめは、山からわらびの根を掘るとか、くずばの根を掘るとかした。わらびは根のすじをとつてなわになつて作買の人に売つた。これは沢渡とか長野原方面へうられた。

こういう仕事はいずれも駄入り前にした。

金はこづかいどころか、家に入れた。こうしてお金がたまる、お正月になると、長野原などへ米とか粉を買ひに行つた。その頃(明治末年)米が一俵十二円ぐらいで、粉は二斗で二円五十銭ぐらいであつた。

その頃のむすめとかわわかいしゅうは、自分で働いても少づかいにならず、おまつりなどのときは、父親から少づかいをもらつた。だから、嫁に行くまでむすめが少づかいをためることはなかつた。

#### 冬の仕事

わらじづくり、うまくつづくり、すみのたわらあみなど。はたおりは少しやつた。これはお正月にでもなつてから、自家用ぐら

いおつた。

### いい娘

かいこ上手で働きもの。

### 嫁のうでだめし

嫁がくると、反物を出して、娘にこれで着物をつくれなどといった娘もあつた。また、娘の手くせがいいかわるいかを見るというので、お金をその辺へおいてみたりした人もあつた。

### 働きもの

働きのことはせつこうよしといった。例えば、あの娘さんはせつこうがいいといった。反対に、なまけものとは、のめしものといつた。だんなさんが少したりない場合には、かかあ天下で、だんなさんがてんぱだといった。

### 娘の里帰り

#### 1 結婚式の翌日の朝、姑さんと婿さんと娘さんとで行つた。

2 嫁の年始日は、一月の一日か五日に、都合のいい日に行つた。ながだちを三、四枚もつて行つた。三・四日泊つてきたむこも行つた。一月十六日頃にも行つた。これは嫁さんだけが里へお客様に行く日である。一日が三日とまつてきた。

#### 3 お供には里へかえつた。

#### 4 彼岸には、親がない人が行つた。粉などをもつて行つた。

#### 5 盆にも行つた。粉などをもつて行つた。

6 野良仕事が終つてから、よめさんはぬいことの用意をして里へかつて、十日間ぐらい泊つてきた。このときは反物を買ってもらつたりして、羽織・半天・足袋などをつくってきた。十日ぐらいはとまつてきた。これを秋あそびという。このときには、たとえ寒家がとなりでも行つた。時期は十二月のはじめころであった。今はしない。

## 2. 世立の山本りとさんのはなし

子守りには、方々へ出た。十一才のときから出て、十六才までしていだ。中之条の伊勢町へ一年、ハネオへ一年、近所へ四年いつた。子守りというけれども、ほかの仕事もさせられた。ろくに子守りはしなかつた。

給金はもらつたが、額はされたもので、家へかえるときにもらつた。出がわりは三月一日であった。そのときには、着物とお金ももらつた。着物がほしいばかりに子守りに出た。一年に、ふだん着と、いい着物と一枚ずつもらつた。お正月には、羽織、あわせ、長じゅばんをもらつた。つとめを重ねても、給料はべつに高くならなかつた。

家へは、近くにつとめていたときには、盆、正月、節供などのモノビにはかえられた。泊つてくことはできなかつた。

### 娘の里帰り

1 遠くから娘をもらったときには、結婚式の翌日に、うちの娘がつれて、娘と一緒に里がえりをした。泊らずにかえつてくる。里への

#### 土産は、莫子折に手拭程度。

2 一月一日には、ながだち四枚と手拭をもつて行く。むこは酒を一升もつて行く。この日は泊つてきたり、とまらなかつたり、遠けれ

ば泊つてくる。三晩も四晩も泊つてくるものもいる。

3 十二月二十九日はおしつめの日といい、餅をついて娘婿が娘の里へ行く。この日には餅と酒をもつて行くが、これはしゅうとばあさにたのまれて、あずかつて行くわけである。この日は泊つてきたりして、羽織・半天・足袋などをつくってきた。十日ぐらいはとまつてきた。これを秋あそびという。このときには、たとえ寒家が終つてから、親をよんで、秋祝いをした。

4 彼岸には、親がいるうちは行かないが、親がなくなると必ず行

く。春の彼岸のときは、ぼたもちをつくつてもつて行き、秋の彼岸には、まんじゅうをつくつてもつて行く。

6 おほんは旧の七月であるが、このときには、嫁だけが行き、婿は行かない。この日は泊つてくる。ふかしまんじゅうをつくつてもつて行く。

7 村まつりには、べつに里がえりをするとはきまつていらない。

## 曲げ物

### 種類と工程

種類 柄杓・メンバ・神の鉢・ふかし胴等があつた。柄杓には、五合、一升、二升、ほかに小さい湯柄杓もあつた。メンバは一番から五番まで。一番は炊いた飯が、一升そつくり入る。川越から越後方面に出した。材料の板巾三・二寸が必要で、でき上り長径七寸、短径三・六寸。一番は弁当鉢二つ分、板巾一・八寸、三番は弁当鉢一つ分、板巾一・八寸。四番は、三番の半分、板巾二寸。五番はおかず入れ、板巾一・六寸。これ等はマガリゼン、スダゼンの二種のセンで作つてしまふ。

用材 松・ヒソキ(唐檜)・モミ・杉。よいのはヒソキ、よくないのは杉。

むかしは官地も民地もなかつたから、自由に山に入つて、好きな木を伐つた。が、明治になつてからは、そうはいかなくなつたので、払い下げもらつたり、盜伐したりした。大体は盜伐であつた。「今日はショウリンク(小林区?)営林署)がまわつてくるから氣をつける。」とフレガまわつて來たりした。その取りしまりも嚴重になつたので、みんな払い下げもらつて伐つた。

山仕事さて山仕事はほとんど一年中であつたが、春は春ものを播いて、五・六月ごろから山に入つて秋まで、秋は収穫・麦播きを終了して

から山に入った。

山では、山小屋に泊りこんで仕事をした。一〇晩をヒトヤマ(一山)といい、一山で区切りをつけて荷を運び出した。山小屋では、木を伐つてヤマドリ(山取り)をする。二尺一寸に伐つてそれをうすく削つて、小屋の炉の上に棚をつくり、その上に縦にならべて干した。これをタナボシ(棚干し)という。棚干したもの、馬のくるニンバまで背負い出し、そこからは馬で運んだ。

山道 何しろ遠くの方まで出かけたもんだ。越後の岩菅山まで出かけたので、山中から見ると、向うの街道に、越後のショウ(覚)が、笠を被つて通るのが見えたり、また、越後の村から鶏の鳴き声が聞えたりした。何でも六日町の近くまでいったらしい。だから山中には、この人たちはしか通らない山道がたくさんあつて、サル道とか、キンタマとか、二丈ツギとか名がついていた。「二丈ツギ」というのは、途中で一泊しなければ帰れないほど遠かつた。こんな遠くまで、良材を求めて行つたのであるが、だん<sup>く</sup>に原木が少くなつてしまつた。

細工 板にひいた用材を一三・一四日水にひやかしてから、センでけずつて、湯で煮たものを、テンゴロ(型)にまきつけて干す。はさみで押えておく。よく乾いてから桜の皮で縛つて、それから底をつけるのである。

一コウレ作るのに一週間はかかる。一コウレといふのは、メンバでいえば、一番が六〇組、二番が七〇組、三番が八〇組、四番が九〇組だが、五番は六〇組である。これを織でしばつて、出荷するのである。(世立)

### 杓子・鉢類

規格 板杓子は、六寸、七寸、七・五寸、一・二尺、一・八寸、二・五寸、三寸、四寸等の規格があつた。オタマ(汁杓子)には、マメコ(一・八寸)、中マメ(一・四寸)、サンバチ(三・八寸)、四寸、五寸等があり、この長さは丸い部分の長径でいうのである。コゾロツバチ

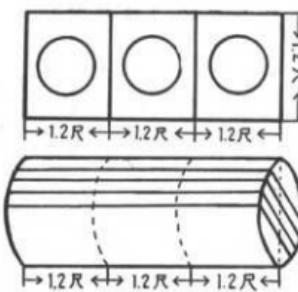
旗用鉢)は、さわしたし一尺から一・二尺。コネバチは同じく一・三尺から三尺までであった。ほかにカザリツバチもあった。

細工

用材の柄は、あまり遠くまで行かず、附近のものを伐つて來

た。

木鉢の場合、普通ミツガケといわれる丸太に切った。圓のように計三・六尺の長さにきって、これを厚さ一・五寸、巾一・二尺ぐらいの板にしてしまう。



この板のうちに圓のようく三つずつアラボリしてしまい、それから三つに伐り離し、背中を

曲げ物仕事と資本関係

用具の購入

野原、沢渡の大岩に鐵治屋があつて、そこで打たせた。とくに大岩ゼンといえば、ハバがきいたものである。(世立)



各種のシャモジ(長平) 部九十九一撮影



ヨキでたたいて落して丸くし、仕上げをかけるのである。

板杓子の場合も、右同様にして、(ただし長さ、厚さは異なる)板にしたものからくるのであるが、その細工には、七丁のセンが必要であるといわれる。まずツラ(表面)ホリで表面を仕上げてしまう。そして型にあわせて線をひき、次にアラシコセンでセナカ(ラフの裏がわ)をけざる。3、マーシゼンが弧ABをかつきりととり、4、エグリゼンでA-A'、B-B'をけずりとする。5、メントリゼン(またセナカ、ハナゼン)で、セナカの面をとつて仕上げ、6、エコキゼンで柄の部分の面をとつてけずり、7、アナダキゼンで6に残された部分を仕上げ、最後に、ふたたびマーシゼンでケツA'-B'をきつて完了する。(世立)

言つた。山で使用する道具はもちろん、米とか、衣類とかの世話をしてくれた。そして一山買って、山小屋を營ませるのもこのナカシであった。その代り、製品も全部ナカシに出さなければならなかつた。ナカシは単に山での必需品ばかりでなく、平素の生活も面倒をみた。そして金銭なども貸した。金を借りると、製品を出しても、金はそれで差引されてしまうから金にはならない。それではまた生活に差しつかえるので、そういう人たちは、横流しも大分やつたものだ。

製品は各地に出した。県内はもちろん、東京・上田・飯山方面にも出荷した。特殊なものとしては、川越、越後にメンバの一番が多く出た。

(世立)  
売り先は土地の仲買人で、仲買人は、東京・中之条・高崎などへ出すが、一応中之条へ出してから各地へさばく、中之条まで馬で運ぶと帰れ

ないので、幕坂時を越えて沢渡の関億平次という問屋の家まで駄賃をもらって自分の馬で運んだ。(長平)

### 曲げ物類のおとろえ

大正末年のころから次第に衰えて来た。そのために、話者の一人山本三郎さんは、十六年間も炭焼きをして生計をたてたが、そうする人が多かったのである。

おとろえた原因として、山本さんは次の諸点をあげた。

- (1) 原木が、伐代のために少くなつた。
- (2) 機械製の会津物におされた。
- (3) 現在丸太の方が世話はなく、値もいかから、オオゾト(苦勞)のしがいがない。
- (4) 金属製のメンバ・柄杓・オタマ木鉢等が出たので、こゝのものが必要がなくなつた。
- (5) コゾロッパなどボール紙製のものが出て来た。

このようにして、むかしはほとんど主業だったものが、副業になり、現在では、老人の内職仕事に変つてしまつた。主業としては、右の手工業に代つて炭焼が登場したが、これはむかしは搬出が不便だつたのであまりやらなかつた。そこへ原町の宝屋などが、大正末期ころから入つて、次第に盛んになつた。(世立)

### 山小屋の仕事とくらし

旧暦の五月から十月、五月山といい、日の一番長いときに山へ出かけた。十日間位の食糧をもつて山へ入つたという。まげものの材料をとりに行つた。場所はすきなところで、長野県側へも行つた。天下御免であつた。

山かけの前の晩と、かえってきてから十一講をした。山へは五、

六人の集団で行つたようである。

山へ行って、どこでも即席に小屋をつくつた。小屋には五、六人ねねとなりできた。これを山小屋といつた。山小屋をつくる場所はかけつぶちで、おつけごやをつくつた。小屋の両側には、笛でおいをした。土間には木の枝、木の皮をした。(小倉)。

山に入るときは、途中で十二様にお参りする。このときオミキをあげ、帰りもここで休みオミキと煮物をあげる。このことを十二講といつてゐる。

携物品 鋸・斧・セン・ナタ・食糧(米と雑穀、自家製味噌で野菜は山のものをとり、米は少ししかもつて行かない。)・鍋(鐵鍋)・メンバ・シャモジ、衣類(簡単)。

用材 川ぐるみ(山桐)ドロの木、シャモジは白い木なら何でもよい。

山での仕事 材料の木のありそうな近くに山小屋をつくり、十日間程この小屋を拠点として作業をつづける。小さな木なら五・六本倒す。大木なら一本。その時倒した木の枝を伐株にさす。これは十二様の育ててくれた木をもらうのだから、すぐあとが大きくなるようにといふ意味であるという。次に木どりをする。

木どりは、下駄の場合はコウラトリといつて、長さ一尺にきり、シャモジは二尺、ナタで割り、センで形をつくる。大体の形の出来た木を山小屋に運び、火の上の棚にあけてかわかす。運ぶのに重いから水分をぬくので、真黒くなるまでは。一日に百本位いは木どりをする。(長平)

馬出し 材料が或る程度まとまると馬止めまで背負出す。馬止めへは子供か女衆が馬をひいて迎える。たいてい十日十日にいっしょにする。背負出しあは道が悪いので一回に七・八貫匁で、二回分を馬一回で運ぶ。一竿は二十本で六竿一駄で運ぶ。下駄材は歯を合せて組んで竿にする。(長平)

山小屋は掘立て小舎である。同じ小舎を数年使う人もあるが一年きり

の人もある。個人個人で持っているのである。村からの距離は近いのは

一里半位、遠いのは三里も離れている。

小屋の広さは一坪位、屋根は笹や木の皮でふく。炉が中の土間に切つてある。その周囲は木の枝、葉、茎などを敷きつめ、その上に筵を敷く。着物をシトネでそれを夜衣とする。夜は火を焚いて臥る。隣の小屋ともやって、片方で小鍋で汁を煮て、一方で大鍋でメシを炊くようにす。

山へ入るのは春の蔵付けがすんでからで、主食は米と味噌であった。

村では米は僕約していたが、山では白米を食った。副食は山の産物で、蕨・うど・オカラ（これは葉を食う）・椎茸・マイタケ・モトアシ（金時ともいう、赤い傘の茸）・乳茸等であった。

小舎で喋ってわるい言葉は仏様に關係したもの、不幸、葬礼、死亡などとの言葉をつぶしんだ。その外の事はヤエンとかユテとかいった。

山奥の小屋の場合は大体十日を一期として山で作った産物を背中に負つて、里への途中荷場と通称する急坂下げる。そこで里の妻は、やはり日を数えているから、きれいな仕事着を着、オハグロなど染めて馬を引いて来る。美味しい焼餅もやいて来る。山の夫は又ヒゲなど剃つてこゝ迄荷物を運び、妻に之を渡し、山の木蔭で十日間の里の話をきく。楽しい一時をすごす。妻はこゝから製品を馬につけて里へ運ぶのである。

（引退）

## 狩 猿

### 獲 物

バンドリ むささび。

テンマル てん。

狼 山ことばはエテ、エテコウ、山ノオバサン、山ノオツチヤン。

クラシシ カもしか。

熊、猪、鹿、狸、兎。  
キジ、山鳥。（引沼・世立）



鉄砲うちの額（広池）

萩原進撮影

### 熊

話者の山本清治郎氏  
(明三二生れ)は、親父

の代からリュウシ(獵師)だ。そのころは、火薬銃でカンウチをしたところである。

初めて親父の鉄砲を盗み出して撃つたのが十七才、それ以来熊はずいぶん獲つてみた。多分三二匹にはなる。その始めの時は、友人四人と並んで出かけた。その年は、茸がたくさん出た年で、京塚の友だちを呼んできて、四人ぐらいで仕とめた。

さて熊は、あまりタヌメオイはしない。穴熊を仕とめるのである。熊は秋から冬にかけて穴ごもりするが、そのさいコモチ熊などは穴の附近にかかる。熊は逃げてゆく。しかし、犬がついているので逃しはしない。とうとう追いつめられて熊は木に登った。犬に番をさせとて、京塚の友だちを呼んできて、四人ぐらいで仕とめた。

るという見当がつき、凡そその数がわかる。そこで、春三と四月ごろ、これをねらってゆく。うまくいって一春に、七頭ぐらい仕とめたことがあら。

覆るのには、仲間をよんでも、少くも三人ぐらいで行く。目ざす穴の中に棒をつっこんで、突っつき出すのであるが、なか／＼出てこない。うつかりすると、ひきこまれてしまうこともある。とくにコモチ熊はなかなか／＼出てこない。熊を半分のぞかせても、すぐひっこめてしまう。そこで半分以上体が出てから撃てといわれる。

熊のイは、むかし一〇円、今は二〇、〇〇〇円ぐらいに充れる。

熊のハラゴをみたことがないという。熊のハラゴをみると、天気が荒れる。これをタマアレといいう。(世立) 和光原の山ではタマがよく出る。山道のはたなどで草を引かいた跡があるのはタマが大好物の赤アリの巣を見つけて手で引つかいて、アリをなめたものである。秋になるとトウモロコシ畑にやってくる。タマはりこうで必ず下見に来てよく実が入ったところを見計らってくる。畑の真中にトウモロコシの実を引き集めて、どっかりと寝そべって食べるのを一晩に一畝ぐらいいのトウモロコシを食べ尽くしてしまう。そのあと大便をしていく。タマの食べ残したものは馬にくれても嫌がって食べないので、よくさらして匂いをぬいてから馬にくれる。(和光原)

### 猿

仲間同志ではサルと言わなかった(別掲)。エテ、エテコウのようないいことばをイミコトバ(忌み言葉)といいうが、猿以外にはあまり忌み言葉はない。

猿はマケを作つていて、オヤカタにひきいられている。多いのは、二〇頭ものマケになつてゐる。

猿をとるのはタツメオイである。猿の場合にはエテオイとも言つた。人數は少くも二人、ふつう四～五人。猟師たちはあらかじめ作戦を練る。そして二手に別れ、オイゼコと射手となる。タツメは必ず猿の通らねばならぬところであるが、都合のよいのは、谷川に倒木がかかっているような場合、これを猿のウクリギ(移り木)といいう。射手はその移り木の下に隠れていて、オイゼコが、砲砲でオイデッボウ(追い鉄砲)をならしながら追つてくるのを待つ。先頭のオヤカタを渡らせてしまって、大勢のマケが渡るところをねらつて撃つのだ。オヤカタと離れて右往左往しているところを、次々と撃つてゆく。話者の山本清治郎氏は、このよにして、一タツメで九頭まで仕止めたことがあるといふことである。

一旦四散した猿どもは、その後もまた勢ぞろいして、その近くの山に

いので、これに三回、四回とタツメをしかける。

猿はだん／＼警戒心が強くなる。平素でも見張り役のテンボウシショウは、しまいには、マケを早く逃がすために、自分では、猟師の近く近くに出没して、なか／＼逃げようとしてしまつた人かけが見えると、テンボウシショウの奇声によつて、山の奥深く入ってしまう。そこで猟師は、そのような場合、やはりその裏をかいて、こちらもそこを何気ない風でぐん／＼通りこして、一旦通りすぎ、再び猿が氣を許して出て来るのをまつて、タツメオイに入るのである。

猿の中にヒトツンボウというのがある。マケを離れてひとりばつちの猿だ。多くはけがをした猿であるが、たいてい雄だといふことである。雌の方は、けがをする、藤の皮をむいて包帯などしてやる。ヒトツンボウは、マケからあまり遠く離れていることはない。

猿のいわばん価値のあるところは頭である。女衆の血の病によいといひ、てんとうさぎとをサンコウヤキ(むしやき)にして粉にして呑む。(世立)

## テン・マル

話者の山本仲次郎氏（明治二〇生れ）も獵師を職業として来たが、熊はほとんど獲つてみなかつたという。主としてテン・マルを射つた。

テン・マルをとるのは冬。それも一冬にいく回もよい日はない。夜の十

二時ごろまで雪が降つて、翌日は静かな日がよい。風が吹けばだめ。雪の中を、テン・マルの足跡をツナナイデいく。そしてどこの穴、そこらうろこにいるところまでツナギトメ撃つ。ただしテン・マルは非常に素早い。人間の正面には、絶対に出でこない。また出た瞬間に、がけでも、谷でも、かまわすとぶ。ぐずくへしていたらてぬから、出た瞬間をねらうより他はない。

大正末期には、てんは輸出されたので、たいへん値がよかつた。一つととと、米一だんに酒一升ぐらい買ったものだ。（世立）

## バン・ドリ

旧十一月ごろのおぼる月夜がよい。犬をつれてゆく。犬がみつける。木から木に渡るところをねらって撃ち落す。肉を食べ、皮を売る。（世立）

## クラシシ

タツメオイ。群馬県で禁猲になつてからしばらくは、長野県の許可をうけて獲つたという。（世立）

## 猪・鹿

碓氷峠が改修されてから急に姿をみせなくなつたという。それでも鹿は、見寄の川に追いこんで捕えたという話は残つてゐる。（世立）

## 兎・狸

むかしは兎はうたなかつた。一人いればとれる。だんくに追つてい

くと、兎は、もとの道に必ず戻るように逃げるので、一人はあとをツナイデ行つて、一人が待つていて撃つのである。

狸も同じようにして撃つ。狸と貉とは、はつきりは区別していない。（世立）

## トヤマチ

トヤマチでとるのは、雉子および山鳥である。山鳥は夜の明けぎわ、夕刻は薄暗くなつてから、雉子は、明けきつた七時ごろ、午後三時ごろ、それ／＼朝あさりに出るから、そこをトヤマチするのである。朝ドヤ、タドヤなどのことはもある。かんたんなカクネバだが、こもぐらいすいて、炭火ぐらいおこして待チルこともある。

雉子、山鳥ともに烟の作物も食べるけれど、みずぶさ、どんぐり、ヘッピリ桜などの木の実を好んで食べるので、それ等をトヤマチのまわりにぱらまいておく。待つていると、バサ、バサと音がして、降りて来ても、十分ぐらいいじつと様子をうかがつているものだ。その時撃つてはだめ。そのうちに安心して餌を突つつき出すので、その時をねらう。最初の一羽を逃すと、あとは絶対に来ない。が、これに成功すると、次々にやつてくるものだ。（世立）

## わな獣

通り道に餌をばら撒いておいて、トラバサミをしかける。雉子、山鳥もそうする時があるが、ほかに、狸・兎・テン・マル・いたち等。もつともかんたんなハリガネのわなものもある。（世立）

## 山分け

共同狩獵の場合、熊は等分だつた。しかしクラシシは、弾丸を入れたものが、脛から下四本の脚皮がもらえた。これでツラヌギ一足をつく。ツラヌギとは、カサ（わら晝）に似てゐる皮晝である。

稚子、山鳥などでも、一しょにやつた場合はもちろんだが、三人で朝一しょに出かけ、別々に狩猟して、結局誰かが二羽しかとれぬ場合であつても、それを等分にせねばならなかつた。金に見つもつて、あるいは売つて、また關係のない人でもちよどき落としたところには、ヤマワケの需要はない。

最初に突くなり、玉なり打ちこんだ人が、獲物の三分の一をうけた。（引沼）

広池では今から三十年程前まではやつていたが、現在では殆どやつてない。

分け前については、鹿の場合、肉は商売人に売り、臓物を分けてたべる程度であったが、角は買った者がとることになつて、また他人にみつからないうちに繩をかけると捕る権利があった。わきから来た人に分前はやらないことになつて、いる。

### ハヤゴの吹き方

一しょに獵にてかける場合には、あらかじめゴウ（合図の笛、薬莢を用いる）の吹き方をきめておく。「タツメニ集レ」「帰ルゾ」「早ク」「早ク」など。それにつれて、長く、とか、短く、とか、続けていくつとか吹いて、カシマシク、連続で鳴つたら、何をおいても急いで馳せつけねばならなかつた。（世立）

### 狩猟の俗信

- (1) 出かけるのは、仏滅の日がよい。出掛けに御祝儀に会えば、その日は獲れないが、葬式なら、その日一日調子がよいといふ。
- (2) 山師は月の十二日は山に入らぬが、リュウシは、一切かまわぬ。八日でも。
- (3) いたちに似ているキス・オコジョ・オサキに会えば縁起がよくな

い。とくに道を横ぎられることを忌む。  
（4）産の忌みをとくにいわぬ。（世立）

### 獲らない山の獸

山犬は十二様の乗り馬といつておそれた。五月頃仔を生むが、その時は僕の端に赤飯をのせて山の石宮へ供えた。折敷（オシキ）に米をのせていった事もある。

昔はダルマ岩の岩穴に山犬がいて子供がよじけながら出て来たのを見た人があるという。

キスという歐はイタチより一寸小さい。黒い班のあるものもある。尾は一本棒となつていて、ゴーヤ（荒野）をくぶるのが名人だ。これは人は知らない。とるとタ、ルという。（オサキとは一寸かわっている）。明治二十九年に赤病が流行した時、この獸がうんと出て來た。

狐はとらないが、いる。

鹿は打たない。合掌しておがまれると寒がつぶれるという。

隼もいる。（引沼）

### 狩りのはなし

話者 山崎正次（小倉他  
明治四十年十一月十一日生まれ）

### 山小屋

山小屋は掘立小屋。狩りはすべて冬なのであたたかい、水の便のいいところへこしらえる。

小屋に神様をまつるか。

その場でたきがらにした炭とかえんびつで、十二山という字を書いて、それに朝夕御飯をあげて信仰する。十二様は小屋の一番おくへまつておく。

かまどはどこにあるか。

小屋のなかどころの、御飯をたくさんのやりやすいところにある。

かりうどのことを何というか。

鉄砲ぶちとかリュウシという。

小倉には鉄砲ぶちは何人位いたか。  
むかしは六人も七人もいたが、現在は免許をもってなぐさみにやるの  
は一人だけ（山崎正次さん）。

狩りのときにもって行くもの。  
鉄砲・のこ・なた・炊事道具・山刀。

この辺で狩りの対象となる動物。

きつね・たぬき・てん・むささび（ばんどり）・きし・山どり・うさぎ・いたち。

熊も二年か三年おきに一頭ぐらいずつとれる。

この辺でふつうとれるのは、きつね・たぬき・てん・ばんどりなど。

#### 狩りの仕方

熊は冬眠中木の上、洞くつに入っているをとる場合と、たつといつて、番を一人見張りとしておき、大勢で追つてとるやり方と、二つぐらいい。大勢でとるとのをまきがりといふ。

まきがりの人数はどの位か。

その範囲によつてちがう。広範囲では、五人も七人も入る。せまいところの場合は、追いかける人と、とまつている人と、一人か三人ぐらいいでもできる。

そのまきがりのときの仕事の分担は。

追いかける人はおいてとかせこといふ。まつている人は、たつめえとたる。この人がえものをうつ。せこは全般的な仕事からいえば助手にあたる。

一人で、えものがねているようなところを見つけてうつ場合は、しのびうちという。

熊がりのときの人数は。

五、六人。かりの場合人数を忌むことは別はない。

しとめたかどうかをたしかめる方法は。

くからこぢいてみると、あるいは石を投げたしかに死んでおるかい

ないかをたしかめて、それから近づく。

それをたしかめるのはだれか。

うつた人が手近くいるから、その人がたしかめて、これは命がとまつておつて、しとまつたとおもえれば、付近のせこをよびあつめてとれたといふことを伝える。

たためになる資格は。

べつに年数に關係ないが、うてば大概命中するだろうという名人格の人がなる。

おいて（せこ）は。

おいてでもやる人は、若い足の丈夫な人とか、銃をうつてもあまり自信のない人。しかし、おいても、生きものの一番いるようなところへ入るのだから、大勢の場合には、地理にあかるい人がまじつて入る。よそでいうせこを、ここではおいてこうといふ。

えものひき下げ方。

大きいおもいものになると、あまり役にたたないおいてこうみたいな人が、えものをかついでくる。また、おいてこうは、山小屋へ泊りに行くときも、米びつをしまわせられることになつてゐる。

けもの通りみちを何といふか。

わなにはどんなのがあるか。

針金でくびくびをやると、とらばさみといつて、足をはさむやつとがあつた。また、おしとりといつて、百貫も百五十貫もあるおもりをつけ、熊の通りみちにはつておいて、熊がそこを通ると、はつておいつつなをはずして、おもりがおちるというのもあつた。

かりゆうどについての伝説は、

別にない。

かりゆうどのおまつりする神は、

山の神様である。このかりゆうどは、むかしは營業にやつたもんだから、山小屋へ入りに行く朝、十二様をまつる。かえつてくればまた十二講をやつた。熊でもとれば、おみきをあげ、もちをついて大々的に十二講をやつた。このときの宿は、大概うつた人の家。

そのときに招待する人は、

山へ一緒に入って、ねとまりをした人と、熊とかもしかとか大きいものをとつてきただけには、となり近所のものとか、買い物手などを招待して、酒さかなでおいわいをする。

十二様の掛軸をかけてまつるか。

掛軸はまつらぬいが、神棚にむかって、十二山とおもつて、酒をあげ、もちをあげてお祝いする程度。

十二様はどういう神様か。

男女はつきりしないが、女じゃないかとおもう。

狩りに行くことを何というか。

鉄砲ぶちに行くべきやといふ。

かりをする場所のことを何というか。

かりばといふ。

えもののおい方は、

おいてといつても、はじめて山へ入った人じや具合がわるいわけだ。一回も三回も行って、生きの日のことをよく知っている人とか、大体地図のあかるい人がいいわけだ。

かけ声は、おい、おい、おいという程度。また木をはいたたり、石をころがしたりする。人間が行けないようなけわしいところに生きものがいれば、そこへ木を切つて投げてやるとか、石をころがしてやるとか、木をがんがんはたいて音をだすとかする。

唱えごとはあるか。

別にない。

一番矢のことわざなんというか。

一番はじめにうちこんだ人を、最初のたまいれという。一番はじめに肝腎なところへたまをうちこんだ人が、親方株になる。とくめ矢は、別におもんぜられてない。

えものの分配方法は、

むかし、父の時代あたりは、一番先の人は大部分分配事がよくて、熊とかさるをうてば、あたまとか、つらぬぎといって、足へはくもの材料になる毛皮をもらつたという。

今はたまいまへ（一番先にうつた）も、とくめやもなく平等。

むかしは、うちとめた人のおきまりは、あたまとか、足の皮をふつう分配の人より余分にもらつたことだが、肉とか足以外の毛皮を充て、その金額を平等に分けたという。

熊のいはどうしたか。

むかしは相当高価だったが、今は薬品が発達しているから、貴重にもおもわない。あまり高価には売れないらしい。

肉をわけるときの方法は、

刀でえものを切つて、つかんでわかる。

山の神に供えるものは、

それは、大きいものでもとれたときは、山の神におはつを一かけあげる。おはつというのは、刃物をいれてきりさばいたとき、分配する前のもの。

山の神様の石宮などが近くにない場合には、どうお供えするのか。その場合には、気分的にここが山の神様だというので、泊っている小屋の上座にあげる。

えものをわける場合は、小屋でわかる。また、山の中でわかる場合もあ

る。その場合の供え場所は適当なところ。

はつものの処分方法は。

ほかのにくと同じなべにいれて、山小屋にて、みんなでたべる。

山小屋へよらないでおりおろした場合にはどうするか。

その場合には、どこでやつてもいいわけだが、うちとめた人にはなをもたせて、○○さんがうつたんだから、やっかいでも○○さんのところを宿にかりて、十二講をやらせてもらつて、にてたべえやということにする。

狩りに参加しなくとも、たま／＼しとめたところへ来会せた人にはどうするか。

別に習慣としてはないが、結局は、まきがりでもした場合、たまたま出会った場合は、めずらしいものでもとれたときは、肉ぐらは食べてもらうという程度。そのときの状況による。これは、別に理由はなく、そのときの気持によってわけてやる。

わけ前の単位は。

目分量でつかみわけです。単位は一つかみという。きちようめんにはできないから目かげんでする。

えものの中で、どの部分が一番いいとされているか。

大骨（背骨）の内側のところがロースといって、一番価値があるといふという。

一番目は、手足のふといところ、一番まずいところはあらかわといふところ。

狩りに参加した犬の分け前は。

別だん、犬の分というのはむかしから規定はないが、とくに犬に働きがあれば、犬の持主に多少の謝礼をするという程度。

臓物のなかで薬になるものはあるか。

肺のことを、こここの肺師はあかふくといつて、結核あるいは心臓にいいという。肝臓のことはくろきもといい、肝臓病にいいという。心臓は

心臓にいいという。

狩りに行くときおまじないをするか。

別段しない。

狩りについての予兆はないか。

別段ないが、狩りにでも行つた場合に、うまく獲物でもなかつたときには、今日はふがわるくてだめだったとか、あるいは、おもわぬ大魚にぶつついた場合には、今日は想像外のふがよくつてもうけたとかいう。

狩りに行くときなど、方角について何かいわないか。

別段それはいわないうようだ。

獲物があるようにおがむのは十二様だけか。

そう。事故なく獣をさせてもらいたいと、十二様をおがむ。

獲物をとつたあとでまつりは、山小屋でもするのか。

山小屋では別段しない。山小屋では、山奥ふかく入るの、設備がないので家へかえってきて、とつきた肉をにて食べて、酒でも沢山のんで、うたでもうたつてお祝いをする程度。

大きなものでもとれたときには、獲物でもその場でにてたべる。

狩りのときの禁忌は。

別段そんなことはかまわない。家にお産があつたときにもかまわないと、死ぶくのときにもかまわないと、死んだとか、うちでお産をしたとかいう場合には、うちできよめに塩こりをするとか、あるいはおはらいをしてでるとか、そんな程度で別段やつてならないということはない。

塩こりというのは。

塩を体にちょっととふりまいて、体をきよめること。

うつではない動物は、かもしかのはかにはあるか。

禁猟時以外はかまわない。

狩りに行つてはならない日はあるか。

別段ここではかまわない。

山へ入ってはならない日はあるか。

それも別段ないが、あまり喜ばないのは仏滅の日。

はじめてかりうどが山に入るのはいつか。

一月一日以降なら、いつでもかまわない。

山仕事が終ったという時期はあるか。

かりうどが終ったという日は別段ない。期間中（十一月一日から三月十

五日まで、むかしは十月十五日から四月十五日まで）は別にかまわない。

山の中に十二様をまつてある場所はあるか。

この奥ふかくには、そういうことをする人はないが、新潟県の方へ入れば、熊一頭とねそその付近に十二様の木のお宮をこしらえることになつてゐるといふ。わしどもでも、十二様のお宮にぶつかった場合には、長野県でも新潟県でも、その十二様のお宮をおがむ。

お宮の中には何もまつられてないのか。

ナニさんの神とか、大山祇の命とかいてあるだけ。

山の神がとくに好きだといふものはない。

おこぜといふのがある。めだかのさかなだが、十二様の好物だといふ。これは、富山県からきた行商のくすりやが、父親と仲がよかつたので、二西一対になつてゐるのをもつたものである。父が山商先をしていた関係でくされたもの。山の神に、自分のねがいごとをかなわさせてくれれば、おこぜをあげるとかいう。

山の神のおつかいといふのはいるか。

山の神の神のものりものというのではない。

山にまものがいるということは。

よくまがさすとかいうことはある。それはおもわぬすじの山へ入つて、けがをするとか、死ぬとかいう機会にあうと、まにさされたとかいう。この辺では、天狗のはなしもあるか。

氣に入つて木を倒す音がしたとか、まげものの原料をとりに行つて、大きなもの音がしたとか、大きな太鼓の音がしたとか、あるいは、

のこぎりをひく音がしたとかといふのを、天狗のわざといい、わしらはあつたことはないが、はなしにきいたことはある。音はそれでも姿はみえないといふわけだ。

秋田方面からは、新潟方面からは相当、以前には入つたそ Rodgers ある。（山崎さんはなし）

秋田からきた人で、この部落に住んでいた人があった。その人の名前はわからぬが、くまおし（くまのおつち）といふのを、大池のところでこしらえたということだ。はじめはどういう人だかわからなかつたものだから、わし（山口主計さん）の三代前のおじいさんが、かりうどだつたものだから、あとをつけて行つてみて、それをまねして、くまおしというのをはじめたのだといふ。くまをとるおつちといふのは、秋田がもとだといふ。

それはいつころのことですか。

明治のはじめころだ。

よそのかりうどはきたか。

四万の佐々木といふ人が、和光原の方へはよくきた。ほかの県の人は、わし（山口主計さん）がおぼえては、たんと入つてはこなかつた。このおくのうちの川といふところが狩り場だから、ここまでくる必要はないかつた。この人ももうおの川へ行つた。新潟の人も長野の人もそこへ行つた。

さきほどの秋田の人は何年もここ（小倉）にいたのか。

秋田の方からながれてきて、ここへすんで、冬狩りをしていたらしい。村の人とはつきあつたそうだ。別に狩りの仕方を教えはしなかつた。今ゆきわもこの人のやつた仕事だそうだ。ゆきわといふのは、岩山に入るには、わかんじきといふのをはかない、石の中にあるけない。そこで、やまうづきをつめにしたもので、その木でないと岩の上をすべつてならないといふ。それまでのわかんじきは、つめがなかつたそうだ。秋田の人をみて、それ以後つめをぶつようになつたのだそうだ。

# 人　の　一　生

池　秀　夫

## 1 誕生まで

### 安産祈願

ここでは子供が生れてから若人として一応一人前の扱いを受けるまで、その発達段階における個々の儀礼・信仰・禁忌など種々の項目について扱っている。

先ず安産祈願は、奥深い山村だけにかなり深く行われ、子安様・十九夜様・産泰様など女性の信仰も厚い。そして出産は殆どが坐産で、而も「けがれ」に対する信仰はしっかりと守られ、分娩もたたみを外して薬を敷き、そこで行っている。

世立にみられたソバヒキは、今でこそ形式化しても、米を産しないこの村での心からの誕生祝として、喜びを共に分っていたようである。そ

して便所の神様は、どこでも生児の神として信仰されているが、特に六合村では厚く信仰されて、これらの氣持はタイゾメ、誕生餅につながつ

ており、ほうき神の信仰はここでも守られていた。  
然し全般に経済的に恵まれぬことは、それからの育児にもあらわれている。女児は幼なくして子守奉公に他村にも出かけなければならなかつた。子供ともなつての遊び道具は、容易に手に入るものを利用した、手

身もちして一、二ヶ月するとわかるので、子安様にいい子を楽にさすけてもらいたいと拝みに行つた。孫ができるときには、年寄りが子安様へお詣りに行つた。安産のお願をかけてから、お願はたしにはおぼうしがかけを繕つてあげた。

この地方のお産の神様は、子安様と十九夜様である。子安様は子供を産む神様で、旧の二月十九日（今では新暦の二月十九日）に女しよう（子供を産む人）が宿に集って（以前は山本とみお氏の家、今では順番制となつて）、お菓子を買つたり赤飯をふかしたりしてお祭りをした。これは昼間のことと、子持ちや嫁が集つた。この日は朝から晩まで一日中遊んだものである。

十九夜様も、子安様と同じ日にお祭りをした。子安様の像と十九夜様の塔は部落の愛宕様の境内にあり、そこへ赤飯などを供えした。（品木）

おなかの大きいときに、草津の下間谷の子安様へ行つて、ローソクをもつてきておいて、お産のときそれをあげてお願ひをする。無事に生れればお願はたしにお詣りに行く。産むときだけではなく、年々お詣りに行く人もある。（小倉）

腹に子供を宿すと、荒砥（勞多郡城南村の旧名）の産泰様とか近所の子供組行事も少なく、若い衆組については、もっと多くの資料が得られる」と期待していたが、案外に少なくその内容の特別のものはなく、これという古式のものも維持されていなかった。



子安地蔵（世立）  
池田秀夫撮影



十九夜様（品木）  
村にただ一基、東毛には多い。  
井田安雄撮影

産泰神社（大胡のサンタイサマ）にお詣りしてお礼を貢つてくる。御札のときは底ぬけ柄杓を上げる。大のヒヤクヒロ（小腸）を腹帶にしめると安産する。また安産には、

熊のタチ（襟穂）がよいといって、獣師であった家に借りに来る人がある。

（世立）

二月十九日に腹のデッケー人は、子安明神（地蔵）に行つて、きれいで腹をしばると、安産する。また京塚のコモリサンにお参りに行く。（世立）

妊娠すると産泰様へ安産祈願をして、お札をうけ、底ぬけ柄杓をあけてくる人がある。（日影）

水天宮のお札（よそから配りにくる）をお産の時にのみと、安産できるという。（京塚）

安産の場合には、底ぬけびしやくを買って行つて、子安様にあげた。木の柄杓がないときは、竹の節をぬいてあげているものもある。おがんはたしには、子供も連れて行つた。（小倉）

お産月に狐の骨や胆糞をのむと、お産が軽くなるという。これらは狐をしている人にもらつた。（小倉）

やしゃじんの実をのむとお産が軽いという。（小倉）

熊の盲腸（たち）を、お産月に腹にまくと、お産が軽いという。（小倉）

妊娠が自分のおまもりを切つてのむと、お産が軽くなるという（小倉）。

ほうきをまたけばお産は重いといわれた。（小倉）

妊娠中に、馬のタテゴをまたいだ人は、頭に二つマキ目のある子が生れる。また馬の死んだのにたらあうと、十二ヶ月妊つてゐる。この場合は、夫であつても同様である。（世立）

産婦は、油氣のもの、魚類等はたべさせられなかつた。（小倉）

坐産であつて、実家に帰つて産む人もある。のちさんはお墓に埋める。（品木）

部屋はどこでもよかつた。たたみ一枚はいで、そこへわらを少し敷いて産んだ。神様の前では産まなかつた。（品木）

むかしは産婆さんがなかつたので、一人で産み、一人で後始末をし

た。せいぜい近所の女衆とか、且那に少々手伝つてもらう程度である。

それもふとんをたたんで前に置き、それによりかかつて産む坐産であつ

た。(品木)

初産は大概嫁の里へ帰つてするが例である。(小倉)

神様の前でお産をしてはならないといった。お産のときには、たたみをあげて、わらのくずをひいて、うすい着物をひいて産んだ。(小倉)

初子のときには里の母親がついていて産んだ。出産の方法は坐産で、

産婆さんはたのまず、一人で産んだ。(小倉)

むかしのお産は、前になにか台(例へばふとんの四つ折)などおい

て、坐産であった。(湯久保)

むかしは自分で産んで、自分でとりあげた。親に面倒をみてもらう程

度であった。(湯久保)

お産は自分の部屋である。坐産が一般である。エナ・ヘソノオ等は昔

は縁の下に埋けたが、今は多くお墓に埋ける。(日影)

お産は昔は、薬の束などを前において、よりかかつて産んだ。今は寝

て産む。産室は薬のクズなどを敷いた処でお産をした。(小倉)

わら束を十二本置いて、産婦はこれにおつかつて坐つてお産をし

た。すむと一日に一束ずわらを減らして、十二日たつとやっと普通に

寝られる。坐っているのが苦痛で、足を出して年寄りにうんとおどされ

た人もいる。(小倉)

お産の場所は、特に決つていないが、六畳の間があれば、お産が軽い

といふ。(湯久保)

初子のときは、産む間際に実家に行って産む。産後二十日もいれば帰

つてくる。(湯久保)

この地方では産む晩まで働いていて、産後三、四日たつとめしたきぐれえするようになる。(小倉)

産婆は経験のある年寄りがするのが昔は普通だった。

前かゞみに坐つて生んだ。

ノチザン

ノチザンは墓地に埋めた。(小倉・広池)

ノチザンは自分の家の墓地にもつていて埋めた。埋める場所は大体

決つていた。(品木)

ノチザンは墓地に埋めた。(小倉・広池)

ノチザンは家の者がお墓にいた。また一番人のまたぐ入口のじぶ

くの下にいけると、子供が利口になると、丈夫に育つといふ。

(湯久保)

ヘソの緒

ヘソのおは、もげるまでかまわなかつた。またこれをとつておいて、

腹をやむときのませるとよいといふ。(湯久保)

ヘソノオはお産のときハサミと麻糸を用意しておいて、産婦が自分で

切り、捨ててしまう。知らない間にもげてしまつるのが普通で、昔の人は

縁の下にいれたといふ。(品木)

ヘソノオはとつておいて虫ダスリにする。

ヘソノオは墓地にいける。(小倉)

ヘソノオはとつておいて、九死に一生といふ場合にせんじて飲ませる

といふといつて、とつておく人もいるが、大抵はほうりはなしにして

いた。おしめを洗濯していく、知らない間になくなつてしまつたといふ

が多い。(小倉)

「へな」(臍の尾)は縁の下などに埋めた。

生まるとすぐに近所の人がしてくれた。これをトリアゲ湯といふ。

(品木)

赤ん坊をお湯に入れるときには、親類の者を頼んだ。(小倉)

初湯は縁の下に捨てる。陽の当らぬ所に捨てないとコンニチサンに罰

が当るといふ。(広池)

ウブギ

赤ん坊に着せるものは、あらかじめ嫁さん即ち産婦が用意しておいた。(品木)

ウブギは取り上げた人が着せる。(広池)

力ニババ

赤ん坊が生れるとマクリ(産屋で売っている)をのませた。これは母親の乳が出るまではのませたものである。(品木)

子供が生れると、マクリをのませて力ニババを出させる。(日影)

昔は「まくり」(下剤)をのませた。

分娩と夫

初子のときに、且那さんが出産の場所にいなければ、二度目のときもよそに行つていた方がいいといった。もし初子の出産のときにその場に居合せれば、ばんぎり(出産のときはいつもの意)そこへ居なければならぬといった。(品木)

出産のとき且那さんがいると、産が重いという。(湯久保)

初産のとき夫が立会うと、その後のお産も夫の留守には生れないといふ。(広池)

出産の際、産ねどこへ且那が入ると産がおもいという。(小倉)

初産に夫がいると、ばんごて(そのたびごとに)いなければ生まれないといつて。夫が他国へも行つているときは困るといった。(小倉)お産ベヤにだんながいると子供が生れないといわれ、主人は部屋に入るものではない。昔は生れそうになると、且那が立白しよつて家の周りを回つて歩いたという話もある。(小倉)

ほうき神

ほうきをまたぐとお産が重いといった。若しまたいだら、ほうきをいただけといわれた。ほうきの神様が、赤ん坊を産むときにはきだして、れる(軽く産ませてくれる)こと、というので、ほうきをまたぐなどといふ、ほうきはかけておくものだということである。(品木)

安産

臼をひくとお産が軽いという。(広池)

お産のとき音を立てないように便所の板をかえせば軽いという。また

鶏の初卵をのむと軽いという。(広池)

産づくと弘法様のお礼をはちまきにしていった。弘法様は以来タテヤマから来たようだ。(世立)

## 1 誕生儀礼

### 産 飯

オボタテメシという。生まれてすぐつくる。普通の御飯だがつくるのは誰でもよい。それをお膳にのせて神棚にあげ、それをさげて家中でたべる。(湯久保)

産なんですが、お膳をつくって産婦にたべさせた。姑さんがいなければ近所の人などが、ごはんをやらかくにて(米のめし)である。以前は米のめしではなかった。(産んだ人だけがたべた。また神様にはあげなかつた)。(品木)

### ソバヒキ

子供が生れるとき、近隣、親戚はソバ粉をひいて、重箱につめて持つて行つた。これをリヤサにしてたべてくる。この重箱は、殆ど形式的に先方でもらつた格好だけで、そのまま返される。これをソバヒキといつたが、今はやつていない。(世立)

### 見 舞

お産見舞は近い親類や知己の者がする。女の子なら赤いきれ、男の子には男がらのきれをおくつた。(湯久保)

### お 七 夜

お宮詣りは、お七夜のとき誰でもワカイシヨウでも頼んで行つた。このときは神社・便所神(自分の家のチヨウズバ神)・井戸神にお詣りする。近所まわりはしない。(小倉)

ほうし神  
便所の神様は、ぼうし神様という。お七夜のとき、赤ん坊をお湯に入れてから家の人（誰でもよい）抱いてお便所にお詣りした。ぼうし神様にお詣りすると丈夫に育つといった。以前は元日の朝、子供が初絆と一緒に女神の絵を売りにきた。それを便所にはっておいた。それがぼうし神様であるといった。（品木）

子守が赤子を抱いて雪隠まいりをする。

オボヤケとうぶけ

うぶ毛はオボヤに剃る。切った毛は捨ててしまう。女の子は、二回目にのぼすときに、真中に立てた。（品木）

初生毛は男は二十一日、女は二十日のオボヤの時剃る。この毛は粗末にしないでツボヤの植木のもとにおく。（日影）

うぶ毛は生後二十日目頃、オボヤに剃つてやる。毛は捨てる。特別の儀式はない。（湯久保）

うぶ毛は二十日たったときに親が剃つてくれる。女の子でも、二度目の毛が黒くなるようにと剃つた。（小倉）

初生毛はオボヤに剃る。この日宮詣りをするが、ひたに「犬」という字を書くと丈夫に育つといい、また赤ん坊を初めて外に出すときオムツをかぶせて出すと魔除けになるともいう。またオボヤケのとき便所の神様ウツサンミヨウサンにも詣る。この神様は男でも女でも便を両手でとってくれる。従つて便所にツバをしてはいけない。ツバをすると両手でとれないから、口に入れることになつていけないとされている。

（広池）

オボヤキは男が二十一日目、女が二十日目。以前はこの日にはみんなを呼んでお祝いをした。親類の人や近所の人が、きれの二、三尺ぐらいずつもつてよばれてきた。この日はお膳をつくって、おぼやの神様にお供えした。（品木）

おぼやけは、男は二十一日目、女は二十日目、一番さきに自分の家の

便所へつれて行き、宮まいりは産毛を剃つてからする。昔の人は百日たたねばおまいりしないといった。その日には「犬」の字を子供の額にかけた。そのあと神まいりに行く。村の鎮守様へ、子供におわせて、とりあげた人などがつれておまいりに行く。（湯久保）産のいみは昔は百日まで宮詣りが出来なかつた。今はオボヤ（生部屋明）の日に宮詣りする。この生部屋明けの日に赤ん坊の額に「犬」という字を書いて連れてゆく。（日影）

産毛剃り

女児は二十日、男児は二十一日に産毛を剃つた。その毛は植木の下にかけといった。粗末にならない為に。

くいぞめ

くいぞめは男は百二十日目、女は百十日目にする。女の方が意地がむさくて、先にたべるという。やわらかい御飯をして、少したべさせてみるだけ（米の一枚でも口の中へ入れるだけ）、神様にはあげなかつた。（品木）

赤ん坊の初膳に石をのせる習慣がある。これは「歯が丈夫になるよう」こという。（小雨）

くいぞめは、女は百日、男は百二十日目、飯をして、丈夫に育つようくいぞめに供えて、一粒、一粒くわせてみる。新らしく箸、茶わんを買つてやつてお膳をつくる。やつてお膳をつくる。（湯久保）

くいぞめは生後百八日目、三粒たべると丈夫になるといい、母親が普通の御飯をたべさせ、母親もたべる。茶碗は飯、汁二ヶ用いる。（広池）

くいぞめは生後百十日、男百二十日にする。その時お膳の上に一つ又は二つ小石を副える。（日影）

食い初めは女児百十日、男児百二十日たつてから。

禁忌

生後六ヶ月で生えた歯はオニバ、生後十ヶ月で生えた歯はトウバといつて思む。（広池）

## 捨子

丈夫でない子供を、前以て打合せをしておいて捨子する。今まで子供を丈夫に育てた人に、その家の子供のように丈夫に育つようにと、頼んおいて三本辻へ捨てる。寒くないようにして捨てるのだが、頼んであらすぐに捨ってくれる。(小倉)

## 初誕生

初誕生には餅をついて、重箱につめて、赤ん坊にしよわせた。この餅を誕生餅といった。この餅をふかい親戚に配った。このあとは別に誕生祝いをしない。誕生餅を背負う子はそんなにはいない。餅を背負って歩く子は、お祝いにころがせといった。(品木)

## 育児

丈夫に育つように、橋の下で、なべをかぶせる。こうするとはしかが軽くすむといふ。子供がうまく育たず、次々と死んでしまうような場合、村中から少しずつ布を貰い集めて、マブリギモンをつくった。(世立)

## エズミ

子育ての道具で、わら、竹などでつくる。下ヘワラシビ(スベ)を入れ、その上にやっこい(やわらかい意)ものをひいて、エズミのぐるり(ふちの意)を着物などで囲う。(湯久保)  
エズミは子育ての道具で、わらと竹でつくった。(品木)

## 赤児の笑い

赤ん坊がねむりながら笑うのは、オボの神様がちようすという。(湯久保)

生児が眠つていながらに笑うのはオボの神様がチョロス(笑わせる意)のだといふ。(広池)  
生れて間もなく、生児が笑うのはオブスナサンがちようしていといふ。おしりにあざのあるのを、オブスナサンがつねつたなどといふ。

(世立)

子供がねむりながら笑うのを、ウブの神様が笑わせるといい、泣くのをウブの神様がつねるといふ。(品木)



エズミ相葉伸撮影 (根広)

## 七つ坊主

弱い子の場合に、お願いしようしてい。(品木)

## トトツクイケ

これを残していると、トト(魚)が食えるといわれた。(湯久保)

ウブ毛は、紙に包んで石垣にくくる。人に踏まれぬよう。トトといえまるまでトトクリ毛を伸ばすといい。炉に落ちそうな時、ウブスナサンがこれを持つてひっぱつてくれる。トトクリ毛は盆の底の毛である。(世立)

火にころびそろになつたとき、神様がボンノタボをひいてあげてくれるといふ。(小倉)

ボンノケを残しておくと、子供が転んだとき、神様がこの毛をもつて、すりあげてくれるといふ。(品木)

親(振親)

仲人親 これは仲人の事を親としていう。仲人子は年始に毎年ゆき、死亡の節は会葬する。その時は実の親に準じた態度で葬礼に出る。

捨い親 子供の育たない家で、子供を仮りに捨て、特別に依頼しておいた人に捨上げて貰う。

取上親 所謂産婆だが、これは特別にたのまなければならない。（引退）

子守 子守には一年でも二年でも、よそ村へ奉公に行った。手当としては着物をきせてもらうだけであった。十才から十一才ころになって、子供をおぼえるころになれば子守に出た。二月の二日が出がわりであった。なお、子守に行つた人は、家が困つたために行つた人と、親戚からたのまれて行つた人とがあった。（品木）

### 子供の遊び

クライブチ 念木。「クライブチがはじまつたからヌツクタなつた。」などといわれるよう、春先の遊びであった。

竹馬 入山には竹が生じないから、木でつくる。タカアシノリ、シ

ゾガカキ、タバコスイなどの技術がある。

「シヨウガタカイ」といつて逃がす。

オオタマトンボ（フジマキ）をつるときは、

「オオタマカエリ クマカエリ  
サンリモイツタラ マタカエレ」といふ。

シオカラトンボはムギワラという。（広池）

じやんけん 女は「シツシノホイ、アイコトセイ  
シヨウブトセイ、サンドメトセイ」

男は「オソキヤノキヤ

イシノカミ、ハサミイシ、イシハサミ、ナンドモエー」といつてやる。

鬼ごっこ オニサンコ

オニゴトアソビ

その他ユビズモウもしたが、石けりは「コマ（石のこと）ケダシともい

う）すべえー」といつて遊んだ。（広池）

繩とび 大波、小波

くるりと廻つてまたぎな。

郵便屋さんの発動機。

もうかれこれ十二時だ。

一時、二時、三時、四時、五時、六時、七時、八時、九時、十時、十一時、十二時。（広池）

（皆で）オーツキ（一人入る）オハイリ（一人入る）

（皆で）ハイヨロシユウ（中の二人が）コンニチワ、ヤンケンボイヨ、マケタオカタハオヌケナサイ。ツギノオカタニネガaimas。（広

池）

かんけり 繩結の縄を庭の真中におき、一人の鬼を決めておいて十人がかかる。鬼はその縄を看視しながら十人をみつける。その間に十人の中の一人が縄を蹴つてまたかかれる、その場合例え誰かをみつけていても又鬼になる。

一人みつけると縄の所に来て一、二とふみ次の人がみつける。鬼は十人の全部誰からも縄を蹴られないでみつけなければならない。（広池）

キシャゴ ここだよ、へつたよ、を繰返す。（広池）

蜂の子とり 男の子はアカバチの巣をとり、ウジを出していつて塩味をつけてたべることもした。（広池）

ジョーリ 夏暑いときホオの木の葉を三枚合せ、前を折つてそこに葉

が返らぬように棒を通してはく。単純な子供の遊びである。

（広池）

ゾーリ、ゾーリ、ケンジ。

草履を一人片方ずつ出して並べ、一人が鬼になる。

ゾーリ、ゾーリ、ケンジ、ケンジ。

オタマガシヤクリシヤツクリ

ヒノモト用心

橋の下のショウブが咲いたか咲かぬか

わしやまだしーらーぬ、アーメノコイ

言葉の残った人がもう片方の草履を出してソコソコといい、全部集

めて上に投げ、

降るか晴れるか、天のばあさんに聞いてみな

といい、逆に出た草履は投げた人がかくす。かくされた人はシンゴかい

てみつけに行く。上に出た人は戻ることになる。(広池)

他の習俗でもそうであるように、この村の入山地区とその南の地区とは、大きく異っていることが多い。

昔の通婚区域が現在より狭いことは当然であろうが、入山地区では特に血族結婚が多く、南の地区は他村との結婚が多い。昭和廿八年の調査によると、入山地区の根広、和光原部落の婚姻は、計九七組中その九〇%

までが部落内で行われ、近村との婚姻が三二組その他七名であった。

そして結婚年令が、昔は現在より年寄っていたといふことは、何としても経済的原因によると思われ、そのことは結婚式、披露の簡略さにもあらわれている。或老婆が「結婚式なんてあげもしなかった。勿論披露もなく、主人の家に仲人に入れてきて、その日から働いたもんですよ。昔は貧乏でしたからね」ともいっていた。

素朴で義理堅いこうした山村の人々は、一面ではヨバイを行いつつも、結局は恋愛の形ではなく、仲人による見合結婚で落着いていたようである。

## 婚姻

昔は若い衆といふ、今は青年団という。若い者頭が統制している。昔は大体十六才位で、今は中学を卒業すると入会する。加入の日は新年会の日、前以て会長に申込んでおく。その日は会則をよんできかせて守ることを誓わせる。

若者組をぬけるのは昔は結婚の時ときまっていたが、今は二十五才とう事になっている。(日影)

## 子供組

天神講 正月二十五日に子供がよって行う。大きい子は宿に泊る。そ

の晩は天神待の習字をして天神様に納める。(日影)

## 若人会 (わこうど会)

四十才までの若い人が組織をつくり村の仕事をした。今は十五人しかいない。村から外へ出かけている青年が多くなったので少くなつた。けいやくには娘衆をたのんで料理をしてもらい、酒を出して話しあつた。(生須)

## 青年会

昔は若い衆といつた。若い者頭が四人いた。祭典の世話や、村のもつれ事のしづめなどをした。(引沼)

青年団が出来てから、県道は青年が修理した。村道の修繕(年二回)や洪水の跡仕末などは村のオテンマでした。

## 婚姻團

入山のうちでの婚姻関係が多く、イトコ、ハトコの結婚も多い。(長平)

部落内での結婚はすくない。(湯久保)

## 結ばれるまで

恋愛結婚ということではなく、全部仲人が嫁を婿に紹介しての結婚である。(太子)

最近は見合いとか恋愛結婚が多いが、昔は何も知らぬ者同志が結婚したものである。もつとも昔はヨバイとか遊びというのも勿論多かった。(小雨)

他人の家に入りこむのがヨバイである。家中に入ると、あの人ヨバイに行つたといわれた。ヨバイの結果必ずしも結婚したとは限らない。女の方で戸を開けておくのは長くつきあってからのことであった。(湯久保)

昔はヨバイがあつたが、それがもとで結婚して一緒になった者は殆どなかつた。私生児(セイゴ、チナシゴ)が生れても必ずしも一緒に居るとは限らず、従つて私生児が村には案外居るものである。当時は義理がたいのでこうなつても結婚を許さないものが多くつた。

然し著とカトウド(仲人)は強い方がよいといって、私生児が生れると強いカトウドをやつて話をまとめるよう努力はしたのである。(広池) (著は強いのがよいというのは、昔はメンバに飯を堅くつめて仕事に出たので、その場合著を立てて持上げ飯が全部一度に持上がる程つめないと、若い人は喜ばなかつたことからいうのである)。(広池)

## カリブン

これは経済的理由によるものである。嫁さんを連れて行つて仕事をさせておき、双方の家で話合つて時期をみて式をあげた。(湯久保)

## トマリゾメ

日がよいからとて婚約中で挙式前に嫁を連れてくるをトマリゾメといつた。これは所謂足入婚ではない。(小雨)

## 結婚の年令

今よりは昔の方が年寄つていた。(小雨)

悪い年は男が二十五才、女は三十三才という。またかみさんの方が一つ年多いのは、金のわらじをはいて探してもいらないといわれた。(湯久保)

## 嫁入り

昔は六枚双の中で夫婦盃をしたもので、盃事は他人に見せないものとされていた。今はそんな事はないけれども(小雨)。

普通中宿は昔は若衆が障子を破つてノソキをしたものである。これは沢山破る程お産が軽いといった。(太子)

## アトタズネ

式後翌日嫁の親はアトタズネを一升もつて婿の家に行くが、この場合では酒盛はしなかつた。(太子)

新夫婦の両親がはじめて行き来るのは、イチゲンかその翌日のアトダズネからである。嫁の父が婚家に酒一升もつてくる。嫁はおとつあんが来たというので、酒さかなでとりもつてやる。(湯久保)

## 嫁いじめ

嫁いじめは別にしないが、式の当日石塔を庭の真中に立てておいた例があつた。(太子)

## 名広め

(村まわり)

嫁は式の翌日村廻りといつて部落全体を廻る。このときは兄嫁が義妹をつれて歩くのである。昔はたゞ歩いたが、今は手拭一本持つて歩く。このときの挨拶は「今度兄さんのところへこの人を迎えました。よろしく

く」という程度である。またもとは嫁の仕度のままで歩いたが、今は訪問着を着て廻る。このとき氏神まいりはしない。（湯久保）

村の家全部を式のその日に、嫁の仕度をとらずにそのまま廻る。（太子）

### お茶呼び

お茶呼びということも昔はあった。村中の女人を、結婚式の後に呼んで酒や赤飯を供したことがある。（小雨）

### 里帰り

三日目には里帰りとして、しゆうと・嫁・娘が嫁の実家に来て一夜泊まる。しゆうだけはその日に帰る。（太子）

三日目、娘と姑が一緒に歩いて行く。持つて行くのは赤飯程度である。この日姑は帰るが婿は泊つてくる。（湯久保）

この他嫁の里がえりは、正月と三月、五月の節供である。（湯久保）

五月四日の夜を「女の晩」というが別に行事はない。（湯久保）

### 葬制

人生の終着駅である。「死」この山村も他村同様に土葬である。そしてその儀式も類型的なものが多くたが、ホーベーは組内の者も含まれ、葬儀では広範囲にわたり且重要な役を分担していることは、戸数の少ない各部落に共通してみられることがある。

次に両墓制については、調査員は特に注目していたのであるが、嘗て和光原に採訪した折も、明治初期まであったと老人が語っていたように、殆ど全地域でその形跡がみられた。そして両墓制本来の型からみて、両墓の特質の明瞭な区別を忘れた、やゝ崩れたものであった。ここにも両墓制を守ろうとする村人にとっては、あまりにも土地に恵まれない。

### 遺骸と供物

遺骸は北枕に直し、神棚には竹の葉を大神宮様の前に置く。死者には小麦粉で作ったロクドウダングをうでたのと、これをうでた湯で、となまし米をておわんに山盛入れて箸一本立てたのを供える。またおつゆもその湯で作る。死人を家から出すまでは、おつゆをても実は入れない。その他リングなどのマクラモを供える。（太子）

い山村の貧困さがみられるようであった。

### デキゴト

デキゴトと普通いえば死者のできたことをいう。（田代原）

### 予知

人の死が近づくと、合間をおいて鳴くヒトクチガラスの声が聞える。カラスはオテンントウサマのお使いだから、人のすることが予めわかるのである。（太子）

### 死

死んだ直後にはその人の名を呼ぶ。（湯久保）

### ツゲ

死亡通知は近所の人が二人ずつで行く。これをツゲといふ。ツゲは死者の親戚に行く。てぶらで二人で歩いていると、あいつはツゲだといわれた。尚ツゲが遠くから来たときには、昼間の場合は簡単な昼食を出す。（湯久保）

死人が出ると近所、親戚などに知らせ、組内の人々は死んだことを聞いておくやみに行く。このときの通知に行くツゲビトは、二人一組で親戚の者がこれに当る。（太子）

## 死者の着物

死者に着せる着物は、大勢の人で急いで物指もあてず、針どめもしないで一緒に縫う。この着物は襟をつけない着物であつて、その分の布は帯とする。またさらし布でキヨウカタビラを作る。（太子）

## 通夜

通夜はうちうちで行い、親戚や近所の人は来ない。死者の上に昔は刀、今は刃物をおく。（太子）

## 野道具

野道具は器用の人に作ってもららう。（太子）

## ニカン

棺はタテガンが一般で、子、孫など死者に近い人がサカサミズでユカソする。水汲みはソトビンチャクで行い、湯わかしなどは空いたなべを用いるが、その後は縁の下に入れておいて、一週間は使わない。ニカンした湯は、陽の当らぬところに穴を掘つてそこへ捨てる。（太子）

## 納棺

納棺は普通死者の子供の男根がするが、妻が死んだ場合は、夫がこの世の縁切りに髪の毛を二、三本切つて棺の中に入れてやる。また棺には六文錢を入れるのが、今は目録ですませている。この納棺のとき「本當はおめえがおれを世話するのだが、今夜は仕方がねえ、おらが世話してやるから、早くよいところに行け」とい聞かせる。棺の上にはお堂にしまつてあるカンブタを置く程度で、納棺をすませると床の間において、僧侶におがんでもらう。（太子）

納棺のとき近親・子供達は荒縄でタスキガケをなす。

湯棺・納棺をした者は、百日のオハライをせねばならない。百日とは

一夜五十日、二夜で百日のことで、紙を切ったオンベロでお敷いをして、塩をかけ身を漬める。（太子）

## 出棺

出棺のときスエノカサ（椀の蓋）の御飯を、一本箸でたべる。これをデハシノメシという。これはお膳一人、位牌一人、棺をかつぐ人四人、計六人分、六つ盛り作つて出すのである。普通はタテガンで表を向いて縁側から出るが、棺はマゴノカタグルマといつて、孫にかつがれるのを最もよいとしているが、一般にはホーベーの人がかつぐ。このときはお寺でよこしたさらし布をたんたんエロを肩にかけ、かついた人には施主が足袋を一足宛出すことになっている。

お膳をもつ人は死者に近しい人であるが、ソデツカブリをかぶり、頭はトボグチで簡単な島田に真似て髪を結い、麻布のヒラキソデを着て繩でしばる。（太子）

野辺おくりのとき、女人人は白のキレ（袖のようなもの）をかぶる。

お膳、位牌をもつ人、棺をかつぐ人は墓草履をはく。（小雨）

棺は孫のテングマルといつて、孫がかづぐ。（湯久保）

## ホーベー

ホーベーは、棺を出す日に、時間をみてホーベーショが掘る。これは親戚でなく組内的人が当り、組内の人で足りない場合は、親戚の人も加わる。ホーベーショは旗をつく竹の棒なども用意する。旗持ちも親類の人で不足する場合は、ホーベーショが手伝う。またホーベーショの中の幾人かが、ノマクをおがむ所に要る。すべて終るとヒキモノをするだけである。そして忌明け一七日にはクルミでやる。（太子）

穴ほりは親戚以外の者で、同じ組（班）でないものがしてくれる。これをおーベーといふ。人数はそのときの事情で違ひ、ほかの組のもの全部をたのむ場合もあり、区切つてたのむ場合もある。ホーベーは葬式関

保のときだけ立ちあうのがふつうだが、天災などの出来事の場合にもたむ場合がある。

穴ほりに行くホーベーには、酒一升以上、引物、むすび（一、三個）を野（墓場）へもって行って出す。墓場が仕上ると家へ帰ってきて、膳立てをして昼食をたべさせて引物を出した。（今はパンと引物を出すだけ）

なお、ホーベーは草履を六足つくる（はなむすびのもの）。棺をかつぐものが四足、施主と膳をもつものが各々一足はく。（湯久保）

ここは部落が小さいので、葬式があると、村中して出て手伝う。それをホーベーという。むすびとおみきを出した。（品木）

棺をかづぐ人をホーベイという。それは近親がかづぐのを代ってかづぐためという。近親の人は肩かけというものを、寺から借りてきて肩にのせてゆく。（小雨）

## 埋葬

埋葬は、親戚の者が一かけ二かけして、あとはホーベーショがかけてくれる。埋葬が終ると壇は裸足で、家に入るときはオンベロを立ててある立白の前に立ち、オンベロでお祓いをしてから、立白に腰をかけ、足と足でたらいの中で洗い、塩ごりをしてから家の中に入る（從つてふだんは、足で洗うことは忌んでいる。）（太子）

埋めてから帰ってきて、途中までくると履物をぬいではだしでかえつてくる。家に着くと入口の所に出してある塩でおはらいをしてから、うすに腰をかけて、手を使わないで足だけつかつて足を洗う（今はこの通りにはしていない。）（品木）

## 埋葬法

仏様は、たちがんの場合南に顔をむけ、ねがんの場合西むきである。（小倉）

死者は、山を背にして埋める。こうすれば自分の村をみながら埋葬されることになるからである。（田代原）

死人は、東向きとか、自分の家へむけていける。北向きはいけないという。（品木）

埋めるときは、北へ向けてうめる。ねがんの場合は北が頭、たがんの場合は仮のおもてを北へむける。（湯久保）

死者は、頭を北向きに埋める。これは背中の方から拝むように埋めるわけである。そしてタテ棺が多い。（太子）

## カーバレショヨーリ

死んだ家の子供衆がはく草履である。

墓へはいて行つて、かえりに三本辻へ捨てる。死人のチミチの人（血のつながっている人）がはくもので、はなむすびぞうりともいう。（京塚）

## チヨウベシ

死人があると村の人が一人で和尚さんをたのんでたまつて、死人のでた家のいろいろの灰を、チヨウベシの上にのせて、三本辻に出した。（京塚）

葬式を出して後に残つたものがチヨウベシに、ろの灰をのせて、おはらいをして三本辻か家のかどへ出す。また家中をはき出す。（品木）

## キアケ

埋葬を終え家に帰つて、仮禮に線香一本立て、これで葬儀は終つたことになり、用事のない人は帰る。親戚の人などはおきよめの酒をのみ、うどんをたべるが、これをキアケという。

僧侶は墓から帰つてキアケの前に、酒を一ぱい飲んで帰る。そのすぐあとお布施などをもつてお寺詣りをする。このとき昔は死者の着物などを僧侶にやつたのだが、今はお布施の金錢をやるだけである。（太子）

## モンベイ

死者のあつた家では、高さ五尺位の棒の先に、位牌型の板を作つて立て、これに戒名を書いておく。家のカイト（かどぐら）に一週間立てる。おくるのであるが、この間は食糧不足の人や、乞食などがくると食物をやる。（日影）

（日影）

上流の家では、門牌をつくって家の前に立てる。七日間乞食に物をやることになっている。（小雨）

高さ六尺ぐらい、巾六八寸、足一尺位のもので、大尽の家でつくり、これを門口のところに立てておく。立札は施主のところでつくり、戒名は寺で書く。前にローソク一本立てる。モンベイは一週間立ておが、この間にものもらいがくると、ただで飲みきさせた。（湯久保）

（湯久保）

位牌は四十九日まで、床の前など下におくことになっている。

## 忌あけ、年忌

親戚の者は、葬式の翌日朝食後四時分に墓参する。（太子）一七日はアカシアゲに行く。親が死ぬと百日あげたが、今は三十五日か四十九日までである。近い親類及び手伝いに来た人が寄つてくるのが、この日は団子を作つて呼ぶわけである。

トムライアゲの塔婆は、杉・松などを用いる。（沼尾）

三十三年忌には、親戚をよんでお茶をのむ。松の木の枝のついた幹の

四尺位の生木で塔婆をつくって墓に立てる。それ以後は系統がわからなくなるとしている。これをわかれ塔婆という。（日影）

## 産婦の死

産婦が死ぬと、路傍の水の出る所に、ヒヤクと一尺程の赤い布をおく。そこを通る人が布に水をかけるのだが、赤い色が消えるまで同じことをする。布が白くなると仏が浮べるといつていて。（太子）

## 赤子の死

誕生前に死んだ子は、近所の人をたのんで一膳でも出して、墓場に埋めてもらった。

八、九ヶ月生きて死んだ子は、和尚を頼んで、村の人に墓場にいけてもらった。（品木）

## 年二度の葬式

年に二度葬式のあつた家では、三度葬式があつてはならないというので、わらたたき（縄）をお葬式のときに、親戚のうちのだれかが、しめなわで墓場に引いて、別のところにいける。（湯久保）

## 入字

これはそういう話があるという程度であるが、死者の手や足などに文字を書いておくと、どこか他所の赤ん坊に同じ字を書いた子供の生れることが語られている。（日影）

## 耳ふたげ

四十九日で忌があつたというが、その後は百かんにち・一年忌・三年忌・七年忌・十三年忌で、仏は終る。こうしてトムライアゲといつて、フタマタトウバ（栗・椿の枝を用いる）を立てる。（太子）三十三年のトムライアゲには、栗・朴などの樹の芯頭を塔婆にする。和尚さんに字は書いてもらう。（小雨）

トムライアゲの塔婆は、杉・松などを用いる。（沼尾）

三十三年忌には、親戚をよんでお茶をのむ。朴の木の枝のついた幹の

この耳ふたげには別に麦バナ（ヒキワリを作つたときのアラコナ）で

作った団子を作つて、二つ耳へ当てる家もある。（小雨）  
耳つぶさげといつて、団子をこしらえて耳をふさぐ。（湯久保）

## 両墓制

埋葬地と墓碑を立てる處が異なる。前者を墓地といい、後者をヒキ墓といふ。

ヒキ墓のいう。ヒキ墓の方が一般に人家にお盆には両方の墓地に行く。

（日影）  
両墓は、明治十二年頃まであつたという。このときは子供であつたが、畑に埋葬して罰金をうけそれ以来やめた。（京塚）



両墓制（埋め墓）（日影）

今井善一郎 撮影

る。（太子）

正月近くになつて死んだ人の出た場合以外は、正月のトシリトリをする。（太子）

キボトケ  
無縁仏とガ



両墓制（ヒキ墓）（日影）

今井善一郎 撮影

スシのいないガキボトケ（現在の屋敷に昔住んでいて、今は絶えてしまつた家の仏様）には、カボチャの葉に御飯、煮つけものを一杯盛つて、インゲンを箸の代りに立て、位牌を並べた盆棚の一段下の棚に供える。（太子）

石塔は立てない。結局石塔の六尺前後、側に埋めてあり、或は上の土で埋め、その上に石塔を立てる。

ガキをしてもらつてくる。また家の門口で子供が墓東を燃す程度であがきをしてもらつてくる。そしてお寺には行かないでせ

ある。

スシのいないガキボトケ（現在の屋敷に昔住んでいて、今は絶えてしまつた家の仏様）には、カボチャの葉に御飯、煮つけものを一杯盛つて、インゲンを箸の代りに立て、位牌を並べた盆棚の一段下の棚に供える。（太子）

今回の調査では、家族関係の資料は比較的少かったようだ。六合村の族制関係の調査はすでに昭和年代のはじめに萩原進氏や、地元の湯本真司氏によつて行なわれ、最近では都丸十九一氏や小池善吉氏による詳細な研究調査がなされてきた。これらの調査の中でとくに注目されたことはイツケ（マケ）の組織と機能についてであった。萩原氏の調査研究の結果は雑誌「上毛文化」や著書「浅間山風土記」その他の著書に紹介され、湯本氏の研究は「上毛文化」誌上に発表された。都丸氏は近著「消え残る山村の風俗と暮らし」の中で、その研究の成果を発表され、小池氏は本書にその研究結果を発表している。とくに小池氏の論文は、入山地区の引沼部落における社会学の立場からの詳細な研究調査の一部を発表された労作であり、家族関係についても克明に解明されておられるものである。

本稿は表面的な、しかもごく短時間の調査結果にすぎないのだが、多少はちがつた資料も含んでいるので、項目別に収録することにした。  
なお本稿のなかには、今回共同調査後になされた井田による補足調査（世立、引退、根広部落）の結果の一部も含まれている。

## 門松のこと

（五七頁）

入山の山本イツケには、宵の山本と明の山本の区別があることは、昭和十年代以来萩原進氏や湯本真司氏が雑誌「上毛文化」誌上などですでに紹介されたことがあるが、次にその概略を記すことにする。

## イツケの共同

山本イツケの先祖があるとき戦争から帰ってきたが、一方の山本は大晦日の宵のうちに着いて門松を立てることができた。しかし、一方の山本は、元日のあけ方に帰りついたので、門松をたてることができなかつた。そこで、宵の山本の方は門松をたてるが、明の山本の方は門松を立てないのである。入山の引沼・世立には明の山本が多く、今でも門松をたてていない。入山の世立・根広・和光原には門松と称する松があり、それを門松がわりにしている。世立で聞くところによると、山本イツケの先祖にメイノジョウという人がいた。あるとき戦争からかえつてきただが、暮がおせしまつたので門松を立てることができなくて、立つたままの松を門松として、おとしとりをしたという。それ以後、山本イツケは門松をたてないのだといふ。世立から幕坂へ行く道の端に、世立の門松があるが、近年落雷にあって枯死してしまった。

入山地区にみられるこうした門松について、都丸十九一氏は次のようにも説明しておられる。「これはかつて家々で正月神のより代である門松を、山から迎えて来た以前に、部落共同で、神の降り給う依り代の木を山中に見たてて、これから正月神を迎えたこと、あたかも、盆の迎え火を山嶺より共同でむかえ降した、かの西南毛の火とぼし行事や火揚げ行事のようなものではなかつたか」（「消え残る山村の風俗と暮らし」一五六頁）

イッケが同じ行動をとる機会を示すと次のようになる。

。祝儀のときは勝手仕事をする。しかし、祝儀は家の経済力によってちがってくるので、イッケの仕事もそれによってちがってくる。簡単な式の場合には、イッケ内の主人が出る程度である。葬式のときは、イッケの仕事は喪主に代るべき仕事をする。なお、入山地区の各部落では、葬儀には部落全体が参加する。

。法事も家の経済力によってちがう。肉親だけをよんでもある人と、部落全体をよぶ場合とがあり、イッケの者は、部落よりのときに、勝手まわりの仕事をすることになる。

。農事関係では、田植は主としてイッケと姻戚関係のものが共同してやる。はたけの手伝いとしては、病人などが出でて、ほかの家よりも手おくれになつた場合には、イッケと深い姻戚のものが手伝う。(引説)



山本イッケの稻荷様（世立）

井田安雄撮影

### イッケ（マケ）の稻荷

六合村ではイッケ（マケ）稻荷の形が比較的はつきりみられる。しかし、すべてイッケ稻荷の形をとつてゐるのではなく、部落によつては、ごく少數例の屋敷稻荷の存在をみることができる。(世立では二例) 屋敷稻荷とイッケ（マケ）稻荷

との関係についてはすでに都丸一氏が「消え残る山村の風俗と暮らし」（高城書店刊）の中で、「一家神」として紹介すみであるし、小池善吉氏も本書所収の論文中でも、イッケ稻荷について若干ふれておられる。都丸氏は前掲書の中では、イッケ稻荷（氏神）と屋敷氏神との先後関係について考察され、イッケ稻荷から屋敷稻荷への分化をみようとしている。

本稿では、各調査員からの報告を以下に地区別に取録しておくことにする。

### 1 赤岩

マケは一つのタルワになっているが、中には下の家でも上の組になつていたりするので、戦時中にはじからかまわす地域ごとに分けて隣組組織にした。

墓はマケごとにになっている例が多い。マケの共有財産もあつたが、先づて区長がその金を管理している。葬式や祝儀もマケごとにしていたが、今では隣組でする。

赤岩の籠原マケは大日様を祭つて、祭りには甘酒を作り込みに来る。今は広池じゅうの神になつていて、祭りには甘酒を作り込みに来る人にくれた。また広池の人はそこに寄つて酒を飲んだ。御神体は大日さる。安原マケでは屋敷稻荷を一か所に寄せて、初午に本家に集まつて祭つて、今では六軒で回り番にしてある。最近の分家は屋敷稻荷を作らず、本家の稻荷を拌む場合が多い。

開馬ケでは大岩の不動様の分かされたという親音様を持つて来て祭つたが、今ではムラのものになつている。

### 2 生須

黒岩姓五軒、市川姓五軒、中沢姓七軒、これは三軒と四軒に分れ、稻

荷様も二ヶ所にまつってあり、三箇日、六日年、十四日にもまつるが、初午と大晦日にまつる。組は姓によらず地域によって分かれている。(生須)

小雨でも本家の屋敷稲荷を分家がいっしょに拝むことになっているので、分家には屋敷稲荷はない。祭りは二月と十一月の初午である。

### 3 小 雨

### 4 品 木

戸数十六戸、人口は九十六人。

山口姓十一戸、山本姓四戸、中沢姓一戸(これはよそからきた)。稲荷様をまつっているが、各家々にはない。屋敷の外にある。お宮は一つで、分家の人も同じ稲荷をまつっている。稲荷のまつりは、今まで

は旧の三月十七日であったが、今年(昭和三十六年)から新的四月十七日にした。むかしから、鎮守様のおまつりは旧の三月十五、十六日で、その翌日は稲荷様のおまつりをしていた。稲荷様のおまつりのときには、赤飯、うどん、そばなどをした。稲荷様におそなえしなければならないものは豆腐とされた。稲荷様は豆腐が好きだといわれた。新わらのつとをこしらえて、その中に豆腐を入れてあげた。



品木地区略図(總合)

かえらない。

### 5 引 沼

引沼部落では、新屋組(十二軒)に一つ、中組(六軒)に二つ、打越組(十五軒ほど)に四つ、したで組(五軒)に二つの稲荷がある。ここは近年よそから入ってきたもので除くとすべて山本姓である。このうちの新屋組の場合についてみることにする。

新屋組は引沼のしたでからうつってきたものといわれている。したでにいたものが、むかし山くずれでおされたので、一軒だけ現在地へのぼってきたものという。その先祖が、現在の山本碧さんの家であるとい

う。新屋組という地名はこのような新聞地由来するものである。ここでは、稲荷様は山本碧さんの屋敷のすぐうらへにまつられている。稲荷の地区でも同じことだが、稲荷様は作神様として信仰している。稲荷様はよそから日本へ、お米の種子をもってきてひろめたのさん(神様)といわれている。祭日は旧年初午の日で、世話の中心は碧さんの家だが、この稲荷のお日待の宿は交代でしている。お日待の日は朝から一日中仕事を休んでいる。この日は毎戸赤飯をたいて祝い、宿の家ではお燈明をあげたり、へいそくをつくたりする。稲荷さんの好きなものは赤飯とかなどという。お供えするものは、米のおひねり。おかしら・おみき・赤飯などである。お日待の晩には、組うちのものが一軒

人ずつ宿へよばれて行く。仕度はふだん着。むかしは神主がまわってきただが、今はこない。お日待のほかには、子供が生まれてからお七夜におまいりしたり、体の具合がわるい場合に、稲荷様へお願をかけたりしている。なお、稲荷様のお宮は木でつくられていて、こわれるまでつくり

世立の場合をみると、ここは上世立と下世立にわかれていて、上世立は全部閑姓で(七軒)、江戸時代の頃吾妻郡沢田村(現在は中之条町に

含まれている)から移住してきたものという。下世立は全部山本姓(三十五軒)で、ヌイノジョウウといつものがその先祖であると伝えている

(現在の山本由平さんの家)。ここには稻荷様は四つあり、上世立に一つ、下世立に三つある。上世立の場合は全部閑姓で問題はないが、下世立の場合は大体地域的に三つに区分されている。ここではたとえ他地区へ行って住んでいても、本家の稻荷様を信仰することになっている。新しい本分家の場合にはその点はつきりしているが、古い家の場合には、

下世立の稻荷様の信仰圈を三つに区分した理由は全く不明である。祭日は上世立、下世立とともに、もとは旧の一月初午であったが、現在は新の初午にしている。当日の宿は引沼の場合と同様に交代制(順番)になっている。

ここでは、同じ稻荷様をまつてある間柄をタミウチといい、イツケとは、わかっている範囲の本分家の間柄であつて、イツケの方が新しく、せまい範囲であるとして、两者を区別している。(引沼の山本弟蔵氏—世立の生まれーのはなし)。

## 7 長 平

長平の本多の稻荷様は初午にまつり、昔は利根郡から本多の法印がきて祭った。今は御札をくばるだけ。

根広部落には、中村家(十四戸)、下田家(四戸)、黒岩家(三戸)、山口家(一戸)があるが、山口家以外には、イツケの氏神として、イツケごとに稻荷様がある。

## 8 根 広

根広部落には、山田、山本、霜田などのマケ(組)ごとに稻荷を祭り、各戸の屋敷稻荷はほとんどない。もとは本家の屋敷稻荷だったが今はマケ

の稻荷になっている。

ウジ神というのは別で誠訪、八幡様などを祭る。

稻荷祭りは二月と十一月の初午に組ごとに集まってお祭りする。

## 相 続

相続の問題についても、小池善吉氏が別稿で詳細に論じておられるので、多少の重複はあるが、関係事項を若干記してみることにする。

この地方で、相続は長子がするのが普通であるが、末子相続の例もあつた。これはむかしの例だが、惣領はよそへむこに行つて、末子があとをついだ場合があった。ここでは土地がせまいので、惣領などがわきへかせぎに行つていて、そこでむこに入るという場合もあつた。相続するものは、仏壇から借金まですべてである。相続人のことはアトリといい、戸主のことは、カカリオット、相続人の男の子のことは、カカリットとか、カカリッコといつてゐる。相続をする機会は、親が六十から七十九歳くらいになつてからで、これは、その人の働きが十分できなくなつた場合で、とくにあらためた儀式もないし、その時期も不定である。

財産のこととはシンショウウといい、財産のきりもりのことをシンショウマワシといつうのは県内の他の地域と同様である。

ここでは、おかみさんがお膳手仕事をすることを、ニヤキといつうが、このニヤキの役目をよめにわたす時期はべつにきまつてない。姑が死んだ場合は別だが、旦那さんが死んだ場合とか、自分で働きができなくなつたと考えるようになるゆづる場合が多い。なかには、よめがくるとすぐにつた人もあつた。しんじょうをわたすまでは、よめさんに對して、米びつに全然手をふれさせなかつたし、台所へもおろさなかつたという。しんじょうわたしの儀式などは別になかつたが、明日からお

まえさんがみんなやりなさい。といってお勝手仕事を全部まかせた。

である。

## 1 引 沼

男の子が小さい場合に、姉にむこをもって弟の面倒をみていて、弟を一人前にしてから姉夫婦が分家する場合もある。この場合、かならずしも姉夫婦が分家するとはかぎらない。分家する場合には、ふつうの分家よりもわりと子供を多少よくしてやるようである。

またむすこが子供をのこして若死にした場合には、(こうした例はほとんどないが)、孫にかかる人もある。この場合には、むすこのおかみさんは身上はわららない。おかみさんに子供がないときには金でもつけんには身上はわららない。おかみさんに子供がないときには金でもつけんには身上はわららない。

て不縁にした場合もあった。

ふつうの分家は、十年も働いてから出るものもあるし、嫁をもってすぐに出る人もある。この場合に、もって出る土地の広さとか場所などは前もって別にきまつてはいない。また、分家する場合に、本家から位牌をもつてでるということはない。

なお、断絶した家のあとを、全然関係のない人が来てつぐ場合があるが、このときは、前住者の屋敷神をそのままつぐことになっている。また、断絶した屋敷のあとをはだけにする場合には、屋敷神はそのまま残しておく。ほとけさまは家について行くが、神様はついていかないで、その屋敷に残っているという。(引沼)

## 隠 居

隠居についての資料もまとまつた報告がない。これも、別稿小池善吉氏の報告に詳細が述べられているが、若干の資料について報告することにする。

隠居に出るのは、年をとつてからのいわゆる老隠居の場合がふつうのようだが、家庭の事情によるものもある。隠居そのものの実例が各部落ともすくないので、隠居の理由について分類することはむずかしいよう

## 2 小 広 池

年寄り夫婦が別居して自炊するものが隠居となり、ジイサンが死ねば独立していないで、終わりにする例が多い。別に制限はない。

## 3 広 池

インキヨに出ることは殆どないが、ここに一例をあげると、夫が二十一年前死亡したので母屋の東にあるインキヨヤに出た。それも年寄りになつたので我儘を云つて隠居したのである。子供は男女三人ずついる。カマドは別であるが仮宿はインキヨヤにはない。村仕事はトウジュウ(本家の主人)が出て隠居は出ないが、自家の草とりや田植などには手伝つて一緒にやつている。役場からの書類はトウジュウの方に来る。隠居が

死ぬと本家から葬式は出る。

#### 4 小倉

小倉には現在一軒ある。隠居するのは年をとった人、本家のそばへ小さい建物（隠居やといふ）をこしらえて住んだ。隠居へ出るときには、大抵土地をもって出ない。一切本家の世話になる。隠居の人が亡くなれば、本家で始末する。

#### 5 田代原

この田代原部落で隠居のあるのは大沢の大塚家のみで、田代原に住みついた人の間ではまだ行われていない。大塚家の場合は父母が末子を連れて元住んだ所大沢に隠居した。従ってこの父母が死ぬと連れて出て来た末子（現在三十五才）があとをつぐことになり、他の者は田代原に居ることになる。これは普通インキヨといふものである。

#### 6 太子

隠居することは珍らしい。何か特別なこと（外聞の悪いことが多い）があると隠居する。隠居はインキヨを作り、食事も別になる。隠居に出る時は人にならない子どもも連れて出ることが多いが、その子は甘えん坊になり易いので「インキヨッ子は三百安い」といわれる。隠居用の資産はインキヨメンと呼ばれる。本家とは離れて自活するわけである。

隠居する時に夫婦別々に隠居することもあるし、一方だけ隠居することもある。

### 家族の私財

この地域の主な収入源は山林と田畠である。その収入は家の主人がもつているのがふつうであるようである。九十九%はだんながぎつていて、今までいた人もある。こまかい収入、たとえば野菜や卵を売った代金などは、かみさんの収入となることだが、これはだんなさんの理解ある場合であるということだ。しかし、一面では、六合の女衆は平均に働きもので、そういう家では男衆はめしもの（怠けもの）だと説明もきかれたし、財布のもちかたにも、家族共同という形（湯久保の場合）もみられた。

家族の私財については、その地域の経済構造との関連の上にたって考えてみる必要があるが、今回の調査では、單に平面的に外からがめたという程度にすぎない。それも全地域にわたるものではないし、きわめて断片的なものである。ところで、それぞれの報告の内容には、地域によつて多少のちがいもみられるが、これは話者の本問題についての関心のちがいによるものもあるかと思う。本稿では、内容的な分析はしないで、便宜上、地域別に整理するにとどめた。

まず本地区における私財関係事項の特色を若干記してみよう。

一、本地区でみられた私財関係のことばとしては、ヘソクリ・ホマチ・キユーデ・コデ・コゼクリ・タスガネの六語があった。

二、このうち、ヘソクリ・ホマチ・キユーデの三語は、現在も年配者には比較的はつきりした内容をもつて使用されている。

三、ヘソクリには内密的な性格がみられ、ホマチとキユーデには公認という性格が一般的にみられた。

四、「ソクリ」とかホマチといふことは、本県では比較的広く使用されているが、キユーデ（キユーデ仕事）といふことは、私が現在まで知っている範囲では、多野郡上野村・富岡市一の宮町・安中市横町・埼玉県秩父郡方面と聞いていただけであるが、西上州ではもつと広くつかわれていることばかりと思われる。

なお、引沼の山本弟藏氏（入山の世立出身）によると、ホマチとへ

ソクリの二語は比較的新しいことばで、キューデの方はむかしからつかわれたとのことである。

五、コデは北上州から西上州にかけて広くつかわれていることばのようである。コゼクリといふことは、現在までのところ、本地区のはかには、北群馬郡と群馬郡の一部（コセツクリといふことば）できいているが、この二地方では、本地区とはやゝちがつて、コソ混的な意味に用いている。クセカネはコソ混的ないみをはつきりあらわしている。

次に、各地区の私財関係のことばをあげてみよう。

### 1 下太子

ヘソクリ…余分な働きであるが、例えは草津に野菜をもって行くとき、一円の売上げをして廿銭で砂糖を買ひ八十銭残す。これを七十銭として残りの十銭はヘソクリとしたり、酒一升買ひところを九合買つて、一合分残したのをヘソクリとする。

ホマチ…他人が休む日にかせいたもの。

キューデ…余分に働いたものであるが、主人は知つてゐる性格のものである。

なお一方ではヘソクリといふのは今の言葉で、キューデといふのは昔の言葉であるともいわれる。

### 2 湯久保

ヘソクリ…主人に知れないたくわえた金。

キユーデ…まゆでもあげたあと、くずものとか、あらこちに残つたものをためておいて、それをまゆ買いに売つてえた金を女しようが、つかうがそれがキユーデ。

ホマチ…大体キユーデと同じようなもの。自分のうちの仕事が間にあつたときなどによそからたのまれて働いて、金をとつた場合

に、ホマチになつた。これはわかいしゅやおんなじょうがした。

キューデの場合、家によつてははだけのすみなどにあるこいづか（肥塚）のあとへ、きゅうりだとかいんげんというものをつくつて、まだ身上まわしのできないものの小づかいにするものもある。つくつたものは草津までもつて行って売るのである。この場合は、こいづかのあとへ誰がつくるかということは、前もつてわかつてゐる。例えば、このものは秋になっておれの小づかいに売るからといつておく。また、あらかじめ、キューデにするために少しばかり野菜類などを適當なところへまいしておく場合もある。また、さごえを一おけなり半おけなりのこしておいて、それをつかつて、オレのキューデにすべえといつて、それでカボチャなどをつくつて売つてえた金がキューデである。あるいは、近くの手の土手へでもこやしをもつて、そこへなにかをつくつて、それをうつて、お前のキューデにすればいいといつて、作ったものにくれた。これは公然たるものであつた。

コデ…その人の小さいとか、すこしのもののこと、また、自分だけで流用できるものることをいうようである。

クスガネ…これは主人がいないとき、米などを売つてためたお金で、主人にはわからないようにしている。

### 3 小雨

ホマチ…千円の買い物をしたとき、千三百円だといつて金をもらひ、余りを自分のものにするようなのをいう。

キューデ…小づかいのことで、トウモロコシ三二十本受け取ると、それをおかみさんのキューデにしろといつてくれるようなもの。使いみちは子供のおもちゃや菓子などを買ってやつたりする。

「ソクリ：主人に内緒でためる金のこと。本来は主人に出すべきもの」とこと、キユーデともいうが多少のちがいはある。

キユーデ：もらったものをためておくことをキユーデという（金でも、物でも）もった金であれ、何かを売ってとった金（例えばくすみをもらって売った金など）であれ、主人にだまつて出さない金をキユーデといい、キユーデは少しきらいにつかう。

キユーデ仕事：これだけしろといわれた仕事以外の仕事をキユーデ仕事という。これはうちにいる人がやる。例えば、山へ薪を背負いに行つて、一日の仕事を終つてから、纏をなつたりすること。これは、年よりとか若い者が、少しきらい錢をとるためにした。としよりの場合でいえば、子守りをしていればいいものを、子守をすませてから下駄を一足こしらえれば、それをキユーデ仕事といった。

ホマチ：これは内緒をほつほつやつているようなもので、すぐに金になる目あてのない仕事をすること。例えば、ひまをみて纏をなつておとか、炭俵をつくつておいて、時期をまつて金にするような場合にいふ。

ヘソクリはわるい。

キユーデとホマチは大体同じような意味であつて、主人がある程度認めている。

## 5 広 池

ヘソクリ：夫には全く内緒のものである。男が財布をもつてゐるので、ヘソクリを作ることは出来ない。小遣錢は夫にもらつてある。

キユーデ：ホマチと同様で、例えは残つた一升位の麦を売つて金にかかる。これはあらかじめ夫に話しておくから夫は黙認しているもので、これをキユーデにもらうといつてゐる。

「ソクリ」というのは「まかしてためたもので、たとえば米をまかして売つてためたようなものである。「ソクリをためるとだんなさんにおこられる。」

ホマチ：「まかしてためたもので、たとえば米をまかして仕事でとつたお金があるが、これは余分仕事、副業のことである。また、ホマチ仕事でとつたお金をしまつておくと、「ソクリガネ」になる。」

キユーデガネ：「まかのものには迷惑をかけずにためたお金のこと。たとえば仕事が一段落して休むところを休まずにかせいでためたのがキユーデガネ。」

キユーデガネをもつてゐるのは、比較的らくな家庭のおばあさんなどで、家計がくるしいと「ソクリガネ」にしておけない。キユーデガネはその人の金だから、何につかつてもよかつた。キユーデ：「個人の財産」という意味で、わるい意味ではない。ホマチとキユーデは大体同じもの。「ソクリガネ」の方は、わるい意味にとられる。

以上のことは「女衆」に關係したことばである。これらのことばを實際につかう場合には、「キユーデにつかう」とか、「ホマチにとつたヘソクリガネ」とかいう。

この辺では、草津へにかもつて行けば、「ソクリガネができる」といわれている。

## 7 引 沼

キユーデ：「まかしてためたもので、たとえば米をまかして売つてためた」ときれない。キユーデは公認であるが、キユーデはなるだけできない方が家庭の和合の上によいといふ。またキユーデ仕事ということばもあり、

これはカカリワト（まだ一人前にならない老練）がちょっとのかせぎをするという意味をもつてゐる。

コセツクリというのは、てんでん（めいめい）の収入というわけである。だんなさんはそれにゼニをためることがコセツクリ。

コデは小さいといふみで、そろばんにのらないほどのものをためた場合（表面上の家の収入にしない）にコデという。カカリツト（かみさんとか、若いもの）がする。

## 8 根 広

ホマチ…余分に仕事をするという意味。

キユーデ仕事…ふつうより余分の仕事をして、その金をたくわえることを、キユーデ仕事といった。

コセガネ・ヘソクリガネ…女しようとか、わかいしようがしたもので、これはごまかしてためたもので、わるい意味をもっている。

こうしたことは主にわかいものがした。

主人がしたのではキユーデにはならない。

キユーデやホマチはいい意味をもっているが、コセガネ、ヘソクリガネはわるい意味にとられている。

## 9 小 倉

ヘソクリというのは、思つていたよりも収入がふえた場合に、そのふえた分をいく分なりともそいでおくもの。

ヘソクリをするのは、あきないをする人。ここ（小倉）は収入の少いところだから、じゅうへソクリをとるというわけにはいかない。

おもにヘソクリをするのは女人で、三十すぎぐらいの人。

コゼクリというのは、意外に、おもっていたより値がよく売れたからというとき、ひつかいておけというのがコゼクリになるようだ。（ソクリと似たようなものだ。主人には別にはなさない。なんか買ったことにでもしておぐ。）

キユーデ仕事というのは、今はあんまりないようだが、むかしはある

毎日、どこそこへ行くなんといつて働いて、得た収入を若いものが自分で小づかいにためておいた。これはたのまれ仕事にした。山へ青物を

と/orに行くとか、きのことりに行くとかといふのは男の仕事で、人にちよつとやとわれて小づかいどりをするのは女の仕事だった。たのまれば、小づかいのはしくないものも行つた。キユーデ仕事をするのは、あそび日とかぎつたわけではなかつたが、家のものに公にして仕事ができるのはあそび日ぐらいだつた。だから、自分のきんちゃくへ入れるのは（キユーデ仕事をして金をためること）、あそび日でもなければできなかつた。あそび日にはなにをしてもかまわなかつた。

キユーデ仕事の方はみとめられていたが、ヘソクリとかコゼクリの方は、少しぐらいなら、わかつてもかまわないものもあつた。ここでは沢山きんちゃくへとつていれるわけにはいかなかつた。収入が少いところなので。

ホマチ…こののは、わかいものが、ちよつとしたことを人からたのまれてすることと、ホマチドリといふ。これもみとめられれている。

キユーデとホマチドリのちがいは、キユーデの方は、公に一日をつぶして働いてとるということと、ホマチの方は、人にたのまれてちよつとした仕事をすることである。

## 10 田 代 原

ホマチ…余計にとれたものである。荷を余計に持つて行って売った代金などで、子供にお土産を買ってやる。

（ヘソクリ…内緒のもので、自分でとつて金を自分でためておく。

ギューデイ…土地の一部に余分に作つてギューデイにすべえとなる。

## 族制関係のことば

イツケ…血統の同じ苗字の一団、例：山本イツケ、本多イツケ。  
本家をトウジニウ、分家をシンタクと呼ぶ。分家に出ることをジワケ

といふ。

本家と分家の関係は、正月の年始と盆の墓参り程度である。カカリット・かみさんとかだんなさんがなく、なんの権利のない人のこと。

オンジイ・血族関係のあるおじのこと。

オンバー・血族関係のあるおばのこと。

アネー・よめに行かない女をいう。

アニー・アニーとも、一人ものならとしをとった人にもいう。

オヤジ・戸主のこと。

オツカア・主婦のこと。

ワカトウ・戸主權のゆずられてないもののこと（若夫婦）。

シメエツコ・ネコノシボ・末子。

ナカツツエー・まんなかの子供。

カカリオット・戸主のこと。

カザゴ・私生児のこと。

## 家印

### 1 日影

富沢木丸茂橋

○子余羽

大概の家に家印がある。木印ともいふ、材木などの小口に刻印で打つことが多い。つきのような例がみられる。

豆腐をつくる道具と釜は家ごとにある。豆腐をつくる場合には、近所のものが五、六軒あつまつてつくつた。豆腐をつかうのは、年とり、十日夜、稻荷まつり、葬式、祝儀の時などで、ふだんはつくらない。豆腐の原料の大豆は自家で生産したものをつかう。

味噌をつくるときもこの大釜をつかう。この場合は、便利のいい家にあつまつてつくる。仕事は大体一日がかりである。今までには、女衆の仕事であったが、最近機械が入つたので、機械まわしだけは男衆に手伝つてもらつている。

### 二十三夜まち

これはおもいつきのものがあつまつた。としよりはとしより同志で、わかいものはわかいもの同志でささいあつて月待ちをした。宿は希望者が任意にきめた。毎月したのではなく、とくにひまなとき、十一月と三月頃にした。

### 十二講

引退では、以前に一月と十二月の十二日に部落全体で一ヵ所にあつまつて（大神宮様かオカシラサマの家）、若干お酒をだしてまつた。ふだんは、十二月ごとに、家ごとに、かわりものをつくつてまつた程度。（引退）

## 2 引沼

家印これは書く場合と焼き印をおす場合とがある。

使用個所は、材木、下駄、道具など、又、 ned板の束にもつける。

提灯にもつける。種類は家毎に異なるが、例えばつぎのようなものがある。

金治茂○上△△△木

### 補足資料四

#### 豆腐づくり

豆腐をつくる道具と釜は家ごとにある。豆腐をつくる場合には、近所のものが五、六軒あつまつてつくつた。豆腐をつかうのは、年とり、十日夜、稻荷まつり、葬式、祝儀の時などで、ふだんはつくらない。豆腐の原料の大豆は自家で生産したものをつかう。

味噌をつくるときもこの大釜をつかう。この場合は、便利のいい家にあつまつてつくつる。仕事は大体一日がかりである。今までには、女衆の仕事であつたが、最近機械が入つたので、機械まわしだけは男衆に手伝つてもらつてい

村 落 構 成

はじめに

六合村は生活資料の取得方法から見ると農村的山村である。また村の開発の伝承から考案すると尾道百姓村、または草分け百姓村の類型に属する。しかし、一口にこう分類してもこの村を構成している各部落は多少異った個性を持つている。この個性は大きく南北二つに分けることができる。このことは、須川渓谷沿いに発達したこの村が自然的条件により南北に両断され、南部が交通条件に恵まれ比較的農村的に変貌しやすかった事情と、北部が山にかこまれ、永く封鎖的生活を営まざるを得ず、山村的なものに固定されていたことで考えることができる。そして山村は古い日本の岩石の露頭といわれることごく、北部地区により古い民俗慣行が残され、遠い昔の山村の生活を想起させる。

北部入山地区の起りについては、「宵の山本、明けの山本」の伝説がある。引沼部落には竿受け七軒といつて、七軒の家が入山の草分けだといわれているが、今は絶えたものもある。「昔代官がきて石高を調べた時、竿で土地を計つたので竿受け」という。」という伝承がある。世立部落は山本のケイズ（同族の意）が四一世帯、関のケイズ七世帯からなっている。入山地区の婚姻は同地区内で結ばれている。かくて入山地区は族縁的なものと地縁的なものが密接に重り合つて村落共同体を構成している。これに対し南部赤岩地区では湯本マケ（ケイズと同意）の如く古い伝承をもつたマケもあるが、十指に余るマケで村が構成され、

中には関マケのように中之条町沢田の関より分家したものや、武藤マケのように吾妻町坂上より曾祖父の代に移ってきたものがある。また南部一帯に他村と婚姻関係を結ぶ例も多い。かくて南部では地縁的な要素がかなり強い。こうした相違を前提に村組織の慣行は理解することが必要であろうし、このことは民俗研究に好資料を提供してくれる。

村寄合及び村役について、世立部落では正月二日をケイヤクの日として村寄合をし、収支決算、予算、申合せ等を定めると共に、村役を選出し、その後で宴会をして寄合を終るのであるが、村役の中で昔から存在するのはオカシラサマとワカイモンガシラである。オカシラサマは区長とは別であるが、部落の庶務を担当し、神社總代をかね部落の神事の主催者である。ここでは区長は村の嘱託員として形式的な部落の代表者にすぎない。恐らく区長制がしかれる以前の部落の代表者がオカシラサマだったのであろう。ワカイモンガシラは十八九才の青年二人と年輩者一名で部落の会計と祭世話人をかねている。両者の選出方法は順番的な抽選である。ケイヤクの場所はオカシラサマの家をヤドとしているが、長平部落ではチヨウヤと呼ばれる神社境内の建物を利用している。更に長平では部落の大事があればチヨウヤに必ず集まり相談するという。このことはケイヤク＝村寄合がもと神前会盟の形をとり、また祭政一致的な姿の痕跡ではないかと考えられる。なおいえば、祭の機会に直会の如き宗教的寄合が行なわれる兼ねて村の庶務的協議がおこなわれた事態をしおぶことができる。また、ワカイモンガシラが祭世話人として重要な役割を果している点、若者が神事の有力な奉仕者であることのあらわれ

と見られる。これに対して、南部ではチャウヤの存在も認められるが、（小雨・日影）、「神社は責任役員が運営している」（小雨）し、「区の仕事は嘱託員があつて役場からの仕事をし、又区長があつて別に昔から仕事をしている」（小雨）例もあるが、赤岩、太子では「区長は嘱託員であり」、「ワカイモンガシラと神社世話人とは別個のもの」であつて「ケイヤクは区長の家をヤドとして行なわれ」その日に行なわれる。

「ヤクカエ（村役の改選）は入札」によつて、近代的であり、地縁的傾向が見られるのである。  
一般的に平地村に比較して貧富の差が小さいのが山村の特色といわれるが、六合村全体を通じても例外ではない。また、多分に自給自足的傾向が強く、山村の厳しい生活の通統が現在も続いている。加えて前述のとおり地縁的、族縁的共同体としての村であるから部落の活動機能は、村組を単位としておこなわれることが多く、相互扶助、共同労働の慣行がさかんで、ホーベエ・コーリヨク・オテンマ・ユイ等が行なわれている。

このことは、信仰集団である講の活動についても同様である。信仰については別項に述べられているが、單なる信仰ではなく、日常生活の娛樂性を担う側面を持つことは他の地域と同様である。このように部落は地縁族縁を基盤として成立し、各種活動も個人的なものは埋没しているよう見られる。  
だが、最近の著しい社会変貌の波は六合村にも激しく打寄せている。既に明治政府の成立と共に、近代的土地所有関係が押付けられ、部落の共有地はその中に組込まれており、近くは、長野原線の導入、鋼管鉄道による開発等もあり、村の封鎖性は崩されおり、生活条件が、水田地帯のような平地村より厳しいが故に民俗慣行も案外忘れられていることが多いようである。

また中には、田代原部落のように京塚部落からの移住と、引沼部落からの移住と、信州下高井郡からの移住によって明治末年に開拓されたも

のもある。この部落の歴史をたどつてみると、本調査によれば次のとおりである。

山本邦松氏（七十二才）の父治三郎氏は明治三十八年、京塚では生活し得なくなつたので、家まで売却してここに移住してきた。当時は毎年五月にこゝに上り小屋掛けをして生活し、十月下旬京塚に下つていた。全家族がこゝに住みいたのは大正六年のことである。

山本勇太郎氏（六十七才）は、生家の所有耕地が狭く分家したが、耕地を持つていないので、京塚から大正十一年に来て翌年小屋を建てた。山口庄平氏（四十七才）は大正五年入居したが、その時の記憶はなく、七、八才のときから布団をかけて寝た覚えがある。それも板の上にネコ、その上にスケムシロを敷いてねたのである。

大塚家は信州下高井郡より六合村に来て小倉でわらじをぬぎ、そこから大沢へ、更に大正十二年にここに来た。現在分家も合せて三戸である。

こうして生活困難になつたり、分家しても財産をもらえなかつたりしてこの地に移り、現在京塚分十戸、引沼分三戸、信州分三戸、計十六戸の部落に发展している。この間幾多の困難を経て凡そ六十年、今や生活用具は草津から買入れ、トラックは元山部落まで入つて県内のみならず信州からも商人が来るようになった。シャモジ、ザツキ、ワラビナワ作りの室内手工业で生活の資を得、耕を栽培して食糧を得た生活から、花インゲン、リンドウの出荷をし、夜なべをする家もなくなり、主業は酪農へと進展し、テレビも過半数の世帯に備えられるようになつた。

かくて田代原は近代農村に變貌しているが、この変貌は伝統のない開拓村ばかりでなく、多かれ少なかれ、古い伝統を持つ本村にも見られ、意識も変り、古い民俗も忘れられてしまつてある。

## 村組織

赤岩部落は上、下二つにわかれていて、冠婚等の交際の単位になつている。更に部落全体は六組にわかれていて、中には下の家でも上の組になつてたりするので、戦時中にはじからまわす地域ごとに分けて隣組組織とした。各組には班長がいて、年番制である。マケの共有財産もあつたが、売つて区長がその金を管理している。区長は總代とも呼ばれ、選舉によつて選び、これを村役場では嘱託員として委嘱している。

太子部落はセン下組、太子組、花園組、榆木組に分れていて各組には

班長（昔は伍長）がいる。班長は年番制である。区長はもと總代といつたが、選舉で選んだ者を役場で委嘱するので駐在員と呼んでいる。

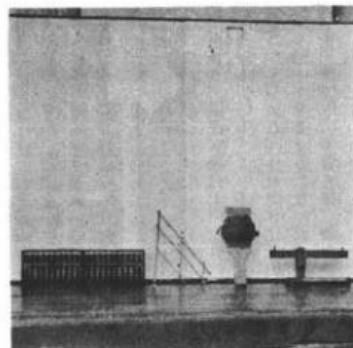
小雨部落は区長さんが支配している。区の仕事は小雨と沼尾に一人ずつ駐在員があつて役場からの仕事をし、また区長は別に昔からの仕事をしている。両者の下に両方兼務の班長さんがあつて連絡や事務に当つている。部落は小雨が五組、沼尾が一組に分かれ、一組が大体五ヶ所ぐらいいからなつている。

世立部落は間のケイズが一つの組、山本のケイズが七組に分かれ、組長はクジビキで選び、コガシラと呼んでいる。区長は嘱託員であり形式的なもので、実際の部落事務はオカシラサマがやつており、神社総代を兼ねている。順番制である。

## 寄合

赤岩では、部落の総会をケイヤクといい、正月十七日にやつた。参會者は原則的に村の一人前の男子毎戸一人である。ケイヤクでは収支決算と予算決定とヤクカエが主な行事で、終つて酒を飲む。ヤドは区長の家である。ヤクカエは選舉で選ぶ。選ばれる主な役員は、区長、祭世話人（順番制）、班長（順番制）、ワカイセンガシラ（二人、上、下より各一人）・埋葬管理者・養蚕・農事・採草・園芸の各組合長である。祭世

話人は祭のフレ出しをするばかりではなく、地芝居などを賣う場合必ず相談をうけ、フレを出して小屋掛けなど村全体のオチノマでやつた。なお、祭のオチノマに上、下より各一名出て祭世話人を補佐している。区長は正月のケイヤクの時以外に何かあると班長と相談して部落の運営に当るが、重大なことがあると班長を通じてフレを出して、総会を開いてその決定による。村役の事務引継ぎは四月一日で、区長は部落の文書が入っている区長ダンスを渡す。



地租改正（明治9年）に用いた  
測量道具（太子）  
右から高儀器、検査、平行定規、  
算盤

池田秀夫撮影

太子では、一月十七日に部落の総会を区長の家をヤドとして開く。参會者は一軒一人で原則として世帯主である。このヨリイ（寄合のこと）で總代・祭世話人・氏子世話人・寺世話人・採草組合長を入れて選ぶ。役員は再任を妨げない。一月二十一日再びヨリイを開き、役員の事務引継ぎをし、申合せを決める。これをケイヤクという。申合せは道筋説の方法ばかりでなく、冠婚葬祭の簡素化、時間の励行等のとりきめもある。總代ダンスの中には明治前後からの文書が一切保存されている。

小雨では、ケイヤクといつて正月廿七日に、一戸一人出て翌年の役員をきめる。会費はその時の実費で、酒とめしがある。世立では、正月二日に部落の寄合を開く、総会である。新年宴会で村役を運ぶ。これをケイヤクという。次いで正月二十五日に総会を開き、ヒキカエといつて事務の引継ぎをする。

## 序 屋



チヨウヤ (和光原)

正月に部落のものが集る。

萩原 進 撮影

長平では、天狗様の傍の建物で祭りの時だけ部落の人々が集まる。この建物は萱葺で、三間×六間程の大きな家がある。

赤岩では、道普請・学校奉仕・災難・家普請・火災の後片付け等は毎戸一人が出て共同作業をやる。これをオテンマという。太子では、道普請、採草地のソダ刈り等は区長がフレを出して一軒一人が出て共同作業をする。これをテンマヤタギという。出ない家は金を支払う。生須では、道普請、共有山仕事などでただ奉仕のことをオテンマといふ。田代原では、村で道普請などあるとき出会つてやる。これがオテンマで、出る人は年令に制限はなく、一戸一人を基準とし、他の人が認めればよい。

引沼では、道普請は村中總出で組頭の人の指図で行う。小雨では、部落の仕事として主なものは、山林の手入れ、道路の修理、水道組合の仕事、神社の掃除や懸立などである。引沼では、変死のあった場合は、村の全員が出て番をする。検死がすめ引きとつて葬式をする。火災のあった場合は跡の取り片付けをし、仮屋を建て、住めるようにする。

日影では、村への新入者は「寄留観」を頼む。新年会(八幡の社所でやる)の時に酒二升買う。「寄留観」に対しても尊敬はするが特別の義務はない。新入者に対し村人は特別の差別待遇はないようである。小雨では、村へ新しく入るには格別のしきたりはない。酒を買うことはある。

## 村 仕 事

太子では、ヨンモンはワラジスギをした家をオヤブンとし、ケイヤクの時酒を一升買う。

## 村 入 り

## 共 有 地

太子地区には採草地が三ヵ所約五十町歩ある。十五年ほど前に営林署から払下げてもらったもので、それ以前は借りていた。カヤ、ダボウ、雜草が生えていて、村人が分けあって、あとはタジビキで取分を分ける。夏期刈る草は各戸毎に分けられて、自由に刈れる。タラビクサは彼岸前後に各自で出掛けて行って刈る。昔はヤマのクチ（秋彼岸後の第一日）の日に競争で刈ったので、一番島でかけつけた。

引沼では、昔は共有林はあったが、分割して個人持ちにしてしまつた。共有の時は、橋や道の修理等の場合に用いた。今は公民館の宅地が共有である。

小倉では、今は無いが、もとは官有地内にかやかり場（かやば）があり、そこで屋根がえの希望者に先ず刈らせ、残りを外の者が刈った。世立にある採草地は八ヵ所、八十町歩以上ある。秋の彼岸が山の口である。昔はカリックラをし、カリマワシをやつたが今はやる者はいない。品木では、山の口は年によってきまつていて、国有地へ自由に入りできる日は、九月二十日前後である。

## 部落のつき合いと労働交換

ホーベイ

最少の部落単位を組といふ。そのつき合いをホーベイという。葬式の時穴掘りや、草履作りなどして助け合う。（日影）

村の血縁關係を一家といふ。葬式などの場合主人の考えによつて組の世話になり、或は親戚だけの世話になることもある。（日影）

葬式の時に組と親類を除いたものをホーベイといい、穴掘り、ツゲなどに出ることで、昔はムスピと酒を届けた。帰つくると一飯も出し

た。戦後はやらない。（生須）

葬式や祝儀はマケごとにしていたが、今では隣組である。（赤岩）

祝儀は組内でするのが一般だが、親戚だけでするものもある。三日位はかかる。（小雨）

年始は昔は村中順にまわつて廻礼した。今は簡略になった。（小雨）

火災後の見舞品には籠、杓子、柄杓、食物の類、布団等をおく。これは親戚関係の遠近によつて異なる。（引沼）

## その他

九月五日には村中揃つて休んだ。（小雨）

総代からフレが出て六月末に農休みをする。（太子）

村中の人人が休んでいる時働いている人のことを「ノメシモンのセツクバタラキ」といつてばかりにする。（赤岩）

長雨の時にはオテンキ祭りといつて白根さんへ毎戸一人祈願に行く。

雨乞いの時は野反へ行く。（赤岩）

六合村全体ではゴマと里芋を作らない。六合村の人は白根サンの氏子で、白根サンが里芋でのめつて転び、ゴマで目をついたからである。このため白根サンの氏子は目が片方小さくなっている。

胡瓜を作らない。作ると病人が出る。（梨木）

昔、嫁に来た女が、子を腹に宿して來たことがあり、その子が生れたが父親に似ていないので村から仲間はずれにされたことがある。（引沼）

コーリョク

昔は近所の人、親類の人をたのんでコーリョクを受けるとか、コーリョクしてもらおうとかいった。コーリョクを受けるのはただである。お世話になつた家へ手間がえしに行く。五日間たのんでも、六日間行くこともあり、三日間ですませることもあつて、同じにかえすこともない。コーリョクというのは無錢で人に手伝うことである。仕事の種類としては

屋根替・普請・烟仕事・麦とりなど個人でやつていて手が足りなくて困っている家へ、好意をもつて手伝いに行くことで、たのまれて行った場合には「コーリョク」といわない。すけっぱなしで、或る家の手不足などみかねて手伝いに行くのが「コーリョク」で、だれが行ってもよい。(湯久保)

屋根葺、家の普請などの場合で、大体組内近所、親戚の者などが「屋根をふいているらしいから」といって出掛け手助けする。或は家族に病人がいて畠仕事などのおくれている場合などに手助けする。従つておかえしはしない。しかし、結局こうした親しい関係の人の間で行われることであるから、長年月の間にはお返しをすることになる。(太子)

農作業の手伝いは、手伝いといい、コーリョクとは区別し、個々の家で人手の必要の時出る。(生須)  
手助けに行く事を「コーリョク」という。建家などの手伝いにい。コーリョクはやゝ一方的な手助けの時で、近々に反対給付を受けられるようないわぬ。(小雨)

個人の家へ無料で手伝いに行くこと。(長平)

手伝いに行くことを「コーリョク」という。小倉では三日間は自弁で手伝いをした。これを「コーリョク」といった。三日以上はその家で食事を出し手伝つてもらつた。この場合には、施主が三日目の晩にかかるときなどに、「明日も来てくれる」といつたのだ。コーリョクは屋根替えや新築のときなどにした。小倉全体でして、女も出た。屋根替えのときは、かやかり・運搬・こぼし・足場づくりまで村人がした。春秋普請があると、仕事ができないとまでいわれた。お金をもらわずに人の仕事をすることを「コウリョク」という。(小倉)

品木は小村なので、村人の関係は持つ持たれつである。できるだけの手伝いをしている。コーリョクといふのは、病氣で困つてゐる時とか、普請、屋根替えのときなど、手間にあわない人に手伝うことであつて、まれなくとも行つて手伝つてやる。(品木)

入山地区では本屋の普請(新築・改築)をする場合に和光原から根広

へは三日、世立・引沼・京塚へは一日ずつ手伝いに行く。これを「コウリョク」に行くといい、腰弁当で手伝つてくる。(和光原)

相手の家が屋根替などする場合に手伝いに行くことを「スケコーリョク」といい、同じだけ返さなくともよい。行かないでいると手伝つてもらいたいといつくる。(田代原)

家普請の場合、近い親類は三十日間の助けとをする。世立では四十日助けるという。親類以外の近くの人は一週間から十日位の間すける。それ以外の他処の人が手伝うのは一日位である。災難時の手伝いについては、当事者の主人の如き肝腎の人のが仕事のできない時(病氣等の場合はマキショイ、ヒカサヨセ等他人も一日位はすける。親類は四、五日位はすける。普請の他の災難時の協力のことを「コウリョク(合力)」といふ。先祖が助け、又助けられているから子孫も助けぬわけにはいかぬといふ。ニヒガエンとも云つてゐる。(引沼)

ホンヤの普請の時には村中の人をたのんだが、村中出でもらうとテベル(仕事が余る)ので、小屋の普請の時などには組、親類だけでした。(小倉)  
家普請の時に「ミチ(親戚)」はカベコマエナワを二百ヒロ、他人は百ヒロ、名札をつけてもつていて手伝う。ミチにはフレを出し部落全体にはオカシラサマがフレを出す。引沼と家普請で手伝いあうのがコウリョクである。(世立)

## ニ イ

AとBの家があり、ある仕事を話合いで手伝いあうことをい。ユイガエシ、エエゲエシといい、同じ量でかえす。田植でも夏かりでもなんでも。(湯久保)

田植等百姓仕事を主に隣家又はコンイの二家の労働交換である。(赤岩)

エーツコといふ。相談して行く家と行く人を決めるが、今は麦刈りく

らいで一日に對して一日返すことになっている。（太子）

エーという。田植などにする。（生湊）

ユヒは次のような仕事の時する。水田の植付け、草取り、カイコあげ、サイロをつめる時、家をたてる時、小屋たての時、屋根のふきかえ（葺屋根も板屋根も）（小雨）

ニイ、エニ、労働交換のこと。（長平）

蒔きつけ、とり入れ、干草あげなどの時に、例えばAの家へBの家から手伝いに行くと、翌日あたり（なるべく近いうち）Bの家へAの家から手伝いに行くことをユイシゴトといい、大体同じ仕事を同じぐらいいの人数でかえしている。

ヨイという。お互に相談して今日やつてくれ、明日オレがなすから

というようにお返しする。同量返すのが普通である。秋のエンシレイジ（埋草、とうもろこし、稗など）牛のサイロを作る（手伝う）の時などは、手が十五、六人要るから手伝ってくれねえか。あとで行ってなす（手間をかえす）といって手間をかりること。手間をかりて、手間でかえすのがエニ仕事。エニ仕事は、助合い仕事みたいなものだから女でも子供でもかまわずにかえす。（小倉）

## 講組織

### 寺講

お寺は日影にある。大般若講ともいゝ、八十八夜に四人か五人で一講を作り、毎年その中一人が代表者となつて寺へ集り、御馳走をたべてくれる。二百人位集まる。（小雨）

竜沢寺のお金を集めるための講で五人一講（小倉）

八十八夜講（太子）

## 施餓鬼

八月十三日で寺で行う。年回に当る人のある家に集まり、御馳走をいただく。（小雨）

## 念佛講

一月十六日に村中まわり番で当番となり、そこへ集つて男女入りまじりで坐り、大きな数珠をまわしながら念佛を唱える。念佛は十三仏。（小雨）

## 十二講

これは昔あつたが今はない。山の神様のお祭りである。（小雨）

## 三夜待

旧暦廿三日（広池）  
女衆の神様だが男も入っている。毎日旧の二十三日にした。この日三夜まち無尽をした。この日にみんなが集るので搗金したわけである。（湯久保）

## オヒマチ

一月十五日にする。（小雨）

## 庚申講

今はない。（広池）

今はない。一十年前まであり、三月の庚申の日にまつり、米を買ひ、ワカイモンカシラが祭が終つてから金を集めて宿へ支払つた。酒は一升おみきとして買ひ、宿の神棚に白飯をあげ、庚申様のところへいつまつるようなことはしない。飯は山盛りにして食わせる。庚申の晩同衿してはいけない。身持ちすると「口から出ようか、鼻から出ようか」という

神社のチヨウヤの場合とがある。後者の場合はよく泊ったものである。

(小雨)

十一月二十五日に学校へ出ている子ども達がまつる講、中学生が主になつて自分達で料理をつくり、兎を料理したりして先生も呼ばれてくる。資金は子ども達が薪背負などで得た金があつてられる。宿には天神講と書いてはる。(生須)

大きな庚申塔 (生須)

(文化14年建立) 井田安雄撮影



### 子安講

沢渡のお寺で子安講という女の人の講があり行つた人がある。(引沼)



子安様 (生須)

天保5年に信州高遠の石工の作

近藤義雄撮影

- から」。(生須)
- 地神講
- 九月の社日にする。おみきをあげる程度、今はない。(広池)
- サンジツ
- 毎月十四、廿八、三十日。廻り番で、赤飯、まんじゅうをふかして村中寄つて話ををする。(広池)
- 天神講
- 十一月廿五日、飯をたべて遊ぶ程度である。(太子)
- 十一月廿五日の夜、学校へ行つてゐる子供達が宿へ集り、殆んど徹夜で遊ぶ。双六やカルタ等をする。この費用は子ども達が、マキ背負など自分で支出する。兎を買ってきてその肉を調理してたべる。御飯、汁、卵焼きなど作り、みかんや菓子を買って食べる。宿が民家の場合と

が、宿は廻り番です。その時宿の家が振舞いをするので宿振舞といい、自分の財産に応じてできるだけの用意をしてもてなす。掛軸はないので特別のまつりかたはなく、子安さんの石像があつてもその時特におりなどない。しかし、お産のある家では頭巾をかぶせて願をかける。生須部落の東端にある子安様の石像(右の写真参照)は見事なもので、身持ちの人が願をかけて頭巾をかぶせている。天保五年十二月十三

日、惣村中・世話人霜田市四郎・黒岩千吉・山崎津次郎・市川弥太郎・中沢亀藏・石工信州小森吉蔵・小森好蔵とある。吉蔵は生須と小雨に大きな馬頭様の石像を影んでいる信州の石工である。(生須)

### 産泰講

荒砥の産泰様であるが今は行っていない。また、昔横壁のサンティイサマに妊娠九ヶ月の頃、母親が行った。軽くすめば底抜けのヒシヤクを一コ持つてお札参りに本人が行った。(太子)

### オボダテ

昔やつたお祭の一つ。四月十二日であった。餅米の中に大豆を入れて炊いたものを十二様へ上る。十二様は小雨にある。神社のチョウヤで村の女の人が(危年の人などが殊に)集つてこの御飯を炊く。それを村中へ落の葉へのせて配る。元来は山犬が子を生んだ時あげてお祝することであった。(小雨)

### 与喜原の荒神さん

長野原にある。

要があたるようにお参りに行く。養蚕神社という。(湯久保)

以前には与喜屋の荒神さんへお参りに行つたことがあつた。(小倉)

### 観音講

昔は馬、今は牛の持主による。(湯久保)

### 代参講

殆んど現在はおこなわれていないが、かつては盛んだったようである。三ツ峯さんは今ではお札が郵送されてきて区長がくばる(生須)ようになっているが、他と大同小異である。

盜難除け、災難除けのお札を受けに三峯、古峯へ代参一人が行く。これは戦前には毎年正月部落のケイヤクの時にきめた。(赤岩)

水キキンの時に権名神社の井戸水を借りてお札を立てる。

王城山講 曽あつた。長野原の王城山へ、春四、五人の代参者がお詣りに行つた。お酒を御馳走になつてお札をもらつてきた。(引沼・小倉)

戸隠講(太子・湯久保・引沼・生須)

伊勢講(湯久保・太子)

峠さん 雪氷峠熊野神社(湯久保・生須・小倉)

びしゃもん講 越後の浦佐。男が多かった。(湯久保)

善導寺香竈講(引沼)

成田山(生須)

藤名講(小倉)

八幡講(小倉)

はんとう講 長野原(小倉)

三峯講 每月十九日の夜(広池)。今は行つてない。(太子)

城峯講 埼玉(湯久保)

### 補足資料(四)

山仕事休む日

一月十七日は木がはらむ日といつて山仕事には出ない。

二月十二日には木がうまれる日といつて、山仕事には出ない。

十二様は山師がおがむ神様で、男の神という。(世立)

天狗のはなし

天狗さんは、根広あたりにはいない。もつと奥山へ入るとよく天狗さまのはしが出た。野反より奥へ行くと、よく天狗さんが木を切る音がするといわれた。これは老人のはなしだが、夜寝ていると、天狗がさわぐなんということを聞いた。また、木を切る音がしたが、朝になつてみればなんにもなかつたということだ。これは、老人たちが山へ働きに行って、山小屋に泊つていたときに経験したといふはなしである。(根広)

年 中 行 事

まえがき

六合村の年中行事の特色をみる場合、まず念頭におかねばならないことは、この村の北部の入山では昨年まで旧暦を使用していて、本年（昭和三十六年）から初めて新暦を採用したという特殊事情のあることである。ふつうの村の場合、新旧の暦の切り替えによつて古くからの行事の消滅が早められたことが多いのを、ここではある程度持続できたとも見られるわけで、他の地区より一層古い伝承の形態が多く見られたものと思われる。

一方、調査に当つては、一々の行事が新暦のどこに位置づけられか、話す方にも聞く方にも多少の食い違いのできたことは否めない事実で、新暦と思って聞いていたことが、話す方では長い習慣で旧暦で話していたりしたこともあり、記述の上でも多少の前後があることをおこことわりして、後日の訂正を待ちたい。

以下、六合村の年中行事の特色とみられるものを概観してみよう。

まず、正月の行事では、有名な部落共同の門松がある。大字入山の和光原部落には門松と呼ばれる地名の山中に松の巨木が現存していて、部落の門松に擬せられている。世立部落でも道端に部落の門松が生えていて、ここの中の山本一家では各戸の門松は立てないことになっている。という。年神を迎えるための門松を個別の家で立てるようになる以前に、一族または部落共同で適当な松の自然木を依りしろの木に見たて

て、それによって年神を迎えていた風習のあったことを物語るものであらう。

余談だが、筆者が今年の正月、多野郡鬼石町大字諏原を通った時、部落入り口の道端に門松飾りの立つてゐるのを見かけたが、聞けば山林の伐採を防ぐために、部落の申し合わせで門松を各戸に立てるのを廃止して、共同で一箇所に立たたることで、はからずも古例に戻つてゐることがわかつて興味深かった。

小正月の飾り物として、カツボタ（ヌルデ）の木で男女一対の道祖神像と、カガシ神を作つて神棚に祭つてゐることも珍しい風習で、特にカガシ神は県内でもここだけに見られるものである。高さ約二十センチの丸木に書かれたカガシ神像は、家々の神棚に一年中飾つて置いて、あとで炉の火にくべるか、烟に送り出されるものだが、都九十九一家はこのカガシ神を小正月に降臨する祖靈かと推定し、現在家々の神棚に祭られているタルマ像の源流をなすものではないかと考察を加えている。道祖神像は道祖神焼きの火にくべて燃される。

小正月の道祖神祭りや鳥追い行事が盛んなことは吾妻郡地方の名物で、中之条の鳥追いの写真などはよく正月の新聞にも報道される。大字小雨では、村中縦出で鐘や太鼓を鳴らして村内を回りにぎやかに鳥追いをするが、道祖神焼きや厄除けなども組みこまれて、冬の山映をいろいろ華やかな行事になつてゐる。新年の子祝行事として田畠の害鳥を追うためのもので、唱え言もよく残つてゐる。

節分に鬼ノ目または三角マナコという呪い物を、カヤなどを折つて作

り、いり豆と共にいろいろのカギ竹に結びつけて魔除けにする風習が入山地区にある。

このカヤは幕のダイシガニの箸に使用したものを使う。蘇民将来の伝説のチノ輪を思われるようだが、品木部落では小正月の飾物に、昔は木でソミンチョウライという福の神を作っていたというから、もっと類例を集めてみたいものである。

初午の稻荷祭りも、県下一般のように屋敷稻荷を各戸で祭ることをしていて、一族中心の古風な信仰形態を示している。屋敷稻荷はふつうウジ神様と呼ばれて屋敷の隅に祭られているもので、「氏神」か「内神」かが問題になっているが、六合村の例では「氏神」に近いと推定される。ただし、大字入山の和光原などでは、一族の氏神には別に諱訪様とか、八幡様を祭っているから即断はできない。

オボヤシナ、またはオボダテという行事も入山地区にあった。前者は旧四月八日、長平部落で岩穴の前にアズキ飯をフキの葉にのせて供えてから、子供たちに分けたもので、山犬（オオカミ）が子を育てる時期なので、アズキ飯をたいて養う意味だと説明された。

後者は旧五月五日、世立部落で大神宮様に子供を集めてオカシラ（世人話人）がアズキ飯をトチの葉にのせて分けてくれたもので、病気にならないという。山村では山犬は十二様のお使いだというので、特に大事にされて祭られていたものであろう。

盆の前の八月一日、オカマップタという行事が大字日影にあって、湯本真司氏の書翰で明らかにされたことは大変興味深い。子供たちばかりで川原へ出てヘツツイを作り、カマで飯をたいて会食をする行事であるが、県下では他に聞かない風習である。全国では各地で、盆ガマ・盆飯などと呼ばれて、盆に青年や子供が戸外で共同飲食をする例が報告されている。小正月のドンドン焼きと同じく、盆小屋を作つて別に生活した昔の風習に由来するものであろうといわれる。多野郡上野村乙父で桃の節句に行われるオヒナガニの行事と似ていて、子供たちには楽しいもの

であろう。

盆の迎え方に古風なものが残っている。大字入山の長平部落では、盆迎えに村境に集まつて麦わらを積んで迎え火をたき、「オジイサン、オバアサン、この火のあかりで、おいで、おいで。」と唱えて盆様を迎える。そこから麦わらのタイミングで火を移して、それをともしながら山道を通つて家まで、盆様を迎えることである。寺から提灯の火をもらって盆迎えをする一般的の風習よりも前の様式を伝えているもので、祖靈に親しく呼びかけている点といい、まったく素朴で懐しい行事である。

旧十月十日の十日夜にカカシに餅を供えて祭る行事が行われていることが、今回の調査で判明したが、県下ではここだけに残る風習であろう。下太子部落ではアフ・ヒエがらでカカシを作つて庭に立て、そのふところに餅を入れて供える。広池部落ではカカシ家のカマドのそばに立てて難煮餅を供える。品木部落では餅をついて、そのまま杵を臼の上に横たえておくと、カカシ神がそれを踏み台にして天に上がりて行くといわれる。このように十日夜に田の神の依りしろとみられるカカシに餅を供えて天に上るのを送るという信仰が、はつきりした形で残っているのは珍重すべきことである。カカシをこのように祭つて十日夜に田の神送りをする風習は、隣の長野県にもあるので、それとの関連も考慮されよう。なお、十日夜のカカシ神は、小正月に木像のカカシ神を祭る入山地区にはなく、六合村の中部以南に限られていることも何か意味ありそうである。あるいは同じ一連の信仰による行事が、前後別々に北と南に伝承されているものとも想像される。すなわち、春に田の神としてカカシ神を迎えて豊作を祈願し、秋には収穫を感謝してカカシ神を送り出すといった農民信仰が根底にあつたものであろう。两者が同じカカシ神と呼ばれることがこの推測を助ける。

旧十一月二十三、四日のダイシ講の行事にも、古風な伝承がついていて興味深い。大字小雨では、ダイシさんは子供が大勢いて食べ物を充分与えられないで、キッコザ飯（木のくずをませた飯）をたいてくれた

ので、以前はキッコザ飯をたいて供えたという。品木部落ではオテーシ様は子沢山なので、長い箸ではさんで子供たちに食べさせたから、今までカヤの長い箸を作るという。また、貧乏なので食べ物を盛りに出たが、片脚の親指がないのですぐばれてしまうから、雪を降らして足を隠してしまうといい、この日には雪が降ると伝えられる。和光原部落ではこの日に降る雪を「弘法さんの足跡かくし」という。ダイシ様は一般に弘法大師のことといわれているが、伝承からみるとおよそ高僧とは縁高い性格の神で、もと古風の神の子を意味する太子様と考えられ、ほかの地方では伝承が薄れてしまつてあまり登場して来ない不思議な神である。

以上、ざつと述べて來たように、六合村の年中行事の中には古風な生活形態を偲ばせる珍しい幾多の習俗が伝承されていて、まことに民俗の宝庫と呼ぶにふさわしいものがある。今までにも諸先輩の調査が行われてかなり明かるみに出されているが、今回の調査でさえ十日夜のかかいで神のように発見(?)されたものもあるので、これを機に今後の調査が期待される。

なお、贈答・社交の項目は別に設けなかつたが、年中行事の中に含まれることが多いので、適所にいつしょに記録しておいたから、御了承頂きたい。

## 旧暦、新暦

年中行事一切、昨年まで旧暦、本年(三十六年)より新暦に切り替へになった。(品木) 入山地区では今年から新暦を採用してすべての年中行事を新暦に合わせることになったので、六合村全部そろつて新正月を迎えることになった。(和光原) 旧正月から新正月へ昨年から切り替えられた。村外へ出ている者が多くなり、正月に家へ帰る人のために変えられたが、炭焼きには都合が悪い。山仕事は旧正月が都合がよい。

結局正月を一度するようなもので、仕方なく新正月にした。他の年中行事はほとんど旧で行なつてある。(長平)

## 年取り

一年の中で、年取りというのは、大年(大晦日)、この晩は米の飯。六日年、馬の年取りができるだけ御馳走を作る。十四日年。節分、豆まきをする。(小雨)

大みそか、六日年、十四日年、節分。年取りの晩は、米を買って食つた。大みそかには、荷付からオキリハギ(御幣)が來るので、それを神棚に立てた。子供たちは「お正月は来る、来る。」などと唱えた。(品木) 昔は呑氣であった。正月には酒でも飲んで、バチなどしていた。その宿も廻り番でつとめた。(引沼) 年取りには早く御飯をたく。大みそか、六日、小正月には稀荷様にオタキアゲをする。神の鉢に入れトウフと魚を載せる。(品木)

## 一月

### 正月

元日から七草までをオオドシといい、十四日から十六日までを小正月、またはダンゴ正月といった。(品木)

### 元日

#### 年神様

年神様は、卯日の卯の刻に来るとも、卯日の卯の刻に帰るともいつた。そして年神様が早く帰る年は、よい年で、長居をするほどよくなといつた。それは、長居をすると神様を粗末にするからである。



ヤセツボ（生須）

正月のお供え物をのせるワラゾド

中央の柱のところにみえる。  
開口正巳 撮影

卯の日の卯の刻には若水をくんで、御飯を一合ぐらい飲いて、カミノハチに盛ってお棚に供える。これをトシガミサンノオタキアゲといつた。

これ等はみんな年男がする。年男は大体一家の主人。オタキアゲを下げたものは、年男が食べ、子供たちにはくれない。

オミタマ様の語は聞かない。（品木）

#### 年男

三箇日の行事は一切女衆でなく、年男が今でもしている。年男は朝早く起きて、若水をくみお茶をわかし、餅を焼いてお雑煮を作る。（赤岩）年神・井戸・門松・倉・便所などにわら製のヤセツボを作り付けて置き、年男がその中に食物を供える。稻荷さんのヤセツボはわらで四角を作る。便所にも燈明を上げる。（小雨）年男が内外のおもり物をする。屋敷福荷・井戸・馬屋・肥い屋などの松飾りにわら製のゴキ（御器？）を付けて置き、朝晩に食べ物を供える。犬年から三箇日・六日年・十四日年・十五日ガユにも同様におもりする（和光原）。カマ場と門松にわら

のワソを付けて置き、朝晩におもりする。（長平）ヤセツボは正月の門松に付けておき、御飯などをその中に入れて供える。形はまわしを下でしぶたようなもので、中沢組は七草びきといつて七草に取扱い、黒岩・市川組は十四日に取り十五日に道陸神場でもす。（生須）コガネモチといって、暮にいた餅を小さく切って置いて、一日朝から野菜を煮てこの餅を入れ、それを三箇日年神様に供える。（広池）

#### 朝湯

年男が朝ぶろをたてる。（小雨）。元日の暗いうちに朝湯をたて、近所からふろもらいに来て年始がわりにしているが、取り立ててすることもない。（赤岩）

#### 初参り

赤岩では村の人が赤岩神社にお参りし、そのあとで学校の祝賀式に参加する。（赤岩）青年が神社に帳面を置き、参拝者の名前と時刻を記録して来る。（小雨）

#### 回礼

以前は年始回りに大沢全部歩いたが、今はしない。（赤岩）一日の朝神社に村中の人が集まって、ぞろぞろと村中の家を年始回りしていたが、今はしない。（小雨）

#### 正月飾り

松飾りは神棚や土蔵・便所などの建て物に飾り、門松は一本たてる。台木を杭にして門松を立てる家もある。年神棚の前には竹を渡して、ミカン・カキ・コブ・イカ・イワシなどいろいろ下げる。「まめですみますように」マメがらと木皮を下げたりする。（赤岩）年神棚には神棚を使い、松を二・三本飾りしめ縄をはり、ミカンを松の枝につける家もある。前へ竹を渡しミカン・コブ・魚・スルメなど吊るして供える。（長平）

門松  
和光原には山田マケが六戸、山本マケが十戸あるが、山田マケ（組）

では門松にシン松を立て、山本マケでは枝松を立てる。そのわけは次のようにいわれる。昔、信州秋山から山田氏の先祖が狩人しながらこちらに来た時がちょうど年の暮で、山の野宿して新しい年を迎えたが、東に向かった所に大きな松の木が立っていたので、それを門松にそぞらえて元旦を祝つた。そこで今でもその地を「門松」と呼んでいる。今ある門松の木は二代目で二百年近い老木だが、一本あったうち一本は昨年の台風で折れてしまった。場所は見晴らしのよい所で、遠く草津の方まで見える。さて、山田氏の先祖がそこで正月を迎えて、下の方を見おろすと煙が上っているので人が住んでいる村のあることがわかつたから、降りて行って先住の山本氏と話し合い、ついにその地和光原に住み着くことになった。だから山田氏の方が高い所に家を構えている。こうして山田氏は先祖が根松をカド松になぞらえたことから、今でも門松にはシン松を立てている。門松を全然立てなかつたり、餅なし正月にする家は和光原にはない。（和光原）

京塚の山本家は門松を立てないので、そこから移住したこの部落でも門松は立てない。三元日は御飯、従つて餅はたべたい者はたべるが、普通都合のよいとき二十日過ぎになつてつく程度である。（田代原）お松は暮の二十八日に山から伐つてくる。ナラの五六十尺ぐらいのものをカドバシリとして、カドや庭に立て、これに三階松を結ぶつける。カドバシリの元には何もつけず、また、しめもむかしはしなかつた。（品木）

#### 案例・縁起

三元日は朝は雑煮。トロロを一度は食うものとされている。荷付場では雑煮を食べない。（小雨）火を燃やす時、マメ木をもす。マメであるようとの縁起である。（小雨）セツ木として新しい木を伐つてマキにして置き、三元日だけ風呂や御飯たきに一本ずつくる。（赤岩）以前はおとなが元日の朝、初詣売りに来て、蚕神・エビス神・便所神等の絵巻を売つて行つた。（赤岩）

#### 贈答

正月の餅はヒトヨモチはいけないと云つて、必ず米と粟というように、一通りにして一枚、松葉をそえて親や世話になった人に届ける。（品木）

#### 二日

##### 山入り・仕事始め

今はいつでもよいが、以前は一月二日か三日。一日以後の暦を見て、最初のいい日を見つけて、山行きのかつこうをして、山へ行つて十二様をおがんべ、一本木を切る。このあとはいつでもかまわず山へ出た。十二様へはおさごを持つて行つて上げた。この日を「キリゾメ」という。（小倉）正月二日。キリゾメといつて、よい方向に行つて木を伐る。おさごを紙にひねつて、十二様に供えたあと伐る。小正月のダンゴをさす山グワと、花を作るカツボク（ヌルデ）である。（品木）。山始め。仕事始めで、道祖神のボクにするヌリデンボウを山へ伐りに行く。木に向かつて米をまき、「十二様に上げます」といつてから、木を伐る。（赤岩）仕事始めに山へマユ玉のボクを伐りに行く。曆を見てよい方向を探して行く。十二さんにおさごを上げてから木を伐る。（小雨）山入りは一日から五日までのいい日に行き、マユ玉だんごをさすダンゴボヤを伐つてくる。カツボコという木で、あとで道陸神やかかし神、たわらなどを作る。（長平）

#### 嫁の年始

嫁に来た人は実家へ御年始に行きお客様をしてくる。お膳の餅を一重ねまつたは二重ね持つて行き、帰りには実家からも餅をもらつてくる。（赤岩）

#### 三日

##### ケイヤク

新年会で、村の人四十七人が祭事話人の家に寄り合う。米三合、会費一百円を持ち寄り夕飯をいつしょに飲んだり食つたりする。もとはその場

で今年度の役員を決めたが、今でも祭事はこの時決める。役替の総会である。（赤岩）長平では五日がケイセイ勘定で、村の組頭がだんな衆を寄せて一年中の勘定をして、終りに酒を飲む。この時、今年の

役員を頼む。（長平）三日は不淨日とされる。（品木）

#### 四 日

##### 坊さんの年始日

日陰の龍沢寺の坊さんが年始回りに来る。（赤岩）もとはお金を集め、寺へ御年始に行つた。寺からも坊さんがお札を持つて御年始に回つて来た。（小雨）四日坊主といつて、坊さんが御年始に来る日だが、今は来ない。（長平）四日坊主といつて、坊さんの年始日。（品木）

##### お掃除し

棚に供えた餅をおろしてそろに餅にする。（小雨）お掃除しは七日にする家もある。（赤岩）お松はまだ下げる。（長平）

#### 五 日

##### 新年会

青年の新年会で初顔合わせをする。（赤岩）五日あたりから稼ぎたい人は稼ぐ。（品木）

#### 六 日

##### 六日年

年取りで、一年のうちには大年、六日年、十四日年（小正月）節分十五夜などの年取りがある。「六日年を取る」といつて、米の御飯をたき魚を焼いて大晦日と同じように神様に供える。また「家畜の年取り」といつてニワトリや牛や馬にも米をくれて年を取りさせる。牛や馬には人間が年を取つてから年を取らせるととい、人間の行事いつさいをすませ

てから年を取らせる。（赤岩）年取りで、御飯や酒を神様に進せる。（長平）六日は「爪切りよし」といつて、赤ちゃんの爪を切つてやる。（小雨）

##### セリツみ

「一夜ゼリツむとも一夜ゼリツむな」「セリは二日泊めてはいけない」などといつて、七草のセリツみをする。家によつては「一夜ゼリツつむな」「六日ゼリツを取るものではない」などと反対のことがあり、「五日にセリを取る。（赤岩）」「一夜ゼリツむとも一夜ゼリツむな」というが、早くつむのはいいので、四、五日ごろつむ。セリが主で、ナズナは無ければつまない。（小雨）

#### 七 日

##### 七草

「七草のおじや」は米に豆・ゴンボ・ニンジン・セリ・ナズナ・アオイタ・コブ・大根など七種を入れ、みそを煮て置いた煮すましのつゆを入れて塩氣の味をつける。年男が切り板の上にナズナやセリをのせて、火ばし、すりこぎなどではなく。「七草ナズナ、何たたく、セリたたく。唐土の鳥と日本の鳥と渡らぬ先に、はしたなく、はしたなく」と唱える。これは六日年の時に作り、神棚に進せておく。七日にはお掃除をする。（赤岩）。おじやの初めが七草で、しょうゆやみそ（おすまし）で塩氣を入れる。塩氣を入れないとおかゆになるが、おかゆにする家もあるし、そろに餅にする家もある。七草をそろえるのは容易で、ダメはひやして入れる。七日の朝だいどでマナ板の上にセリをのせてセリタタキをする。唱え言は「七草ナズナ、何たたく、セリたたく。唐土の鳥の渡らぬ先の、はーしたなく、はしたなく」という。七草がゆには米に麦・豆・トウフ・ニンジン・ゴボウ・セリ・ナズナ・コブなどを七色まぜて作る。（小雨）七草には正月のおもり物を神の鉢やメンバ

に入れて神棚へ供えて置いたものを全部下げて、ソーセーに入れて食べ。七草ソーセーには、そのほかあり合わせの野菜を使う。セリ・ナズナはないから、セリタタキはしない。（長平） オジャを作るが、セリタタキはない。（和光原） カユ。セリをつんでくる程度。（品木）

## 十一日

### フクダツコオシ・倉開き

正月に進めた供え餅を下げて、少し焼いて食べる日でフクダツコオシという。倉開き、サク立てなどはしない。（赤岩） そうに餅を作る。この日は早く倉を開けるといふ。（小雨） 別に何もない。（長平・和光原）

## 十二日

### 十二様・山の神

山の中に三つまたの木があると十二様の休み木といつて、ふだんからだれも伐らないで置く。これを毎月十二日の十二講に祝う。（赤岩） 十二様は山仕事をする人だけが祝う。（小雨） 山の神を十二様といい、山で木を伐る人が祭る。きこりの神で、餅が好きだといふ。山の神の絵図は、ほら穴の前に男神がまさかりを持ち、その前に山犬のいる図で、掛けになっている。（長平）

## 十三日

### 小正月飾り

二日の山始めに取つて来たスリデンボーを使って、小正月の飾り物を作る。ホダレは十寸くらいの木を、ホダレカキというなたでけづつてちぢらせ、ハナをかいたもので、松飾りを外した所に交替して掛けて置く。（赤岩）

ホダレはコメゴメの木の枝の長く伸びたのを一本そろえて、けずりかけを十二段、または十六段作って神棚に供える。「十六のオイヒラさんには上げる」という。また木と紙八枚をノシにたたんで水引きを掛け、神棚の脇に上げる。これも「オノウだ」という。（行事事といふ意味らしい）（小雨） ホダレは長いハナや短いハナをコメゴメの木やスリデボーの木で作り、お松飾りと引き替えて飾る。ハナをかくせんがある。（和光原） ハナはコメゴメの木か、カツボコの木をまくり上げたもので、方舟の神に供える。（長平）

タワラギはヌリデンボーを一本まるいて二束作り、お勝手の柱のシャタリの横木にまたがせて引掛け、一年中置く。翌年新しいと引き替えにはすして、マユ玉をゆでる時に燃やす。（赤岩） アワボ・ヒエボ・コメは木をけずつて短く切り竹の枝にさしたもので、肥い屋に立てられる。（赤岩） コメダワラ・ヒエタワラは丸木の皮をむいた物と皮つきの物とを一本ずつたばねて束作り床の間に飾る。小正月が過ぎると、うまやの上などに吊るして来年まで置き、小正月のマイ玉をゆでる時にそれを燃やす。（小雨） アワボ・ヒエボ（皮をぎざぎざにする）は長さ二十五cmぐらいで十二本作り、十四日年の晩にエビスさんの前に飾り、「二十日正月にかま神さんの所に吊るしかえて来年まで置く。来年マユ玉を煮る時に半年分だけ燃やすが、半分は残して新しい物とまぜる。（和光原） タワラは木の枝を長さ三十cmぐらいに伐りそろえ、依のように三ヵ所を荒縄である。その上に道陸神をのせて神棚の近くに置き、小正月のマイ玉などを進めておもりとする。その後じやまにならない所に置いて、次の年に新しいと交換し、古い物は燃してマイ玉をゆでる。（長平）

農具一式の目録は紙に、かま・くわ・すき・えんが・スコ・ほうちよう等の農具一切の名を書いて作り、流しのかもいにはつて置く。ふつうの脇が農具置き場になつてゐる。これは二十日正月におろして始末



堆肥上にさされた削り花  
アーポー・ヒーポー（世立）

都丸十九一 撮影

する。（赤岩）

の豊作を祈るものである。（広池）

#### 道祖神像

カツボクで男女一対の道祖神像とカカシ神をつくる。道祖神像は、カツボクを高さ十五センチほどに輪切りにしたものの上部の皮をそいで、その部分に、男神は角ばってきつく、女は丸く柔らかく輪画を描く。「奉納道祖神○○氏」というものもある。これ等は、道祖神焼の時燃してしまう。かかし神も同じ火で燃やす。道祖神のツエ、マキヅエもつくわら東にさして飾つてあったが、最近は紙に農具一式と目録を書いてかま様の所にはつて置くようになった。（小雨）

キジ車は小正月に子供が引っぱつて遊ぶおもちゃで、キジ（鳥）の形に木をけずり、車をつけ、くちばしの所に穴をあけて繩を結びつけ、引っぱれるようによつてある。（赤岩）

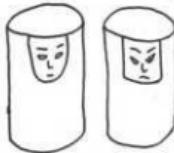
ノーキ

品木では正月十三日をノーキ（土地では農儀と書く）という。

カツボク（ぬるで）でハナをかいて、これをサクノハナ（作の花）といふ。それといっしょに、山桑にダンゴをさしたものを供える。

やはりカツボクで、男女一対の道祖神像、カカシ神をつくる。（品木）

広池ではマルデを正月六日に伐り取つておいて（この日に取れない場合は十二日目に取る）小正月にマルデの枝を十二本結んで、これにタワ、カマ等を作つてさす。これらを全部くるめてサクノハナという。農作物



カカシ神（品木）

カカシ神は、直径十センチ、高さ二十七センチぐらいいの丸木をけずつて、墨で顔を描いたり塗ると春のまき付け頃、畑の石の上などに出してそのままにしておく。小正月にカカシ神を祭る風習は入山地区だけである。（和光原）カカシ神は長さ十五センチくらいの丸木の皮をむいて筆で顔を描いたり、加々志神と文字を書いたりする。十四日年におもりをして供え物を上げ、一年中神棚にのせて置き、次の年に新しい物と取り替える。（長平）

マユ玉

十二日頃までに米やエエの粉をひいて、小正月のオメエ玉の準備にかかり、十一、三日にはオメエ玉をたくさん作つた。まゆの形、ホウシ玉やそろばん玉の形などを作るが、マイ玉は豆の縁起物だという。しかし玉神は別に祭らない。座敷には大きいボクにマイ玉をたくさん飾るほかに、床の間、エビス様の棚にも飾る。オシラサンには十六マイ玉を上げ

る。オシラさん（オヒラさん）は蚕神とは違う。また、米・アワ・ヒエのマイ玉を一箇ずつさした小枝を、松筋りのあった所に全部上げる。（赤岩）。マユ玉は丸い形が多く、マユ形十六箇、ホウシの玉やそろばん玉の形、俵の形等を作る。以前はふつうの家で粉五斗ぐらい、多い家では一石も作ってさしたものもある。今は三升も作って、あとで馬にくわしてしまう。ボクはヤマツカ（ヤマツカ）の木を使い、しだれる程いいといわれ蚕がよく当たるようにうんと作った。座敷に飾る外に、小さい枝にさして神々にも上げる（小雨）。マイ玉だんごはトウモロコシやチョウセンヒエの粉で作って、山入りの時取つて来たタンゴボヤにさす。十六だんごは特別にマユ形を作り、蚕神に供える。（長平）

#### 十四日

##### 十四日・小正月

年取りには大年・六日年・十四日年・節分（セチブ）年等がある。十四日の年取りには米の御飯をたいて、できるだけごらうを食べる。トピックラ年といつて、早く年を取りこする。（小雨）十四日の晩早く寝ると白がになるという。（赤岩）年取りの晩に火が絶えれば、新規にもやすのにマメ木でたきつける。（和光原）十四日にはマイ玉をゆで、御飯を神様に供える。（長平）



初 絵（引沼）

正月に縁起のよい絵を売りにくる。

井田 安雄 撮影

かないと、そのお膳を家中に分配して食べる風習もあった。（赤岩）便所の神はオヒガミ様・ウサンミヨウ様といい、元旦に初絵売りが絵を持ってくる。大変きりょうのよい人できれい好きだったから、いつもきたない、きたないといつてたので、便所の神にされたという。きれい好きの神さまだか

ら、便所でツバキをし

てよごしたりするなど

ちが当たるといわれる

（小雨）便所神は初の絵を売りが女

りに来たが、名は不明。十四日に木の枝に

に木の枝に

マイ玉をさして、ハナといっしょに供える。（和光原）大年や十四日年に便所の神にも供え物をする。十五日にはだんごを上げる。以前は春過ぎの時、御幣束を切って上げた。女神で片手のない絵を初絵売りから買つてはつて置いた。（長平）以前は便所に紙を落とすと、ねり肥えを作る時に種ものが生えないから娘がられた。それでオガラで尻をふいて備え付けの箱に入れて置いたので、便所にはオガラの新しいと使ったのを入れる箱が二つ置いてあつた。（小雨）便所の渡り板の上にネコ石という直径十五センチぐらいの石を上げて置く。このいわれ

#### 便所 神

便所には各年取りの晩に燈籠を上げる。初絵売りからウスサンミヨウ様（お諭訪明神？）の絵を買って便所にはつておく家もある。家によつては年取りの前の晩おかみさんのお膳を作つて女衆が便所に供えて年を取らせてから、家で食べて年を取るとお産が無事にすむし、かぜもひ

は、昔ある家のおかみさんだか嫁さんだかが、便所に行こうとすると、ネコがついて来て追い返しても離れないで、且那が怒って刀でネコの首を切ってしまった。そしたらネコの首が天井に飛んでそこにいた蛇を食わえて落ちて来た。ネコが飼い主の急を救ってくれたのである。それ以来ネコを祭るためにネコ石を置くことになったといわれる。（小雨）

### 團子正月

品木では小正月を團子正月ともいい、マイダマ（麻糬）を山桑の木にさして、花といっしょに飾る。カザリカエという。これはなるべく早い方がよいと言う。

十四日の晩にはツツガユを行なう。ヨシを十二本、なべの中に入れて、いっしょに煮て、中に入る米粒の多少によって、豊凶を占う。これは家々で行なう。

十五日朝は小豆がゆ。カツボクでカユカキ棒をつくり、これでかゆをかきまわし、われ目に入る米粒が多いほど、豊年だという。（品木）

### オソーゼンサン

カマドのわきに祀ってあり、正月に餅、御飯を供える。大正月には、カン・コブ・イワシ等を供える。小正月にはおマイ玉を供える。（広池道陸神焼き（ドンドン焼き）（十四日）

品木では、十四日、毎戸から大人たちが出て、川原に円錐形の小屋を建ててる。子供たちはかたわらに小さいのを建て、この方から先に火をつける。夕食後、各戸そろつたところで火をつける。人々は燃えさかると、農年だ、満作だ。

を口々にくりかえし唱える。厄年の者は、みかん、菓子などを參會者に配る。この火でダンゴを焼いて食べると風邪をひかぬという。またツエはへ除けだといって、火にあわせただけで家に持ち帰り、適当なところに置く。特にどうすることもない。このあと鳥追いとなる。

田代原部落では、小正月のハナ・タワラは作る家もあるが、作らぬ家もある。鳥追いはやらない。正月十三日にはノーロシの木、カツボク、タ



（和光原）  
どんどん焼き

都九十九一撮影

ルミの木を切つて、道祖神男女二体の顔を描いたり、字を書き、カカシ神は一体の顔を描いて神棚に置く。十五日の夜、ドンド焼きで、木像道祖神を焼いて置いてくる。村のはずれにオノベヤ（門松など持ち寄って積み上げたもの）を作つて燃すのであり、石像道祖神はない。赤岩では村中のおとなや子供が出て、十四日の星過ぎに、学校の向こうの広場に大きな小屋を作る。三本の柱を組んで横木を結びつけ、お松集めして来た松飾りを付けて仕上げるが、中へはいれない。夜火をつけて焼く。子供は木の枝で木刀を作つて焼いたりする。厄落しをする人はこの後、帰り道の三本辻でミカンをまぐ。男二十五才、四十二才、女十九才、三十三才の人。赤岩では鳥追いはしない。小雨では十四日の朝、毎戸一人ずつ出で、お松を集めて回り、「道ロク神場作りに行くべ」ときそつて川原に集まり、オノベヤを作れる。三本の柱を骨組みにして、松飾りをアオキを作るよう細かくさして小屋を作る。十五日の朝ドンドン焼きで火をつけるが、その燃えていく中に道祖神を投げこんで焼く。道祖神はマルデの二またになつたところに、一方は男、もう一方を女として顔をかいて作つたり、別別に一本



荷付場の道祖神（天保14年）

近藤義雄 撮影

鳥追い行事は小雨が盛んである。十四日の夕方五時頃から若い衆が車にかねやたいこを乗せてたきながら、村の毎戸を回ってマキを三本ずつと、夜食のだんご（マイ玉）を集めめる。そのあとを子供や女衆まで総出になって村中が大変にぎわう。夜食のだんごはマイ玉だが、この頃はミカンや落花生を出す家がふえて来た。夜食だんごを集める時には次のよう唱える。

「チョウヤの夜食だんご、出ーしゃれ、出ーしゃれ。  
ヒーエのだんごいやーだ。キビのだんごもいやだ。」

米のだんごを出ーしゃれ、出ーしゃれ。

和光原では、道祖神は男女一体作って置き、十五日の晩オンベーヤでもやす。火が燃えている中に投げこんで「煙に乗って天に行け」という。道祖神のオンベーヤは十五の朝、子供や若い衆が松飾りを集めて作る。毎戸回って、「松持つてぐよ」と集めてくる。オンベーヤの中に書き初めを入れたり麦わらを寄せたりする。オンベーヤに火がついでから、焼いた炭で人の顔につけてするので、まっ黒にされないようにさわぐ。

長平では、道陸神は二またの木、または二本の木で男女一対を作る。顔をかく人もいるが、「道陸神」と文字をかく人の方が多い。作り方はカシ神とよく似ている。道陸神は兄妹でいっしょになった神様なので一本の木で作るのだといふ。十五日のオンベーヤを焼く時に投げこんで焼いてしまう。オンベーヤは若い衆が学校の前の広場にお松を集めて作り、十五日に燃やす。この煙にマイ玉をのせて家へ帰つて家中で食べるとなぜをひかないという。

鳥追い

鳥追い行事は小雨が盛んである。十四日の夕方五時頃から若い衆が車にかねやたいこを乗せてたきながら、村の毎戸を回つてマキを三本ずつと、夜食のだんご（マイ玉）を集めめる。そのあとを子供や女衆まで総出になって村中が大変にぎわう。夜食のだんごはマイ玉だが、この頃はミカンや落花生を出す家がふえて来た。夜食だんごを集める時には次のよう唱える。

「チョウヤの夜食だんご、出ーしゃれ、出ーしゃれ。  
ヒーエのだんごいやーだ。キビのだんごもいやだ。」

米のだんごを出ーしゃれ、出ーしゃれ。

リヤカーで燃料のそだまきを集めて来ると、若い衆は神社の境内にあるチョウヤの中や前庭でたき火をして、夜食を食べながら夜遊びてえさわいで鳥追いを待つ。

厄年の人（男二十五、四十二才、女十九、三十三才）はこの時にミカンを一箱買って、神社の拝殿から投げて厄落としをする。

夜がふけて一番鳥が鳴く頃（午前三時頃）からよいよ鳥追いが始まると。若い衆が車に乗せた籠やたいこをたいて鳥追いに村中を回り始める。一年交代に北から回つたり南から回つたりするが、再び村中が総出となり、鳥追いの赤いちようちんをつけてにぎやかに回る。鳥追いの唱えことばは。

「鳥追いだ、鳥追いだ。  
ありや だーがー鳥追いだ。  
ダイロクドンの鳥追いだ。  
(さーらばちっと追い申せ)  
(カールルートへさらぐりこんで)

サンドが島へ ホーイホイ ホイホイ  
「ホーイホイ」という時、赤いちようちんを上げるのでとてもきれいである。鳥追いが終ると、家に帰つて十五日の朝の祝いをする。

長平でも若い衆がオンベーヤを作る時、たいこをたいて鳥追いをした。だんごを集めて回り集まつて食べた。鳥追いの唱えことば。

「鳥追いだ、鳥追いだ。」

道陸神の鳥追いだ」

とくり返し唱えた。

下太子では、正月十四日の夕方ドンド焼きのときに鳥追いをする。参加者は小学校一年生から中学校三年生までの児童・生徒で、「長屋の夜食ダンゴダシヤレ、ダシヤレ」と各戸の前の道で大鼓・かねをたたきながらいう。そうすると家の人はメーダマを出す。チョーザ（元はお堂）は参加者のうち年長者の子供の家を順番なく借りるのであり、ここで各戸でもらったメーダマを分配する。そして年少者の子供を返してから鳥追いを始める。

大人がアキの方向を教え、その方に鳥を追う。大鼓・かねを一人でかづぎ一人でたたきながら「鳥追いだ、鳥追いだ、アリヤダガトリオリ柱・柱キツチ・シビキツチ・サンドコシマエ、ホーイ、ホーイ」と声を合せながら一回村を廻るのみである。

品木では小・中学校の全員によつて行なわれる。子供たちは、たいこをたたいて村中をまわりながら、

鳥追いだ、鳥追いだ。

次郎ドンノ、鳥追いだ

出一シヤレ 出シヤレ

ヒエノ團子ハ イヤダ

コメノ團子ヲ ダーシヤレ

と唱え歩く。もらしい集めた團子を、夜遅くまで食べながら遊ぶ。

十五日

アズキガユ

年男がイロリでアズキガユをにる時、若木を一、一本くべてあとはふ

仏様の正月

益の十六日は盆棚に、正月十六日は仏壇にオゼンダテ（オヒラ）をして供

える。（下太子）仏様にだけいい品物を供える日で、餅・野菜・おつゆ

の実（イセ・ハクサイ・トウフ）を煮て上げる。縁側には逆仏（頬のいの

いの仏）のためにお膳を作つて供えるが、ふつうの膳と同じに盛つてや

十六日

つうのたき木で燃やす。おかゆをケーカ力キ棒でかん回すが、別に唱え言や占いはない。この時、「田んぼにカラスがいるから、タベエチャならねえ」といつて、イロリに足をふんではないといわれる。アズキガユは全部の神々に回つて進ぜる。食べる時にはハラミバシを使うが、吹いて食べると、風が吹いて田んぼの桶がたおれるからいけないとわれる。（赤岩）カイカキ棒を一本作り、割れめに木ッバを少しはさんで置く。それでオカニをかん回して、米粒がうんとはいると豊年だという。カイカキはあとで家の回りにさしておくと、モグラが荒らさないという。アズキガユでアズキの食べ初めをする。（小雨）カユカキ棒を二本作りカユをかき回して、割れ目に米粒がたくさんはいると、今年は陽気がよいという。カユカキ棒はあると煙に立てるとして、すべての物のかかしになるので、作物を虫に食われないという。十五日の晩、ドンドン焼きのあとでカユ占いをする。若い頭が神社のチョウヤに集まつて、ヨシの棒にアワ・ムギなどと作物の名を書いて、カユを煮る中に入れ、米粒のついた量によって、今年の作からはアワ十分・ムギ七分などと占う。結果は紙に書いて村中に発表する。ハラミバシはあると煙に立てて置くとモグラモチが逃げるという。（和光原）アズキガユを煮る時にカユカキ棒でかき回す。カユカキ棒はカツボコの木でハナを作る時に、元を四つ割にして作る。神棚に上げておき、あとで煙に立てる

る。（盆の時にも同じようにお膳を縁側に出す。）これは神様の正月が終えたので仏様の正月をする日だから、懲役人も許される日で、みんなのんびりする。（赤岩） 仏様の前へ御飯を二膳作って供える。子供のヤブ入りなどともいう。（小雨） ガキの首も許される日で、休む。十六だんごを供える。（和光原） 仏様は別にかまわない。（長平） 千匹がゆはしない。（赤岩）

## 十八日

### 観音参り

七堂参りに男も女も行く。牛や馬のしつぽにこへいそくを付けて、觀音様の初参りに引いていく人もいる。（小雨） 昔は「七堂参り」といった。今でも牛や馬を使って働く人が、特に觀音参りをする。牛や馬を引いて觀音様を拝み、おさごを進せてくる。長野原ではお札を売っているので、それをうまやの入り口にはる家もある。（赤岩） 観音様にお参りする。今は馬がないので連れて行かない。（長平）

## 二十日

二十日正月の行事は別にしない。（小雨） マイ玉をゆでて食べる。

### （和光原）

### えびす講

えびす様が働きに行く日なので、家ごとにえびす・大黒を祭つてうんと働いてもらうようになる。そろばんや財産を進ぜたり、古い錢をさしにさして一升ますの回りに下げる供えたりする。アズキ飯や白い御飯をたきエビス盛りに高く盛り上げて供える。あとで分けて食べるが、娘子供にはくれるな、縁遠くなるからといわれる。（赤岩） 朝えびすで、えびす様がかせぎに行くので、朝アズキ飯を山盛りにした膳を作つて供える。その御飯はあとで、おとっさん、おつかさんで食べるが、子供に

くれるとわがままになるというので食べさせない。（小雨） おいべす講でえびす様を送り出す。（和光原） えびす様がかせぎに行くので、お高盛りにして供える。この御飯は若い衆が食べるとき遠くなるという。（長平）

おいべす講は一月二十日、十月二十日。えびす様はかたわらの神であるという。春は朝祝い。わらじを二足新しく作つて供える。秋は晩に御馳走。どちらもお金を入れて供えた。えびす様は、春仕事に出て、秋帰るということである。（品木）

## 二十三日

### 三夜待ち

和光原では旧正月二十三日と、十二月二十三日に三夜待ちをするが、それぞれ、初めの三夜さんとしまいの三夜さんという。もよりの家に「三夜待ちすべえ」と集まるが、男も女もまじり、女の方がやや多い。二十三夜の月が上つてくる夜中の午前一、二時ころまで、雑談しながら夜ふかして待つている。三夜待ちをすると、願いごとがかなうといふ。（和光原）

## 二十五日

### 天神講

もとは子供が宿に集まつて御飯を食べ、天神様にお参りした。（赤岩） 宿に米を持ち合わせて、とうふ汁にして食べる。「子供のオンバッコだ」といって、ままごと遊びのよにして遊ぶ。この頃、フキノトウを見つけながら次のように歌う。

「ジャオージケンケン ミズケンケン  
今出なきゃー 春になって

出られねえ 出られねえ

「ウドとフキは初物がない」から、いつでも出るといわれる。（小雨）

もとはチヨウヤでしたが、今はかわり番に宿に寄って、米・てんぶら・魚・菓子・錢などを集めて夜ふかしして遊ぶ。男の子のはのぼりに「奉納天満天神宮」と書いたものを、女の子は紙を切つて着物の形にしたもの

を供える。今でも宿に寄るが、字は書かない。(和光原) 以前は天神講で子供が宿に寄つて御飯を食べたが、今は宿に集まらない。ただ、子供が旗を持つて稲荷様へお参りに行く。(長平)

田代原では一月二十五日は寄合いで、役員の書替えがある。このとき百姓の取決めごとを決める。村の人の名前を記し、その頭に星を付けて置き、星の足りない人が別記オテンマに次々と出て行く。この日に前年の計算をして、残った星は翌年つとめるわけである。

## 二十七日

ケイヤク

一か所に村の人が集まつて、米を出し合い、しょうゆ飯を作つて酒を飲む。この時、前にはケイヤクといつて、役員の交替を行ない、総代の引きつきをしていたが、今は四月一日に役員の交替をする。(小雨)

諏訪神社祭り

昔は諏訪神社の春祭りで、屋台を引いて祝つた。男衆が長じゅばんを着て、おしゃりつけて行列を作り、おねりをした。(小雨)

## 二十八日

しまい正月

別に行事はない。(赤岩) 一日、二十八日をお三日(さんじつ)といい、アズギ御飯をたく。(小雨) 二十八日は遊び日ではない。(品木)

不動様

和光原では山本氏の先祖がショットで不動様をお祭りする。昔は移住するのに不動様をショットで歩いたらしく、山田氏の先祖も信州秋山の

見玉の不動様をショットで歩いたといわれる。(和光原)

## 三十一日

サマジュウダンゴ

ミソカダンゴともいい、旧十一月三十日にもする。ソベ、ヒエのだんごをカヤ四本に一個ずつさして、サマ(窓)にさして置く。それを子供が「サマジュウさしたかい」といつて競争でもらいに回る。虫封じに集めても食うものかという。(和光原) 旧十一月三十日と同じにする。ヒエ・ムギなどの粉でまん丸いだんごを作り、サマ(窓)にさすが、全部のトボーにさすことになっている。つぐ朝取つて焼いて食べる。(長平)

## 二月

次郎の一日

次郎の一日はしない。(赤岩)

川マグレ・川ビタリ(二日)

馬が川にまぐれないよう、ぼた餅を作つてカマ神に進ぜてから、なべのふたにのせて馬にくれる。その時「川にまぐれるな」という。川には別に供えない。十二月一日にも同じようにする。(和光原) ぼた餅を作つて觀音様に上げてから、馬にくれた。今は馬がないので、神棚に進ぜるだけ。(長平)

一月一日は馬の日だと言つて、神に供えたものは、馬、牛にくれる。キミ・アワ(今はアワと米の)ボタモチ。(品木)

## 節分

早く年を取つた方が鬼が来ないとか、煙に草が生えないといつて、午

後なるべく早く夕食をすませて、豆をまく。フタトコ年をとるものでないといふ。（品木） 節分。豆まきをする。福は内（二回）鬼は外（二回）交互にする（小雨）。豆まきの豆は三回いる。「福は内」と唱え豆をまく。（赤岩） 豆をまいて神棚に供えてから豆まきをする。（長平） ヤキカガシは作らない。（赤岩）

### 三角マナコ・鬼ノ目

豆まきの豆は紙に包んで、カヤを三角に折った物に付けて神棚に下げて置く。初雷が鳴った時に食べる。（赤岩） 豆まきの豆はおひねりにして、旧十一月二十四日のタイシシケーの時の三角マナコ（鬼ノ目）といっしょに、いろいろの火だなに進して置き、初雷の時食べる。次ぐ年まで取つて置く家もある。鬼ノ目は魔除けになるという。（和光原） 豆をいる時にはヨシの長いはしを三角形に折り曲げて三角バシを作り、それで豆をかき回しながらる。三角バシは豆まきの残り豆を紙に包んだのといっしょに、いろいろの力半様にしばりつけて置く。食あたりなどをあげたくなつた時や、初雷がなつた時に食べるといいわれる。三角マナコというのはこれとは別で、はやり目がはやつた時に、ウツギで一边が三センチぐらいの三角形を作り腰に下げたもので、はやり目にたからないといわれた。（長平）

### 事始め（八日）

一月八日。コトノモチといふことばがあるから、餅をいたんだらうが、いまは何もせず。（品木） ダイマナコや針供養はしない。（赤岩） 八日餅はしない。誕生日に餅を配るから。（小雨）

### 初午

#### 屋敷稻荷

赤岩では、マイ玉を作つて神様に上げる。屋敷稻荷にマイ玉と魚を進ぜる。二の午は初午が都合のわるい時だけする。もとは一月十五日に、

稻荷神社のお祭りをした。赤岩の安原マケでは屋敷稻荷を一ヵ所に寄せて、明治ごろまでは初午に本家に集まつて祭つてた。現在では六戸の回り番で、会費を毎戸百円ぐらいたし出し合つて集まつて拝んで来る。秋は神社の祭りの時いっしょにする。初午の祭り方はますの中にわらを折つて入れ、米とアワのマユ玉を盛つて神様に供える。

小雨ではふつう屋敷稻荷は各戸にある。赤飯を作つてアブラゲやトウブを供えたりする。また、マイ玉を桟にワラをして入れ、神棚に供える。中村組では七軒で本家の屋敷稻荷を祭つてゐる。市川組でも本家のをいっしょに祭る。分家から分家した人も大本家の屋敷稻荷を祭る。この組は分家には屋敷稻荷がないので、みんなして本家の先祖さんを拝むことになっている。マイ玉を三個、竹の枝にさして、本家の屋敷稻荷に上げてくる。正月の時もマイ玉を三個、三つまたのボクの枝にさして、ハナを咲いて、本家の屋敷稻荷に供える。（小雨） 稲荷さんに御飯、てんぶら、イワシ、お酒を上げる。タワの木を燃してマイ玉をゆで、カイコが当たるようにタワの木の枝に二つ三つさして、稻荷さんに進せる。和光原では稻荷様は山本組、山田組、霜田組の三組ごとに祭つてゐる。もとはそれぞれの本家の稻荷様だったが、今は組の稻荷様についてて、これを屋敷稻荷といい、各自の家にはほとんどない。年二回（一月と十一月の初午に組ごとに集まつてこの稻荷様を祭つて）いる。なお、氏神様は別にあって、山本組と霜田組（マケともいう）は八幡様、山田組は諏訪様、本多組は熊野様と決まっていて、前の一社は八月二十七日に、後の一社は旧元日に祭る。（和光原） 長平では初午は馬の神といつしょに八月二十七日に祭る。（和光原） われ、マイ玉だんごを作り重箱に入れて神棚に供える。屋敷稻荷はある家とない家とがあり、全然お祭りしない。（一月も十一月も。）また、特別に山崎マケの稻荷様といふようなものもない。ここで氏神様といふのは村の鎮守で、天狗様のことである。昔は村で組頭（回り番）の家に寄つて酒を飲んだこともある。オシラ様も全然祭らない。

## 春祈禱

一月三、四日ごろ春ギトウをする。神主が来て村の出入り口にシメを張つて魔除けの札を下げる。これが一年中の厄病除けになる。昔は一軒回つて拝んで、家の中へも魔除けの札をはつた。神主さんが拝む時にはネブリアミといつて、居ねむりしながらわけのわからぬような拝み方をする方がよいといわれた。それは神様が乗り移るからで、神主さんはそうに拝んだ。（小雨）

## 親振舞（七日）

一月七日。春先きになつて、食べるものが無くなる時なので、家から出た子供たちが、親に御馳走してくれる日だという。ほんの家だけです。

親ぶるまいは春の二月の適当な日を選んでする。物が取れない時期なので、子が親に食べ物を作つて食べさせる行事である。子ぶるまいは秋の十一月ごろで、物がうんと取れた時なので、親が子供を呼んで食べさせてやる。（長平）

## 三月

### 節句（三日）

初節句には実家からひな様をもらう。節句の札に嫁ひこが実家へお客様に行く。古くなつたひな様は神社に納めるが、別に身代わりに出すことはない。（赤岩） ヒシ餅を作るが、今は新屋でセチ草が出ないから草餅は作れないので、ノリ餅を作る。また、サクラの花のようにとサクラ餅（しょくら餅）をたく。（小雨） 餅をついてひな様に進せるが、ヒナメシといふことは聞かない。（和光原・長平） オヒナ餅と称し、正月同様にして何もそえずに、親や世話をなつた人に届ける。（品木）

## 蚕神

与喜屋のアラ神さんの前には、荒神さんが蚕神だったので、三月十五日にそこからお札を受けて来て赤岩で別に祭つた。その時に蚕道具の市が立つた。（赤岩）

## 彼岸

### 天道念仏

入りには仏様に何か進せる。寺から坊さんが回つて来てお経を上げる。中日には村の上下二か所（毘沙門堂・東窓）で天道念仏をした。年寄りが出て朝から日没まで、長いジユズを回しながら鉢をたたき念仏を唱えた。「ナミアミダブツ、ナミアミダブツ」と節を付けて歌うように唱えるだけで外の文句はいらない。村から赤飯やだんごが出るので、子供も集まつている。アキロには仏様に上げてある餅やだんごを持って墓参りに行き供えて来る。だんごはうどん粉やソバ粉などで丸く小さく作る。オシンコにする家もある。（赤岩） 彼岸は仏様のお祭りで、てんぶらを上げたり、餅やだんごを作る。入りには墓参り、中日には仏様が地獄に帰る途中的ナカノボリだというので墓参りをする。（小雨） 中日には親音堂に集まつて大きなジユズを回してお念仏を三十分ほどやり、その後村中の毎戸を回つてお念仏をした。（和光原） 仏様に御飯を供えるが、だんごは作らない。なお、彼岸にはいつてあくまで死んだ衆や、お盆のうちに亡くなつて葬式される人には、頭にメンバをのせていてやる。それは彼岸や盆には仏様がこの世に出て来るのに、反対に死んであの世に行くので、仏様に行きあつた時「ニシヤ、何行く」と、仏様から頭をはたかれるので、かわいそだからかぶせてやるのだ

## 四月

春祭

赤岩神社 (十一日)

昔は二月二十四日が春祭りだった。神社では女の子四人が舞子になつて舞つたが、神樂はしない。獅子舞は子供がやる。もとはダシや仮装行列が出てにぎやかだった。諏訪様には春祭りはない。(赤岩)

諏訪神社 (十日)

昔は正月二十七日ごろの都合のよい時と、八月二十七日にお祭りしれた。(小雨)

大神宮 (十六日)

和光原の鎮守様で、地芝居をした。手製の大道具、荷籠などが保存されていて、戦時中二、三年休んだだけですと統けてやっている。(和光原)

天狗様 (十三日)

長平では祭りの前にチョウヤなど掃除して燈籠をはつたりする。昔はオコモリをしたが今はしない。祭りには仲間(親類)を呼んで、赤飯やすしなどの御馳走をする。燈籠は大三、小三十も作り、それにおめでたい文句を書いて上げる。天下泰平・五穀豊穣・子孫繁昌・家内安全などがよく書かれる。この日は男衆が集まつて御神酒を飲みほうつい飲む。昔は神主も来たが、今は来ない。(長平)

お祭りの日

縁日は、四月十七日が日光さん。(これは小さなホコラがある。)

四月八日が温泉薬師と弁天。これは花敷の温泉の対岸の岩の上にある。

年中行事のお祭りは三月三日のお節句、お盆、お彼岸等で、いつも赤飯、おそば等何か変わったものを食べた。(引沼)

オクンチ、中ノクンチ、末クンチなどというだけで、別に何もしない。(赤岩)

赤岩では寺で大般若經をするが、家では別に何もしない。昔は櫻名神社に代参が出た。(赤岩) 別にしない。(小雨)

## 五月

八十八夜 (二日ごろ)

赤岩では寺で大般若經をするが、家では別に何もしない。昔は櫻名神社に代参が出た。(赤岩) 別にしない。(小雨)

節句 (四・五日)

ヨモギ・ショウブ

五月四日の夕刻、ショウブとヨモギで屋根をふく。夜ショウブ湯に入り、ショウブ酒を飲む。今夜は、女の夜だといつて。(昔話の項参考) (品木) 新曆では、ヨモギやショウブはまだ出ないので、旧五月四日に取つて「屋根をふく」といつて、軒に飾つたり、ショウブ湯にヨモギ・ショウブを入れたりする。(赤岩) 四日の夕方、ヨモギ・ショウブを取つて来て軒に飾るが、これを屋根ふきだといふ。ヨモギ・ショウブは神棚にも上げるし、おろしにも入れてはいる。ノミに食われないと。(小雨) 四日の夕方、ヨモギ・ショウブで屋根をふき、ショウブ湯を立ててヨモギ・ショウブを入れる。カマ神様にもヨモギ・ショウブを供える。(長平)

ヨモギ・ショウブの書話

昔、鬼がおかみさんに化けてある家に住みこんでいた。且那が山へ仕事に行つて留守になると、そのおかみさんはおむすびをいっぱい作つ

- 127 -

て、頭の中に拾いこんで食べていた。且那がおかしいぞと思つて、ある時風呂おけの中にかくれてそれを見つけて、「思わず『見たぞ、見たぞ』と言つたら、おかみさんが『何だ、そこにいたのか。』と風呂おけごとつかつて、山奥へどんどんはいって行つた。且那はやつとのことで木の枝につかまつて逃げ出し、ヨモギ・ショウブの生えている中にかくれていた。そこへ鬼が見付けに来て、且那がかくれているのを見付けたけれども、ヨモギ・ショウブのために近寄つてつかまえることができなかつたという。そこで今でもヨモギ・ショウブを魔除けにしているのだといわれる。(小雨)

#### 八日節句 (八日)

こいのぼりは八日節句をすませてからしまう。(赤岩) 八日節句はあと節句で、ヨモギ餅を作る家もある。(小雨) 贈答には赤飯を重箱につめてやる。(品木)

#### 旧四月八日

おしゃか様はしない。フジの花も飾らない。(赤岩、長平) もとはヤシヨウマと云つて、シンコ餅の中に塩と豆を入れて長くしたものを作り、寺でくれた。(小雨) もとは仕事を休んで、榛名神社に代参に行つて、嵐除けのお札をもらってきた。山からフジの花を取つて来て、神様に進せておく。(和光原)

#### オボヤシナイ (旧四月八日)

長平では、川向こうのコイセ(越瀬)の上の小さい岩穴の前へ子供を連れて行つて、アズキ飯をたいて食べさせた。これは、そのころ山犬が子を育てる時期なので、飯を煮て山犬の子を養つてやるというわけである。(長平)

和光原では毎月十六日に戸倉さんの念仏をする。これは長野県戸倉の馬頭観世音を祭る行事で、回り番の宿に戸倉さんの掛け軸を掛け、子供が「戸倉さん拝みに来てくれ」と回り歩いて人々を集め。宿で大きなジユズの玉を回しながら念仏を唱える。(和光原)

## 六月

#### コガネノツイタチ (一日)

六月一日。大金がないから小金で祝うので、コガネノツイタチと言つてゐるが、決まつた御馳走はない。(品木)

#### 田植え祝い

五月三十日ごろには田植えをする。田は村全体で二十町歩ぐらいある。田植えの終えた時に赤飯をぶかしてお祝いをする。苗一束持つてていく本すつかに分けて、神棚に進せたり、赤飯を親類に配る時付けてやつたりする。サノボリ、マンガ洗いなどとはいわない。(赤岩)

#### 甘酒祭り (十六日)

六月と十一月の初めに新穀に感謝して新嘗祭のように行酒祭りをする。六月に麦の収納が終ると、村中がチュワに集まつて甘酒を飲んで新穀を祝う。甘酒祭り宿が回り番で甘酒を作つて置き、鎮守さまには神様の分を供えてから、人間が飲み始める。甘酒の原料は麦に米コウジを入れて作る。秋の甘酒祭りは田畠の作物をすっかり取り入れ、麦まきが終った十一月の初めごろする。甘酒の原料にはヒエを使うが、あのやり方は同じである。ここ四、五年はやらない。(和光原) 六月十五日。新しくなれた新妻が甘酒をつくる。村中で大樽につくつて、みんなよつて、神々に供えてから呑む。秋にもあった。(品木)

## 戸倉さん念佛

(毎月十六日)

## 七月

半夏どん

半夏どんは七、八丁歎をくじく（折る）ほど働いて、働きすぎたので、半夏の日にはあまり働かない方がいいといった。今は仕事を休まないが、むかしは少し仕事を休んだ。半夏どんは、ねぎばだけでぶつたおれたので、この日はねぎばだけへ入るなどもいう。（品木）

はげんぼう。この人はいいかんきつい坊さんで、めんぼう（めんをうつもの）で一日に薪を八だん刈ったという。（馬に六束つけたものが一頭）（京塚）

農休み（二十五日）

養蚕や麦の収納がすんだところで、男衆が神社へお参りして、一人五円ぐらい出し合って酒を飲んで遊ぶ。（赤岩）

八海山（三十日）

七月三十日。梨木では、上の原に、老若男女村中の者が集つて、ヨツビテ一火をもして騒いでいた。その火が八海山に飛んで行くと言われた。

## 八月

カマツブタ（一日、旧七月一日）

七月一日。やきもち。（品木） 仏様が盆に出て来る日で、マンジュウを作つて進せる。（赤岩） 新ムギを粉にひいてマンジュウを作り、

仏様に上げる。（小雨） オカマブタヤキモチは麦の粉をだんごに丸めて、いろいろの灰の中で焼いたもので、アンは入れない。今はふかしたものが多い。仏様に上げたあとで、お茶がしに食べる。この日は仏様がお盆に出かけてくる日で、地獄のカマのふたにカマブタヤキモチを投げつけあけて出で来るという。仏様は一日に出かけて、七日に天の川を越えて来るといわれる。（和光原） カマブタヤキを作つて仏様に上げる。これは小麦・ヒエなどをこねてアソコを入れ、焼いたりふかしたりして作る。仏様が地獄のふたにこれをぶつけて、ふたをあけて出るという。（長平）

カマブタセック。旧七月一日のこと。むかしの人は、石の戸のかまぶたが開いて、先祖様が出てくるという。この日、カマブタヤキモチとうのを小麦粉でつくる。（小倉）

オカマブタ（湯本貞司氏書翰）

1 部落名 六合村大字日影小字中沢

2 名称 おかまぶた

3 とき 八月一日、午前十時位より午後三時半位まで

行事の様子 小中学校の子供（本年は十五人位）が、米、醤油、みそ、じゃがいも、きゅうり、いんげん、卵、かんづめ、ジュースなど、食器として小さい釜、小さいなべを下の川原まで持参し、砂と石で即席のヘッツイ（本年は女組のヘッツイ一つ、男組が三つ作つた。）飯が炊けると、めい／＼小さじで釜の飯をすくつて食べる。煮つけもの（野菜等）も手製のハンで、各自なべからとつて食べる。本年、女の子は、茶わん持参して汁もこしらえて食べたとのこと。飯と煮つけ物が余るので、二時頃に又食べる。間の時間は、川原でうたう、遊び、天気よく暑い時は川遊び（水泳）もする。

5 昔からやってるとのこと。起源はよくわからない。

## 道がり

七月一日には部落の受け持ち区域だけの道の草かりをする。部落行事である。一戸一人ずつ出て来る。(小倉) 旧盆の前に前戸から出で、部落から部落の間の道の草を刈って、仏様が通りやすいようにした。(長平) 墓そうじは十二日で、墓地へ行く道の草かりなどする。(赤岩)

タナバタ (七日)

家だけのミワイで、かならずタナバタヤキモチはつくるが、特別のかざりはせず、また村内の道刈りをする。(品木)

仏様が出でているから、「七回食つて、七回水を浴びる」といつて、川が黒くなるほど子供たちが出かけてさわいだ。タナバタ飾りは縁側の天道柱に結んで立てるが、別に何も進ぜない。タナバタ飾りは流さないで、菜や大根の葉に立てて虫除けにする。墓掃除も特別にはしない。

(赤岩)。「七回食べて、七回水浴びをする日だ。」といつて、ちがつた物を七回食べて、子供や若い衆は須川へ水浴びに行く。(小雨) 和光原ではタナバタ飾りは全然したことがない。水浴びも特別にはしない。ただ仏だんに供えるためにぼた餅を作る。(和光原) タナバタにはタナバタ様が畠で会議をしているから、十時前には畠にウリもぎやフルウ(インゲン)もぎにはいってはいけないという。雨に関する伝えはない。(長平)

## 盆

盆迎え (十三日)

寺へ盆迎えに行き、カドで迎え火をたく。(赤岩) 寺へ盆迎えに行き、ふつうの人はセガキをし、年忌の人は塔婆を書いてもらって来る。カドで迎え火をたく。この時に唱えることば。

「ジイサン、バアサン

この火の燃えるのに、おいで、おいで」(小雨)

十三日に墓掃除をし、道がりをしたあとで、夕方迎え火を燃す。迎え火は墓地の入り口にあるホドから墓地までの間を、麦わらのたいまつを持って行ったり来たりする。すなわち、麦わらを一束持つてホドまで火をつけて墓まで運び、また次の麦わらを一束持つてホドまで行き、火をつけは墓へもどることを何回もくり返す。ホドは村の共同墓地の入り口に丸山になっている所で、石のカリウトが埋っていると伝えられる。迎え火を運ぶ時の唱えことば。

「オジイサン、オバアサン

この火の明かりで、おいで、おいで」(和光原)

長平でも十三日までに墓掃除する。迎え火は長平と根広の村境まで行って、両方の村から集まつて麦わらを持ち寄つて燃した。その時の唱えことばは

「オジイサン、オバアサン

この火の明かりで、おいで、おいで」

と唱える。そこから麦わらの小さい束に火をつけて、たいまつがわりにとみしながら山道を家まで帰る。夕方、そんなに暗くなくとも、子供が氣散じがつて(おもしろがつて)麦わらに火をつけて、次々に取りかえながらともして来る。(長平)

お盆は昨年までは旧暦であったが、今年から新暦となつて、八月十三日夜方子供が村外れの入口でムギガラをともす。お墓までは行かないし、仏迎えの火も燃し放してある。このとき「おぼんさん、この火のあかりできえておくれ」という。(田代原)

盆むかえは旧七月十三日の晩、子供がお墓で、むぎわらのかぶり火をたく。かぶり火をたよきながら、「じいさん、ばあさん、この火のあかりでおいで、おいで」とどなりある。(小倉)

七月十三日に墓そうじをする。そして迎え盆。往還へ出るところ(カドグチ)から迎えてくる。麦わらをもして

「ジイサン バアサン

コノ火ノ アカリデ キテクレロ」

盆 棚  
などと唱える。(品木)

三、四十年前までは、沼尾や荷付場では盆の十五日の夜、庭にネコ  
(むしろの一種)を敷いて、月夜の庭で夕飯を食べていた。(小雨)

盆送り

盆棚は仏だんと別に作り、台に新しい盆ござを敷く。位はい・野菜・

水・線香等をのせ、ナスやキヌウリで馬を作つて供える。(赤岩) 盆

棚は新しく作り、前方にソウシ(シラカバ)の枝を二本立て並べ、ムナ木を渡してそれに十三日のうどんを掛けれる。これは仏様の力チン調といつて、特に送り盆の時のうどんを取つておいて、ムシ(胃散過多症)が出来る時に食べるとなおるという。高燈籠や提燈などは飾らない。(和光原) 盆棚はモミジやタリの枝で飾りつけ、仏様を出して拝む。ウリで馬を作る。(長平) 新盆も同じ棚に祭る。(和光原)

盆棚は仏壇を利用するので、特定なものはない。仏壇の前両側に、モミジ(カエデ)の枝を立てて、これにミソハギ・キヨウなどをそえる。上方に、横にモミジの枝をつけて鳥居状にし、仏様の力チンナワだといって、うどんを下げる。(品木)

盆 礼

新盆も墓まで迎えに行かず、前同様。ただし「仏様を拝みにきました。」などと唱つて挨拶に行く。(品木)

盆には自家の先祖のお盆様を拝みに行き、くだ物やかしなどを上げて来る。(和光原) ふつうの盆の時も、自家の盆様を拝みに分家が寄つた。「盆様拝みに来させてもらつたよ」と挨拶する。(長平) 新盆には親戚から新盆さま拝みに来る。(長平)

盆様には御馳走を作つて供える。次のような昔話がある。昔、ある人が茶屋で休んでいると、六部がそこを通りかかる、「盆で家へ帰つたのに、おらが家は嫁は何も作つてくれなかつたから、子供をいろいろへ突つこんで来た」といつて通り過ぎたのが耳にはいつた。急いで家に帰つてみたら、子供がいろいろにはいつてヤケドをしていたという。それでヤケドをするのは仏様を粗末にするからだといわれる。(小雨)

家のケードで送り火をたくが、墓や寺へは行かない。送り火の時の唱えことば。

「ジイサン、バアサン

この火の燃えるのに、お帰り、お帰り」(小雨)

無縫仏はお盆様といつしょに祭るが、十六日には縫がわにお膳を作つて上げる。送り火はカドでたく。(赤岩) 和光原では送り火の時も迎え火の時のように、子供が麦わらの火を持って墓からホドへとんだるくが、その時の唱えことばは次の通り。

「オジイサン、オバアサン、

この火の明かりで、お帰り、お帰り」(和光原)

長平の送り盆の唱えことばも和光原と同じである。(長平) 「ウリ

ウマに仏様が乗つて来る」といわれ、送り盆にはウリの馬と盆棚のソウシの枝や花、くだ物などいつしょにお墓へ持つて行く。(和光原) 新

唐盆になつてから、八月十四、五、六日に盆をする。(和光原)

無縫仏は、まだひとにならないで死んだ子供のことでおとなと同じに埋める。(小雨)

十六日は送り盆。迎え盆同様。ただし唱え」と「キテクレロ」は「イフトクレ」(品木)

お盆送りは八月十六日の夕方、火を燃して「おぼんさん、この火のかりでかえつておくれ」という。(田代原) 盆おくりは盆のおわりの十六日の夕方、お墓へ行って「じいさん、ばあさん、この火のあかりで、おかえり、おかえり」と、盆むかえと同じように子供がする。(小倉)

盆・彼岸の死者の扱い  
盆とか彼岸に亡くなつた人は、棺に入れるのに、頭にマルメンバをか

ぶせた。地獄のかまのふたが開いて、御先祖様が家へ帰つてくるというのに、お前はなぜ来たといつて、先祖に頭をたたかれるというので、マルメンバをかぶせる。(小倉) (春の彼岸の項参照)

## 十五夜(旧八月十五日)

早く上がる年は実のりがいいから安心して上がるという。春は早く来る年が実のりがいいという。(赤岩)

## 九月

### ハツサクの節句(一日)

嫁・むこの泣き上げ節句で、一年中おごとして泣いたしまいだとう。(小雨) もとは嫁が実家へお客に行つたが、今は忙しくていけない。旧八月一日で、「ハツサクの節句になればタルミの実がえむ」といつて、子供がタルミを取る。(和光原) 前にしたが、今はしない。(長平) 嫁むこの泣きじまいでの、お客様に行く最後の日。(赤岩)

八月一日。ミイワイ程度で、特に贈答等なし。(品木)

### 二百十日祭り(一日)

九月一日。酒、さかなをそろえて、区長宅に村中寄つて祭る。最近は蕪の集荷がこの日になった。(品木)

神社に集まつてお祭りし、酒を飲む。(赤岩) 神社に集まつて、一

升もたける鍋でしょゆ飯をたき、酒を飲んでお祭りした。(小雨)

村全体でおチヨウヤに集まつてお神酒を上げる。大風が吹く時には風切り鎌を立てるが、冬の風に対しても台風にはあまりいわない。

風切り鎌は風の吹く方向に向けて、鎌をさおにいわいつけ二階のはなから屋根にさしかかるぐらい高く立てたり、庭に立てたりする。風を切つてしまふのでこちらに吹いて来ないという。(和光原) 大荒れの時には、夏でも冬でも風切り鎌を立てる。(長平)

彼岸・社日

彼岸は春と同じに祭る。社日にはもと地神講があった。秋に地神様が

イモ・クリ・菜・大根をお膳にのせて縁側に進せる。ススキ・カヤは別に立たない。菜・大根の年取りという。(赤岩) ボタ餅を皿に盛り、菜・大根・ヒニの穂・アワの穂・リンゴなどを筈に入れ、ウルシの葉とススキを徳利にさして縁がわに出したり、庭に籠を伏せてその上にのせて出したりする。十五夜大根といって菜・大根を必ず上げる。子供が「お月見おくれ」と回ってきた。(小雨) 大根・枝豆・トウモロコシ・ミョウガ・そぞ等をお盆にのせて庭先に台を出して進ぜた。この晩は誰がとつてもいいというが、その割に取られはしない。子供が持つて行つて家で焼いて食べたりする。だんごやまんじゅうなどは進ぜない。

十五夜に晴れると、大麦がよく取れるという。(和光原) トウギミ(トウモロコシ)・アワの穂・ヒニの穂・大根・ミョウガ等七色の作物をお膳にのせて、庭先に台やまきを出してその上に供える。ススキを飾り、食べ物を上げるが、まんじゅうは作らない。子供が家々を集めて回り、トウモロコシなどを友だちの家に寄つて焼いて食べたりする。(長平)

八月十五日。夜は赤飯。団子つくづく、すすき等供えず、庭の高いところに膳を出して、その上に栗糖・稗穂・唐糸・枝豆・大根等を載せて供える。これを子供たちが、自由にとってよろしい。しかしそれは食べられるもので、たべるだけのもの。(品木)

シヨテノクンチ

九月九日。ミイワイ程度で、特にきまつた食習なし。むかしは、甘酒祭りがあつて、それは新らしい神で、村中で祝つたものだが、今はなくなつた。(品木)

十 月

神無し月

十月は神無し月で、一日には神様が出雲大社へ縁結びに行く。荒神様ともう一人だれかは、まかない役なので九月二十八日に「足先に行つて」という。諏訪様だけが行かないわけは次のようにいわれている。ある年に出雲へ神々が集まつた時、蛇体の諏訪様も参加したが、「しつぽはまだ諏訪にある」と言ったので、神々から「あまり大き過ぎてじやまだからもう来るな」とことわられてしまった。それから以後、諏訪様だけは出雲へ行かないことになったという。（小雨）

十三夜（旧九月十三日）

大豆の青いものをハジキ豆（枝豆）にして上げたり、カキ・クリなどを縁側に供える。オマルといつてうどん粉の大きなだんごを一つだけ作つて供える。これは翌朝うどんのように切つて、おつゆに入れゴタジル（キリコミ）にして食べる。（赤岩）ぼた餅をお盆の上に盛り、庭の籠を伏せた上に供える。ウルシとスキを飾る。（小雨）月見といわれるが、余り進ぜ物はしない。十三夜の月がよく見えれば、来年の小麦がよく取れるという。（和光原）お月見というだけで何もしない。

十一月

川マグレ餅（一日）

子供が川でさらい取られるというので、餅を川へ投げたら、カツバが餅を食べて子供を取るのを忘れたので、餅をついて川へ供えることにな

った。ぼた餅の家もある。油餅はしない。（小雨）和光原では二月一日と十二月一日にする。（和光原）川ビタリ餅・ツジュだんご・油餅はしない。（赤岩）カーラリ餅は十二月一日。神々に供えた餅は馬や牛にくれる。（品木）

秋祭り

赤岩神社では、十一月一日に村の氏子が神社に集まつて初穂を上げて拝む。だしなど引かない。小雨の諏訪神社では、もとは正月二十七日または都合のよい日と、八月二十七日が祭日だった。今では四月十日と十一月二十四日が祭日になっている。もとは甘酒祭りで、コウジ一升、ムギ一升の割合でまぜて、八斗おけに二本も作ったが、今は甘酒を造らず、赤飯を作つて遊ぶ。和光原では十一月の初めに、麦まきが終つてから甘酒祭りをした。長平では秋祭りはしない。

子振舞

十一月七日。親が子供たちに御馳走してくれる。（品木）

秋あそび

秋のマキコミがすんだら、子が思い思いのものを持って、親の所に行く。（品木）

十日夜（旧十月十日）

供え物

トオカンヤドシといつて、「秋の年取り」とされる。こなし仕事がすんだところでお祝いする。餅をついて、そのうち一臼だけはまるくして「お姿にのす」といい、臼ぬきで上げ、糞にいっぱいにぐつたりとひろげて供える。（翌朝それを切る）。お供え餅を上げる家も多いが、餅はアワでもヒエでもかまわない。屋敷稻荷には何でも一番先に上げる

が、特にこの餅をつく時は、「フカシ」といって、ふかしたての御飯のうちに茶わんに盛つて上げる。トチガエロ(ヒキガエル)の話は別にな。い。(小雨) 緑がわに餅を供える。山の神は祭らない。(赤岩) 月見というだけでも進ぜない。餅はつく。(和光原) 餅は神棚に進せるが外には進ぜない。(長平)

#### トオカンヤ・ツト

ミョウガのからを入れて、わらをたばねたトオカンヤを作り、子供が家々の庭をたいて回る。よくたけばモグラが通さないとい。う。家々では子供に餅をくれるので、持ち寄つて焼いて食べる。(赤岩) 子供たちはわらの中にミョウガのからを入れてツトを作り、地面をたいて回る。その時の唱えことば。

「十日夜、十日夜、

十日夜は、いいもんだ。

朝ソバ切りに、

夜餅食つちや、腹だいこ。」

子供がツトではなく、モグラが土を起さないといわれ、家々では子供にはたいておくれという。(小雨) 子供が家々や道をワラツトでたきながら回ると、餅を一切れくらいくれる。唱えことばは小雨と同じ。(和光原) 旧十月十日、栗、キミの餅をついて神様に供え、わら鐵砲で庭や田畠をたきながら歌う。「十日夜、十日夜、十日夜はよいもんだ。朝そばきりに腹だいこ。」(下太子)

#### カカシ神

十日夜にカカシアゲをする。それはカカシが一年中畠に立つていて御苦勞さんだから、その御礼に、カカシをこしらえて餅を進せるのである。すなわち、栗かヒエがらでしばつて棒で手を通し、帽子をかぶせたカカシを庭先に立て、そのふところに餅を入れて進ぜる。これは秋のコナシは十日夜頃までにすませるので、お月見をも兼ねているわけであ

る。(下太子)

十月十日の夜、栗か米の餅をついて、その夜はその杵と臼は洗わないで、杵を臼の上に横たえておく。それはカカシガミサンがこれを踏み台にして天にアガツテゆくからだとい。長野原の林では、カカシを庭において、そこに食べもの・ウリ・トウモロコシ等を供えるということである。(品木)

十日夜にはイネやアワのボツチを三本足にして立てて、笠やケンデーを着せたカカシを作り、ニワヘ飾つて供え物を上げて「カカシさん、御苦労さんでがんした」といつて拝む。カカシが田畠で一年中おごとにから、お祝いにお餅を作つて上げるのだとい。カカシはあとでこれを。カカシへの供え物はお膳に餅をのせて、かごやおけを伏せた上に上げる。また、大根・トウモロコシ・米(穂)・アワ・ヒエ・大豆・カボチャ・うどんなどを上げる家もある。それを子供が回つて来て下げ、神社のミョウガなどで鍋をかりて焼いたり煮たりして食べる。(小雨)  
十日夜のかかしは作らない。(長平)

#### えびす講(二十日)

一月のえびす講と同じようにして、十九日の晩に祭る。十二月になると、正月にも続くので「重ねえびす」になるから、十一月中旬にどうしてもやる。新十一月二十日にしたり、旧十月二十日にしたり、まちまちです。(赤岩)

#### 屋敷稻荷(十一月初午)

ウジ神ともい、赤岩神社といっしょにお祭りをする。赤飯を持って行つて上げる。(赤岩) 全然祭らない。(長平)

#### ツジユウダンゴ(三十日)

窓から鬼がのぞつこみに来る日なので、「鬼の目ばたき」になるよう

に、ヒエ・ムギ・米などあり合わせのくずを集めて粉にして、にぎだんごを作りカヤのはしにさして、家の窓ごとにさしておく。(小雨) (一月三十一日の項を参照)

サマンジュウダンゴ (三十一日)

またはミソカダンゴといふ。十一月三十日。ありあわせの適當な粉で、まん丸い団子をつくり、蓋にさして、サマ(窓)とか、出入口のすべてのところに一つずつ飾る。魔除けになるといふ。神々には供えないと。その団子を食べるといふがたかるといつて忌む。またいのうをサマに立てる。天からサマンジイといふ魔物が降りてきても、目が恐ろしいといって入ってこない。(品木)

十二月

事納め (八日)

事始めに準ずる。(品木) 八日餅はしない。(赤岩)

すす掃き (十三日)

ササでススオトコ(ほうき)を一本のみつくり、使用する。これはとつておいて、道ろく神焼きの時燃す。その夜をクロドシといふ。御飯。(品木)

冬至 (二十四日)

カボチャの食いじまい、カボチャを食べれば中気にならないといふ。ユズ湯はユズがないのでたてない。(赤岩) 冬至カボチャといつて、カボチャやコソニヤクを食う。ユズがないのでふつうの湯をたてる。(小雨) からだがゆるまねえようといつて、からなずカボチャ

を食べる。(品木)

オデーシ (太子講) (旧十一月二十三日、四日)

ボタモチをつくつてミイワイ。それを長い蓋の箸で食べる。その箸はとつておいて、その箸で節分の豆をいる。オデーシ様は貧乏で、そんので、長い箸ではさんで食べさせたから、自分たちも長い箸で食べるるのであるといふ。

また二十三日の晩は、雪が降った方がよい。オデーシ様は貧乏で、その上子たくさんなので、食物を盗みに出る。その際、オデーシ様は、片脚のオヤユビがないので、すぐばれてしまう。雪が降ると、その足あとを隠してしまうから。その晩は大雪ほどよい。(品木)

おかげを以て、カヤの長いはしを二本作つて供える。カヤの長いはしはしまって置き、節分に三角形に折つてしまふ。豆まきの豆を紙に包んでおひねりにしたものといつしょに、カギ様に結びつけて置く。初雷の時に食べるといふ。また、タイシさんは子供がたくさんいて、とても充分に食べ物をくれられないで、キッコザ飯(木のくずの飯)をたいてくれたので、昔はキッコザ飯をいたたいうが、実際にしたことは覚えていない。(小雨) 昔、弘法大師さんが山にはいった時、米が足らなくてアズキをませたがおかゆにしかならなかつた。それでアズキがゆを作つて神棚に進せる。また、その時に弘法さんは一尺八寸のはしをうえたので、今でもシで一寸八寸のはしを作り、神棚に上げて置き、あとで三角形に折つて三角マナコにしてイロリの火棚に進せておく。これは鬼ノ目ともいい、魔除けになる。また、弘法さんが山にはいったのはなしよだつたので、足跡をかくすために雪がちらちらと降つた。そこで二十四日の朝降る雪を「弘法さんの足跡かくし」という。(和光原) 長平ではない。(長平)

歳末諸事

## 大掃除（二十四、五日）

大神宮様のお札の来る日にする。（赤岩）

「一十九日につく餅をクモチといって嫌うので、ほかの日につく。」（赤岩）

「一夜松立てるな」といつて、三十一日には松を飾らないで、その前に

飾りつける。カド松をたてない家はない。（赤岩）

松飾り（二十八、三十日）

「一夜松立てるな」といつて、三十一日には松を飾らないで、その前に

飾りつける。カド松をたてない家はない。（赤岩）

大ミソカ

御飯に年こし魚（サケ）をそえ、キンピラ・にしめ等を神様に供える。

（小雨）年取りは遅いほどといふ家もある。年取りの飯を神の鉢に少しこれ、年取り酒をおみきすずといふと、頭つきの魚と共に神棚に上げる。今年の勘定が全部すんだというので、家中で座談会をする。（赤岩）

オタキアゲ

赤岩では大年の晩に、区の人が神社の森に集まって、米一、三合たい

て台に紙を敷いて全部のせ、三峯神社に上げた。魚（イワシ）をそえ

る。はしは立てない。かま神様には何も供えない。（赤岩）

補足資料（4）

お産のこと

むかし（大正ごろまで）は、ロジでお産をした。麦がらを一束も束にしてきて、それをロジにして、その上でお産をした。昭和になつてからは、ゲヤでお産をするようになつた。むかしは産婆はなかつた。うぶゆはたら、ノチノモンは、墓場へするのも本當だが、外側所のすみへ埋めた。今では、墓地か、はだけのきわへでている。（根広）

## 補足資料（5）

どうろくじん信仰  
子供が耳だれになつたとき、わんの底に穴をあけてどうろくじんさんにしんぜると、子供の耳があくといつて、耳だれにいいといふ。

姉の千羽鳥  
姉（稚水姉の熊野神社）の千羽鳥のお札を、味噌おけにはつておくと、味噌のできがいいといわれた。

動物の呼び名  
かましかのことはくらししと。いう。

たぬきのことはもじなと。いう。

さゝぐまのはまみもじなと。いう。

さゝぐまはたぬきの小さいもので、さゝむじなともいつた。まみといふの

は、たぬきはよくなきながら、まみもじなは人をばかしないといつた。（根広）

しょいっこ  
入山では道がわるくて車がつかないので、しょいっこをつかう。たとえば、麦のとりいの場合は、田圃から家まで麥の束をのせてしょいく。

山の人だと十貫くらい、男の人だと十五貫くらい背負うのがふつう。山へこじゆうはんをもつて行くなどにも、しょいっこにつけてもつて行

く。

## ヌイノジョウの弓

世立の山本一家の先祖にヌイノジョウという人がいた。山本仲吉さんのところに、ヌイノジョウの使つたといふ弓が伝えられている。この弓で子供のあたまをこすつてやると、子供の夜泣きが止むという。

## 干草小屋

干草小屋はたけのなかなどにある。干草を入れておく小屋だが、これを建てるには大工の手をへないで、自分の家の人者だけでつくる。世立邊では一ツカは六十坪のことだが、こことより下の方では、四十坪を一つカと呼んでい

ある。

ツカ

田畠の広さをあらわすのに、ツカといふことをつかつた。世立邊では一ツカは六十坪のことだが、こことより下の方では、四十坪を一つカと呼んでい